

青山学院大学

FDフォーラム報告書

青山学院大学の学生意識調査
—この4年間の軌跡—



青山学院大学

青山学院教育方針

青山学院の教育は
キリスト教信仰にもとづく教育をめざし、
神の前に真実に生き
真理を謙虚に追求し
愛と奉仕の精神をもって
すべての人と社会とに対する責任を
進んで果たす人間の形成を目的とする。

青山学院 スクールモットー

地の塩、世の光
The Salt of the Earth, The Light of the World
(聖書 マタイによる福音書 第5章13～16節より)

青山学院大学の理念

青山学院大学は、「青山学院教育方針」に立脚した、
神と人ともに仕え社会に貢献する
「地の塩、世の光」としての教育研究共同体である。
本学は、地球規模の視野にもとづく正しい認識をもって
自ら問題を発見し解決する知恵と力を持つ人材を育成する。
それは、人類への奉仕をめざす自由で幅広い学問研究を通してなされる。
本学のすべての教員、職員、学生は、
相互の人格を尊重し、建学以来の伝統を重んじつつ、
おのおのの立場において、時代の要請に応えうる大学の創出に努める。

目 次

1. 開会挨拶	1
2. 学生意識調査の4年間とその成果について	2
3. 成果報告	6
1) 「学生の意識調査からみる青山学院大学の学生像」.....	6
2) 「学生意識調査の活用事例報告」.....	29
4. 質疑応答と意見交換	46
5. 閉会挨拶	48
6. 資料	50

2013年度青山学院大学 第2回 FDフォーラム

「青山学院大学の学生意識調査 ―この4年間の軌跡―」次第

日時：2013年7月18日（木） 13：00～15：00

場所：青山キャンパス： 17309 教室（17号館3階）

相模原キャンパス：E101 教室（E棟1階）

司会：全学FD委員会 副委員長 加藤 篤史（経営学部教授）

1. 開会挨拶

学長 仙波 憲一

2. 学生意識調査の4年間とその成果について

全学FD委員会委員長

学務及び学生担当

副学長 長谷川 信

3. 成果報告

1) 「学生意識調査からみる青山学院大学の学生像」

谷口 雅子（株式会社ベネッセコーポレーション 大学事業部 東日本営業課 課長）

2) 「学生意識調査の活用事例報告」

稲積 宏誠（社会情報学部長）

4. 質疑応答と意見交換

5. 閉会挨拶

副学長 長谷川 信

2013年度 第2回 FDフォーラム

青山学院大学の学生意識調査 —この4年間の軌跡—

2013年7月18日（木）13：00～15：00

加藤：全学FD委員会副委員長の加藤と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

まず、お手元の資料の確認をさせていただきます。お手元の封筒の中に本日の次第も含めた冊子とアンケートが入っております。もし不足がございましたらお知らせください。また、アンケートはお帰りの際にご提出いただければ幸いです。資料のほうは大丈夫でしょうか。

それでは、次第に従って進めさせていただきます。まず、青山学院大学学長仙波憲一より開会のご挨拶をさせていただきます。仙波学長、よろしくお願いいたします。



司会：加藤篤史経営学部教授

1. 開会挨拶



開会挨拶：仙波憲一学長

仙波：皆さん、お忙しいなかおいでいただきましてありがとうございます。学長を務めております仙波と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

きょうは、FDフォーラム「青山学院大学の学生意識調査 —この4年間の軌跡—」という本学で試みてまいりましたさまざまなアンケート調査に基づいて我々として一つの方向性をだして、またいろいろ工夫をしているというご報告でございます。

皆様方がよくご存知のとおり、今、教育の質の改善ということが叫ばれております。わかるようでわからないような言葉ですが「教育の質とは何なんだろう」ということで、その中の一つを私なりに考えるところでは、いままでの学生たちは授業を受ける時に受身で、先生方が一方的にお話をして学生はそれをただ受けるというような形です。

ところが今は、学生たちが授業の中で主体に取り組んで発言をしたり問題を考えたりするという、いわば学生の受身から主体的な学びへの変換ということで、この変化に対して

我々教員がどういうふうに対応できるかと、また学生たちが大学に対してどういう希望を、あるいは授業に対してどういう期待をしているのかということ、こういう調査をもって知ることによって、教育の質に転換をする、それに活用していきたいと、こういう一つの流れがございます。

また同時に、皆様方は私よりもよくご存知だと思いますが、従来は「研究教育」という言葉よく使われましたが、今は「教育研究」という言葉に変わってきております。教育研究というのはおそらく教育をするための研究も一つの要素として考えていこうということだと思っております。したがって、今日のようなFDフォーラムというのはまさに教育研究の場であるとお考えいただければ、こういったフォーラムの意味があるのではないかと理解してございます。

このような視点のもとできょうのフォーラムで皆様方と一緒に議論して考えることができれば大変意味があると思いますので、限られたお時間ではございますが、よろしくお付き合いをいただければありがたいと思っております。簡単ではありますが、開催にあたりましてのご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

加藤：続きまして、全学FD委員会委員長、学務及び学生担当、副学長の長谷川信より、本学のFD活動と学生意識調査についてご説明させていただきます。長谷川副学長、よろしくお願いいたします。

2. 学生意識調査の4年間とその成果について



学生意識調査の4年間とその成果
について：長谷川 信副学長

長谷川：皆さんこんにちは。副学長の長谷川と申します。私からは、学生意識調査、この4年を振り返っての調査の成果、今後の課題についてお話しをさせていただきますと思います。

この調査につきましては、株式会社ベネッセコーポレーション様のご協力のもとで実施しており、全国データとの比較もそれによって可能になったということがございます。ここでベネッセ、特に谷口さんにここで感謝をいたしたいと思っております。

それから、こういうデータを公表して多くの皆様と議論をしていくこと自体、これからの教育改革にとって非常に重要な意味を持つと考えまして、このようなシンポジウムをもっているところでございます。

それでは、お手元に資料があるかと思います。この調査実施の概要について見ていただきますと、本学は、9学部で学部の学生は1万7,000名ぐらいでございます。1学年4,000名前後という規模の大学ですが、2008年に国際政治経済学部がこの調査を始めました。

先ほど挨拶がありました仙波学長が学部長時代に始めたものでございますが、その後いくつかの学部がこの調査を取り入れ、大学としてもぜひとも学部で調査を実施してもらいたいという案内をしておりました。そのような問題意識が2009年ぐらいいかなり生まれていました。それを受けて2010年に全学部で実施することになり、全学FD委員会のもとでの調査が始まったのです。その結果、2013年3月の卒業生調査で同一人の4年間の経年データがとれるようになりました。

この学年別調査目的については、「学生にとって」、「大学にとって」という形でまとめてありますのでご覧いただければと思いますが、大学にとっても学生にとっても役立つ仕組みをつくっていきたくて考えております。そして、それぞれの学生に対しては個別の調査結果のフィードバックが送られることになります。

2 調査実施概要 (データの蓄積について)

年度	1年生	2年生	3年生	4年生
2008	1学部 【国】			国…国際政治経済学部 経…経済学部 総…総合文化政策学部 社…社会情報学部
2009	4学部 【国】【総】【経】【社】	1学部 【社情】		
2010	全学部	4学部 【国】【総】【経】【社】		
2011	全学部	全学部	全学部	全学部
2012	全学部	全学部	全学部	全学部
2013	全学部	全学部	全学部	全学部

■ 2010年度より全学的に実施
 ■ 2013年度4年生の意識調査実施で1年～4年生までつながる

3 学年別の調査目的

- 1年次生(4月実施)
 (学生にとって)
 学生生活の目標設定、学びと進路のつながりを意識するきっかけとする。
 (大学にとって)
 入学時の意識、期待感を把握し、学生の意識の変化を測る起点のデータとする。
- 2年次生(4月実施)
 (学生にとって)
 学生生活の振り返りをもとに、2年次以降の目標を再設定するきっかけとする。
 (大学にとって)
 1年間の学生生活の満足度・成長感を把握し、教育改善・学生生活の充実につなげる。
- 3年次生(4月実施)
 (学生にとって)
 自己分析の結果にもとづいて、進路就職に結びつく、自己PRのポイントを明確にする。
 (大学にとって)
 学生生活の満足度・成長感と学生が身につけた能力を把握し、教育改善・学生生活の充実につなげる。
- 4年次生(3月実施)
 (大学にとって)
 4年間の学生生活の満足度・成長感、学生が身につけた能力、本学の教育への評価などを総合的に把握し、教育改善・学生生活の充実につなげる。

学生意識調査の経緯に沿って少し問題意識のところを話していきたいと思います。本学の場合には2008、2009年にFD推進委員会、全学FD委員会というFDのための組織ができて、FD活動として何をしようかという手探りの時代でありました。

もちろんそれ以前からFD活動そのものはいろいろ行われていたわけですが、学生がどのような授業を求めているのかをFD活動の前提として知りたいというところがありました。授業アンケートというものは既にかかなり高い普及率で行われておりました。ただ、これはあくまでも個別の授業の調査であり、評価であるわけです。

学生がどのような授業を求めているのか、さらに学生は大学や学生生活に何を求めているのかを知りたくなり、さらには全国比較した特徴、それから学部の特徴はどのようなところにあるのかを知りたくになります。それによって大学の改善や方向性を考え、さらに客観的データに基づいて全学的な議論をしていきたいという問題意識があったと思います。



先ほどの調査実施概要にありましたように、2010年度以降、全学FD委員会がすべての学生を対象に意識調査を実施する段階に入っていました。そして、卒業生調査が行われ、経年変化の分析ができるようになり、したがって本格的に学生の満足度の把握というものができるようになったと思います。

ベネッセさんの調査は学生の満足度を測っていくところが特徴だと思いますので、そういう特徴を活用していこうと考えています。

もう一つは、学生個人へのフィードバックを活用していきたいと思います。特にキャリアデザインへの支援です。ここはまだこれからの分野なのですが、今後、進路・就職センターと連携して推進していきたいところがございます。

以上が現状での到達点で、具体的にどういう活用が行われているかは、このように全学、各学部さまざまな取り組みになっております。

その利用の方向性を大きくまとめますと4点ぐらいになると思います。一つは教育支援

であり、各学部・学科におけるカリキュラムの満足度、それから学生の成長、身につけた能力というものを知っていき、それを教育改善に結びつけていくということです。

もう一つの柱は、やはり学生支援、特にキャリアデザインの支援になろうかと思えます。これは学生の自己認識・自己評価を明確にし、さらにはフォローアップ講座によるフィードバックをしていく、これは学生ポータルでも動画を配信するようにしています。

もう一つは広報活動の面でございまして、父母懇談会、高校の進路指導の先生方への説明会等の資料として有効であると考えております。最後が大学の方針・戦略に関するものでございまして、この後に触れます学長基本方針、学部・学科の人材育成方針というところとの整合性を見ていくことになるかと思えます。

ここにありますように、仙波学長が掲げています基本方針として「幅広い視野でものごとを考え、常に新しい可能性を探求し学び続け、自分の個性や能力を高め、社会に対して積極的に発信していく人物像」が打ち出されています。この人物像を今回の学生意識調査の中で明らかになった学生の特徴とかさね合わせてみますと一定の整合性をもった部分が出てくると考えています。

それからカリキュラムの面でも、全学共通教育である「青山スタンダード教育」の目的と照らして今後どのようにカリキュラムを考えていくかというところに反映させようとしております。

以上のような利用形態を考え、さらに今後の展望として考えていきますとやはり、大きくは教育支援と学生支援という2つの柱になります。さらに、それを支えるものとしてFD委員会活動によって教職員が共通意識を持つことが必要であり、さらにそれを外部に発信してステークホルダーと意識を共有し、目指す大学像・人物像につながる教育を行っていくという形で考えることができると思います。もちろんこういう仕組みは継続的な学生意識調査の実施の中で進めていく必要があると思います。

それでは、この後、具体的な調査結果、学部での事例についてのお話をいただきたいと思えます。よろしくお願いたします。

加藤：それでは、次に成果報告に移らせていただきます。初めに、株式会社ベネッセコーポレーション大学事業部東日本営業課の谷口雅子課長から、「学生意識調査からみる青山学院大学の学生像」というテーマでご報告をいただきます。谷口さま、よろしくお願いたします。

3. 成果報告

1) 「学生の意識調査から見る青山学院大学の学生像」



成果報告：株式会社ベネッセコーポレーション谷口雅子課長

谷口：ベネッセコーポレーションの谷口と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

私のほうでは、長谷川先生からのご発信を受けまして、具体的な調査内容、結果報告ということで進めさせていただきたいと思います。お手元にごございます資料の長谷川先生のページの次から資料がございまして、お手元にご用意いただきたいと思います。ご紹介する資料が一部お手元の中にない場合がございますので、その際はお声がけしますので前のスライドをご覧くださいと思います。

では、調査の表紙がございまして、2ページ目、スライドNo.2をご覧くださいと思います。ここでは、目次をご紹介しているのですが、きょうの流れを簡単にご説明したいと思います。

まず、内容の2では1年生のデータをご紹介します。ここでは、青山学院大学様がどういう学生を受け入れているのか、どういう特徴を持っているのか、何を期待して入ってきているのか、こういった起点となるご報告をしたいと思います。

内容の3に移りますと、2年生ですので、主に1年間教育を受けた結果をご報告いたします。それから、3年生に移りまして同様にご報告をした後に4年生のデータをご報告いたします。こちらは、2012年度ですので卒業してしまった学生のデータですが、結果的に青山学院大学はどのような学生を輩出したのかというあたりを見ていきたいと思います。

4年生までのデータとしては、得たデータを確認していくというような流れを進めていきたいと思いますが、内容の6と書いた所については、長谷川先生のご発信を受けまして、これから青山学院大学の満足度をより高めるためにどのような観点があるかというところをいくつか分析をしてみましたので、そういう視点でご報告を進めてまいりたいと思います。

なお、受検人数、受検率につきましては、簡単ではございますが、目次の下に付けてい

ますのでご覧いただきたいと思ひます。特に1年生につきましては96パーセントという高い受検率になっておりまして、他の学年でも60パーセントを超えているというような結果になっております。これは日頃の教職員の皆様のご協力のおかげかと思ひております。この場を借りて御礼申し上げます。

それから、1年生、2年生、3年生ともに全国平均をだしてあります。そちらにつきましては、右に母集団を書いてありますので同様に確認いただきたいと思ひます。1年生は全国で110校、9万3,529名にご参加をいただいております。これが比較対象となっております。

5 学生意識調査の意味合い(対教職員の皆様)							
学生の意識・志向				学力・能力			
1年生	志望度	進学・入学理由	大学への期待	学習習慣(高校時)	進路意識	基礎学力	社会が求める力
入学時の大学への期待・本人の現状に対し							
2年生	満足度 充実度 お勤め度	力を入れたこと	成長実感・ギャップ	学習習慣	進路意識	基礎学力	社会が求める力
3年生	満足度 充実度 お勤め度	—	成長実感・要望	—	進路意識	能力	社会が求める力
4年生	満足度 充実度 お勤め度	力を入れたこと	成長実感・要望	学習習慣	就職結果	—	大学で身に付いた力

大学全体・学部などの学生像を把握し
 * 大学は期待を裏切っていないか？
 * 青山学院大学で成長できたか？
 * 学生の潜在・顕在ニーズは何か？

PDCAサイクルの“Check”機能

2013年7月18日 第2回FOフォーラム「青山学院大学の学生意識調査～この4年間の軌跡～」

では、早速ですが、スライドNo.5をご覧ください。学生意識調査の意義につきましては長谷川先生から少しご紹介いただきましたが、その意味合いというところをもう一度簡単にご説明したいと思います。

学生意識調査の意味合いですが、一つは学生向けの個人のフィードバックというお話をいただきました。もう一つは、仙波先生も言われたとおり、教育改善というところに対して一つのデータを提出するという意味合いがあるかと思ひます。

今回の構成ですが、まず起点となる1年生については、学生の意識面、特に志望度ですとか進学理由、何を大学に期待しているのか、高校時代にどのような学習習慣をもってきた学生が入ってきているのか、学生は進路をどのように捉えているのか、このようなことを主に問うています。それと併せて学力面も調査をしていますが、それにつきましては今回の報告からは省かせていただきます。

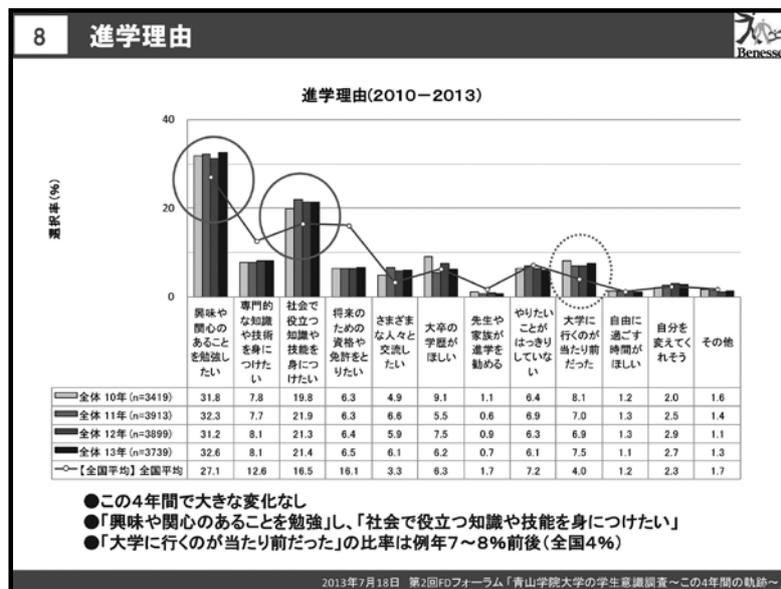
そして、2年生・3年生になって、受け入れた学生がどのように満足しているのか、大学ではどのようなことに取り組んでどのような力を身につけていっているのか、大きな項目としてはそのようなことを問うております。

ですので、まずどのような学生を受け入れたのかということを確認していただきまして、その子たちがどのように成長していっているのか、満足しているのか、こういったあたり

を順次見ていただきたいと思っています。

6ページのスライドにいきますと、かなり膨大なデータをとっていることで項目を載せています。今、まさに各学部への報告会を進めているところでして、実は各学部ともに特徴も違えば課題も違って成長過程も違っているというようなデータになっております。

ただ、今回は青山学院大学全体としてということで、青山学院大学の特徴が出ている部分ですとか、主に指標になるような部分のみを抜粋して簡単にご報告してまいりたいと思います。



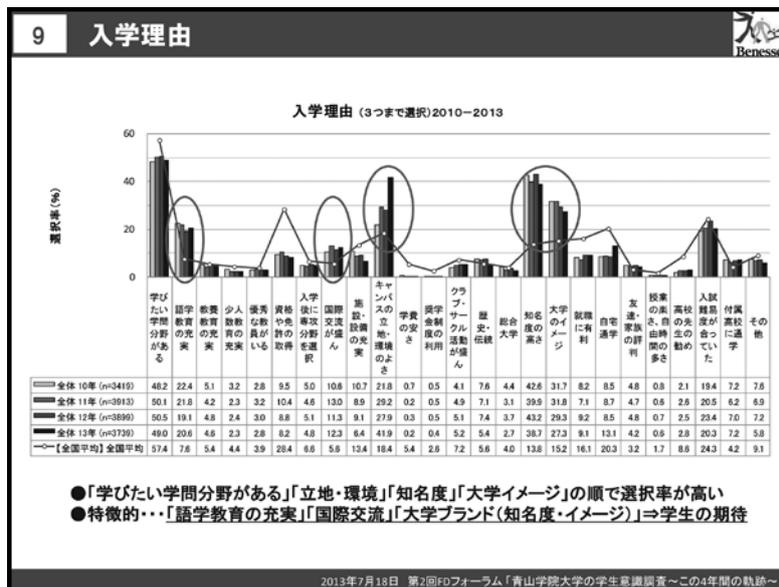
では8ページに進めてください。ここから1年生のご報告を進めていきたいと思っています。まず、1年生はどういう学生を受け入れているのかといった観点ですが、こちらは進学理由ということでデータをとっておりまして、ここでは左から順に興味や関心のあることを勉強したい、専門的な知識を身につけたいなどいろいろな選択肢があります。この中から一番強いものを一つ選んでくださいというふうにしております。ですので、グラフは選択率を示しているというふうにご覧いただきたいと思っています。

折れ線グラフは、これは全部共通ですが全国平均になっています。まず対全国という観点で見えていきますと、特に全国平均より高い2つの項目に丸をしておりますが、「興味・関心のあることを勉強したい」という学生がきていると、それから一つ飛びまして「社会で役立つ知識や理論を身につけたい」、こういった意向が強いということです。

グラフを大きく下回っているものが2つありまして、左から「専門的な知識を身につけたい」もしくは「将来のための資格や免許をとりたい」、各大学様に将来のための資格や免許をとりたいというような項目は一定の比率があるものですが、青山学院大学の場合は資格より、学びという点に興味がある学生が集まっていると言えるかと思えます。

また、点線で囲っている部分があります。4年間のグラフになっておりますが、大学に行くのが当たり前だったというのが一定数いることもここでわかるかと思えます。このあ

たりについては最後のくぐりで触れていきたいと思います。



こちらは入学理由を掲載しております。たくさんの項目がありまして後ろのほうの方は見えないかと思いますが、まず一番の入学理由は何かということで、一番左側の項目ですが、「学びたい学問分野がある」という選択率が高い状態になっております。

ちなみに、この中から3つまで選んでくださいというような質問になっています。ですので、一番強い入学理由といたしますと学びたい学問分野があるということが挙がっております。

ここから青山学院大学の特徴ということで折れ線グラフを上回っているものを見ていきたいと思います。大きな特徴ですが、左から2つ目、これは何かといたしますと「語学教育の充実」で、全国平均では7.6パーセントの選択率ですが、青山学院大学の場合は10年度から4年間、平均して20パーセント前後の選択率になっております。これはイメージどおりかと思うのですが、こういうところが出ております。

同様に丸を打っている所ですが、こちらは国際交流が盛んだという選択肢になっております。ですので、国際的なイメージということで入学理由が挙がってきています。これが特徴であると言えます。

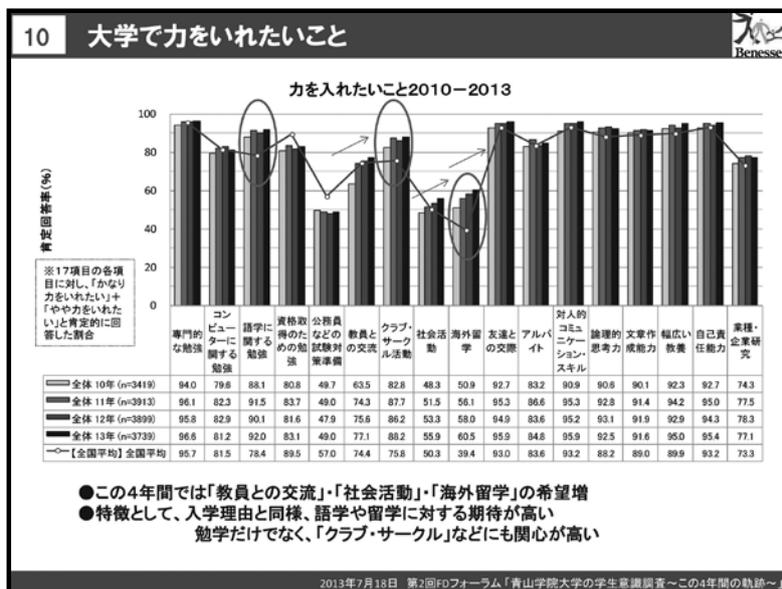
また、次に囲っている所は今年度急に伸びているところになります。これはキャンパスの立地、環境の良さということになりますが、今年のキャンパスの再配置を受けて急激に選択率が上がっています。2010年度は21パーセントの選択率でしたが、今年度は41.9パーセントになっていますので、過去と比べますと約2倍になっており、これが今後どのような影響を及ぼすかというのは今後確認していきたい面になります。

それから、青山学院大学の最大の特徴は最後の丸を打っている2つになります。これは何の選択肢かといいますと、知名度の高さと大学のイメージという選択肢になっております。これは約100校の大学に参加していただいているわけですが、最も高い選択率になっております。

知名度の高さというところは約40パーセント、大学のイメージという点では約30パーセントの選択率になっておりますが、例えば知名度の高さの点では、いろいろな大学がある中で次が30パーセントぐらいと、10パーセント引き離しています。ここがおそらく大学ブランドという点になろうかと思いますが、青山学院大学にとってはこの大学ブランドがいろいろなところに影響していくということは覚えていただきたい点になります。

まず、大学の志望度という面をご確認いただきたいと思えます。こちらは3分割して見ていただきますが、左は大学の志望度、つまり青山学院大学を志望していた割合になります。一番左端は青山学院大学が第一志望の割合になります。これは4年間通して大きな変化はありませんが、40パーセント前後という形になります。実は全国平均を少し下回っている状態ですが、一般入試、センター入試の比率が少し高い状態ですのでこのような形になります。

次も前をご覧くださいと思いますが、今、センターと一般比率が少し高いのというお話をしましたが、青山学院大学を第一志望とした割合は、この黄色が推薦入試、オレンジが内部進学になります。左端の水色が一般入試、センターが紺色になりますので、センターと一般は青山学院大学を志望していたのは20パーセントぐらいになります。推薦入試の学生は8割が第一志望であったという形になります。この比率が志望度に影響していくことになります。



続いて10のスライドをご覧ください。これは青山学院大学の学生は何をやりたいと思って入学しているのかという点ですが、入学段階でも語学の勉強や国際交流に期待しているというのが挙がりましたが、ここでも同様の傾向が見られます。

同じように折れ線グラフは全国平均です。いろいろなものが高いのがわかるかと思えます。一番左端が専門的な勉強に取り組みたいという選択肢ですが、この棒グラフが何を示しているかといいますと、「専門的な勉強に力を入れたいですか」というような質問に対して「かなり力を入れたい」「やや力を入れたい」、つまり意欲的な学生の割合を示してお

ります。

ですので、専門的な勉強になりますとだいたい96.6パーセントの学生が意欲を持っているという形になります。ただ、全国的にみても95.7パーセントの学生が当然専門には力を入れたいという回答になっておりますので、これは平均的な形になっています。

このようにしまして特徴的なところをピックアップいたしますと、やはり棒グラフが折れ線グラフを上回っています。丸を入れている一つ目、左から6つ目は語学に関する勉強ですが、入学者の92パーセントがここに力を入れたいと、意欲的であることがわかります。

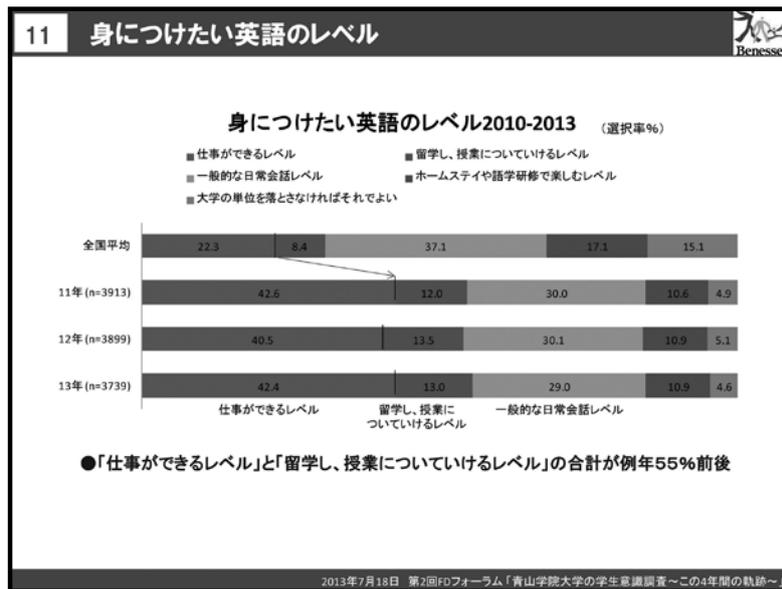
丸を入れている2つ目ですが、これは、もう一つの特徴と言えますが、クラブ・サークル活動に力を入れたいという学生も全国と比べると比較的多いということです。つまり、勉強には力を入れたいというところが多いのですが、今、クラブ・サークルはなかなか加入率が伸びないところもあるかと思うのですが、そういう面では比較的クラブ・サークル活動にも意欲的な学生が多いと言えるかと思えます。

もう一つは、海外留学ということで語学に関連しますが、丸を打っている海外留学という点で意欲的な学生が多いことになります。これが全国と比べると特徴的であると言えるかと思えます。勉強だけではなく、課外活動にも意欲的であり、語学や留学の興味も強いということです。

それから、4年間を通して少し傾向が変わってきているところを見ますと、上向きの矢印を入れている一つ目「教員との交流」、これは3年間上昇してきましたので今年度はどうかなあと思いましたが、やはり教員との交流に力を入れたいという学生が増えておりました。これは全国でも同様の傾向があります。教員と近い距離で勉強をしたいというようなニーズが高まってきていると言えそうです。

もう一つの上向きの矢印は社会活動の面です。これはボランティアなどを指しますが、こういう点でもニーズが挙がってきています。海外留学は、もともと高ののですが、それも4年間を通して上昇してきていますが、これは特に学力の高い大学において顕著な傾向になっております。

ということで、大学に期待していること、そして本人が力を入れたいこと、語学、留学、国際交流、こうしたことに加え、近年は先生との交流を期待しているというところが出てきています。

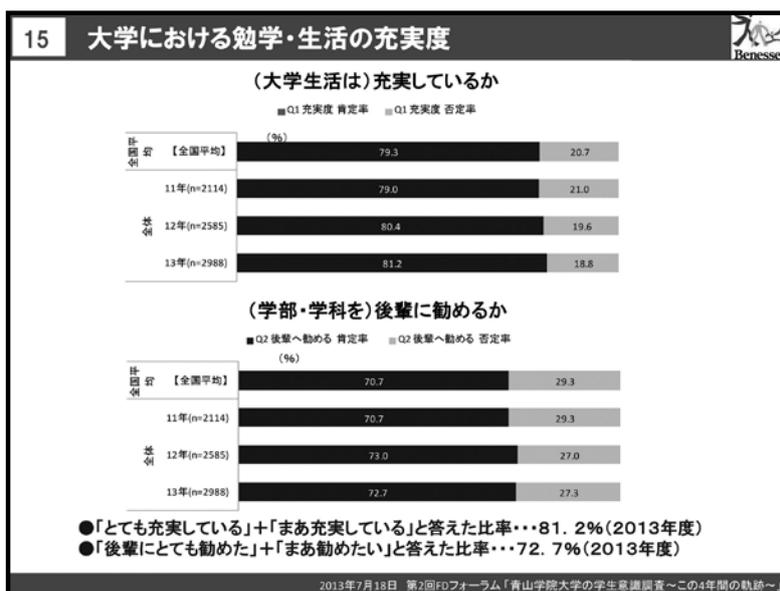


続きまして、資料11のスライドをご覧ください。では、「期待の高い語学についてどれぐらいのレベルを目指しているのか」これも特徴的なのでご覧いただきたいと思います。こちらは身につけたい英語のレベルで「どれぐらいを目指しますか」という点を聞いております。

こちらは横のグラフになっておりますが、全国平均、青山学院大学全体の3年間のデータを載せております。一番左端がビジネスレベル、仕事ができるレベルです。この選択率を示しているわけですが、全国平均としては22.3パーセントの選択率になっています。それが青山学院大学の場合は約倍の40パーセント台前半という形になります。留学して留学先の授業についていけるレベルまでを含めると半数以上の学生がそういうレベルを目指しており、ここに高いニーズがあることがわかるかと思えます。ちなみに、一番高いのは国際政治経済学部で、70パーセントの学生がビジネスレベルを目指したいという形になっております。

いったんここまでで1年生のご報告といたしたいと思えます。まとめますと、勉強だけではなくて課外活動にも熱心な学生が入ってきている。それからなんといっても青山学院大学ブランド、これについては皆さまが培ってこられたブランドになるかと思えますが、ここに大きな信頼を寄せている。それから、やはり青山学院大学といえば語学、国際交流、これはブランドの一部になっているかと思えますが、大きな期待が寄せられているという形になっています。

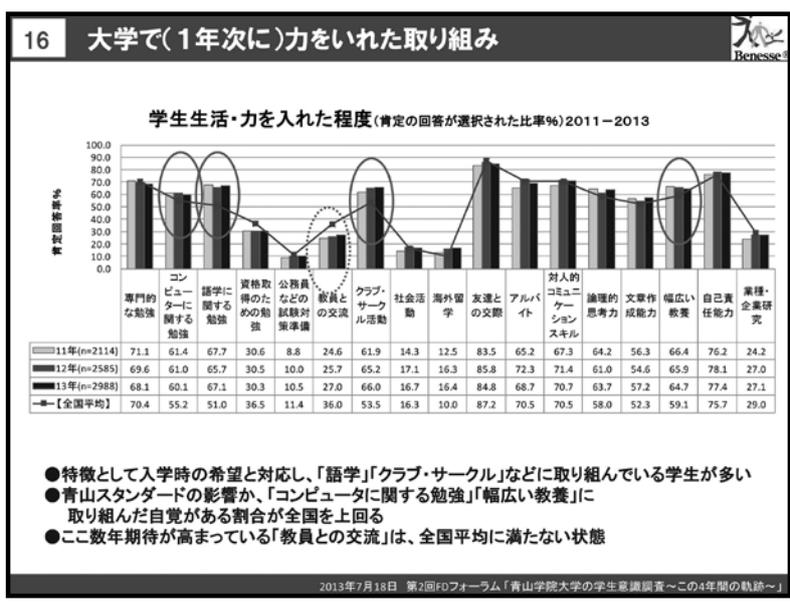
では、こういう期待を持って入ってきている学生は、2年生ではどういう感想を持っているのかという点をご覧いただきたいと思えますので、15のスライドをご覧ください。



こちらでは、「大学における勉学生活の充実」というタイトルをつけているわけですが、こちらは学生に「今、あなたの大学生生活は充実していますか」「今、所属している学部・学科をお勧めしたいですか」ということを聞いております。それに対してイエスと回答した学生の割合が濃い色の所になっております。

上のグラフをご覧いただきたいのですが、先ほどと同じく、全国平均とこの3年間の青山学院大学の数字を載せております。では、「充実しているか」に対しましては、13年度と書いてある所をご覧いただきたいのですが、81.2パーセントの学生が充実していると書いています。ただ、全国平均はどこの大学もだいたい80パーセントぐらいを示しますので、ここにおいては平均的な数字になっております。

下段に移りますと、「今、所属している学部・学科を後輩に勧めたいか」この点につきましては、13年度は72.7パーセントで全国平均を少し上回るような形になっておりますが、平均的な数字になっているかと思えます。ただ、こちらの数字は少し意味があるかと思っておりますので、後で触れたいと思えます。



では、次の16のスライドをご覧くださいと、1年生の時に何に取り組みたいか、何に力を入れたいかということを知ったわけですが、同じような聞き方で、「この1年間、何に力を入れましたか」という形で学生に質問をしております。同じ項目ですので先ほどはこれを載せていたというふうにご覧いただきたいと思います。

同じような見方になりまして、それぞれの項目に対して「力を入れた」「とても入れた」「やや入れた」という肯定的な回答をした割合を棒グラフにしております。折れ線グラフは全国の数字になっています。

では、特徴的な面をピックアップしていきたいと思います。左から2つ目「コンピュータに関する勉強」ということですが、こちらが全国をやや上回っています。情報系ですとここが出てくるのですが、全学的に全国平均を上回っていることで一つ考えられるのが青山スタンダードの取り組みかと思っています。

ここに載せてはいませんが、他の所でも情報スキルが身についた、ITスキルが伸びたというようなデータがたくさん出てきて、そこは青山学院大学の特徴になっております。1年間の情報スキルの取り組みでスキルがグッと上がっていくと、そこがいろいろ特徴として出てくるのが一つの特徴になっております。

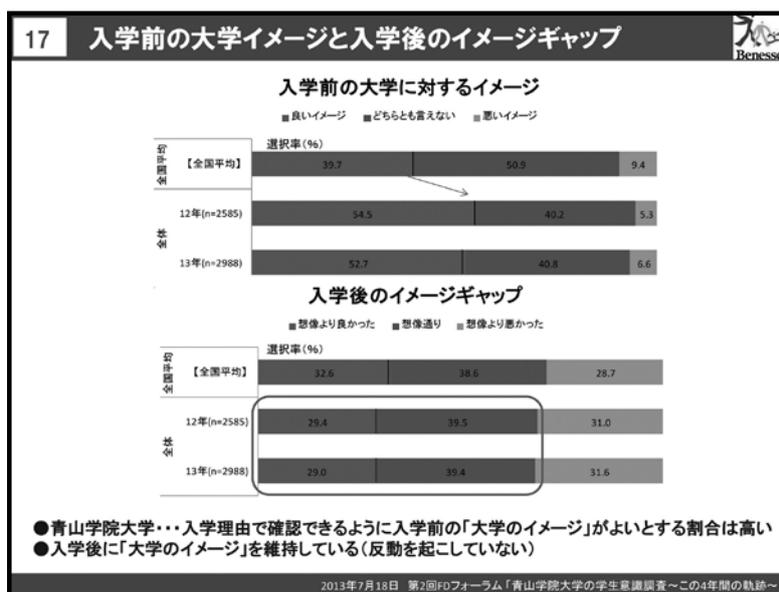
2つ目、丸を打っていますが、語学に関する勉強ということで、これに力を入れたという割合が全国では51.0パーセントに対して、青山学院大学は67.1パーセントの学生が力を入れたということです。当初の期待どおり、もしくは希望どおり、力を入れることができた、もしくはそういう環境であった、ということが言えるかと思っています。

飛びまして、同じく丸を打っているクラブ・サークル活動がやはり全国平均より大きく出てきます。ここについてはやはり、当初の希望を叶える環境にあった、もしくは叶えることができたということが言えるかと思っております。

右から3つ目「幅広い教養」、こちらにつきましても全国平均を5パーセントぐらい上回っているわけですが、やはり青山スタンダードに取り組んだ結果、教養教育というところ

ろに取り組んだ結果、こういった実感も出てきているのかと思います。

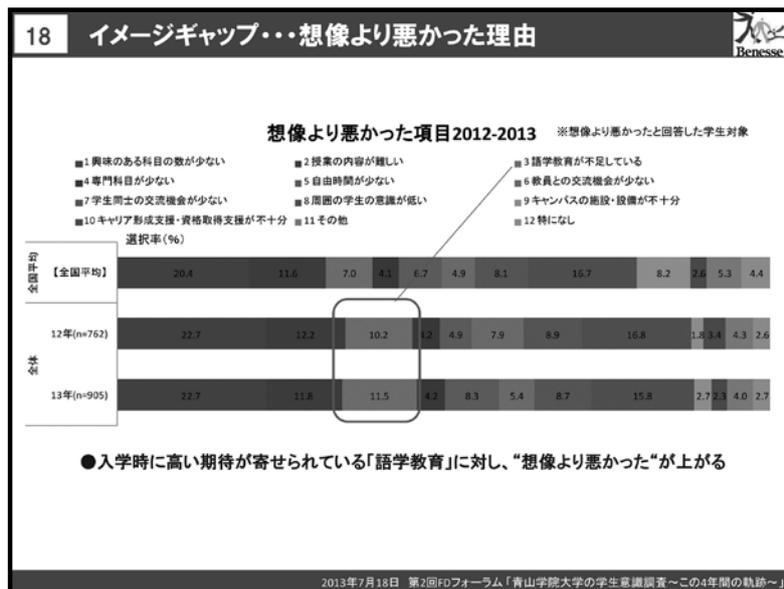
まず良いことをお伝えしてきたわけですが、一点、課題といたしますか、少し弱いのではないかといいところは、大きな大学ですので仕方がない面もあるかと思いますが、ちょうど真ん中の辺りに教員との交流というところがあります。ここは力を入れた程度、全国を約10パーセント下回る結果になっています。ですので、学生が積極的になれなかった、もしくはそういう環境ではなかった、そのような捉え方ができるかと思います。



では、対ブランドに対する期待といたしますか、そういう面はどうだろうということ、17のスライドをご覧ください。17は、入学前のイメージと入学後のギャップというところで取り上げてきました。実は、大学に対してどのようなイメージを抱いているのか、そして、そのイメージが入学後にどのように変化したのかということの一つ、着眼点としては非常に大事なところになっておりまして、ベネッセの全国調査においても一つの大きなテーマになっております。

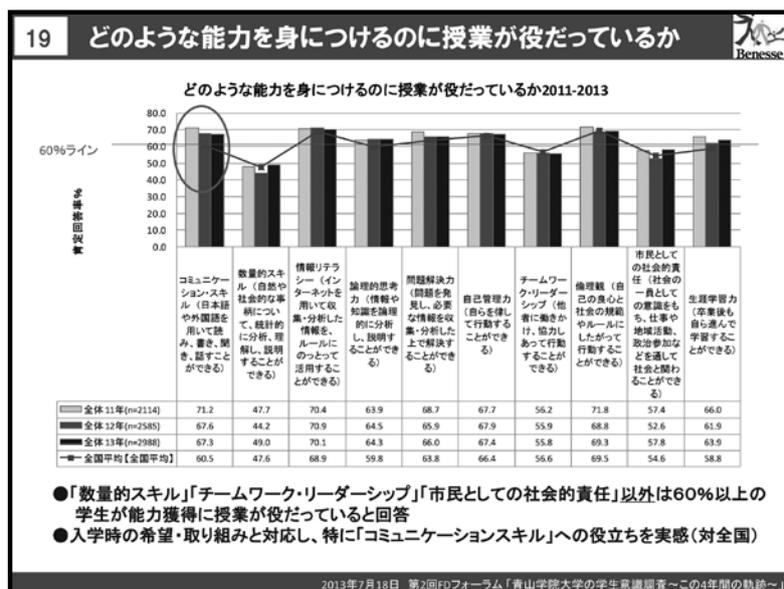
青山学院大学に対して入学前にどういうイメージを抱かれているか、細かい項目ではないのですが、良いイメージか、どちらともいえないか、悪いイメージかといいますと、全国と比べますと良いイメージの学生が多いです。これはもうブランドですとか今おっしゃったところの期待だと思いののですが、入ってくるときは良いイメージで入ってくる学生が多いと言えます。

私どもがいろいろな大学のデータを見てご報告などをしていきますと、良いイメージを持ちすぎますと反動で入学後のイメージギャップを起こしてそれが「お薦めしない」に変わってくるというデータがいろいろ出てくるのですが、その下のイメージギャップという所をご覧くださいますと、「想像より良かった」「想像どおり」というところが全国とあまり変わらないです。ですので、入学前のイメージを維持している、反動を起こしていないということが一つ大きな意味があるのではないかと、「入学前のイメージが壊れない」こちらはそういう環境であったと言えるのではないかと思います。



ただ、気になるところがございますので、「想像より悪かった」という学生が何をもって悪かったのかというところを18のスライドで取り上げてみました。「何でイメージギャップを起こしたのか」という点です。こちらですが、選択肢がたくさんありますので説明を省きますが、丸を打っている所だけご覧ください。

全国と比べてどこが特徴的なのか、大きく数字が出ているわけではないですが、違うところを探しますと、前のスライドでいきますと黄緑の所、お手元の資料ですと丸を打っている「語学教育が不足している」という所です。ですので、やはり入学前の期待も高いですし、「青山学院大学といえばこれ」というところでまだ物足りないというような声が挙がっているのかと思います。



では、視点を変えまして19のスライドに移りますと、どのような能力を身につけるのに授業が役に立っているのかという点を見ます。1年生で受けた授業が自分のどのような能

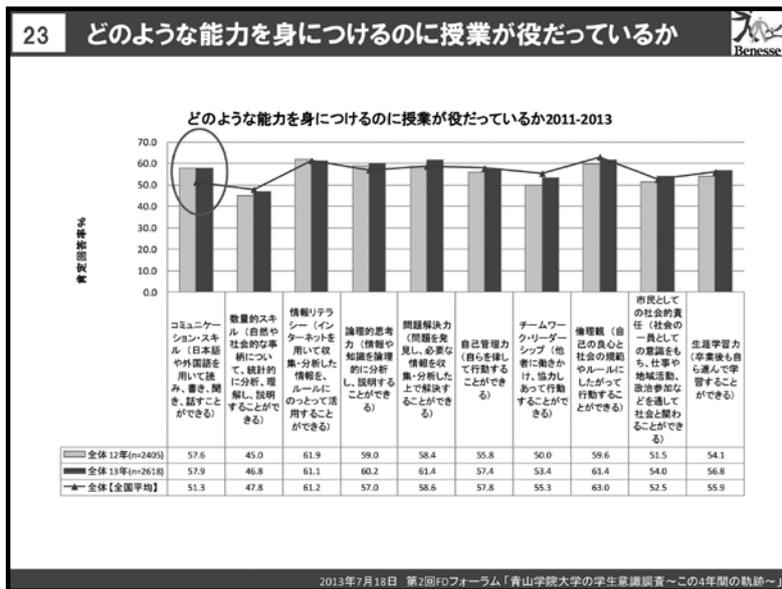
力をつけるのに役立っているのかという点になります。目安として半数以上ということで60パーセントの所にラインを引いているのですが、同じような見方で折れ線グラフが全国平均になっています。

これを見ますと、いずれの項目もやや全国平均的なのかと思われませんが、一番左端のコミュニケーションスキルは、「日本語や外国語を用いて読み書き、聞き・話すことができる」これは全国60パーセントぐらいの学生が「役に立っています」ということに対し、青山学院大学は67.3ですので、やはり語学に対する取り組みがここを上げているのかなというテーマになっております。

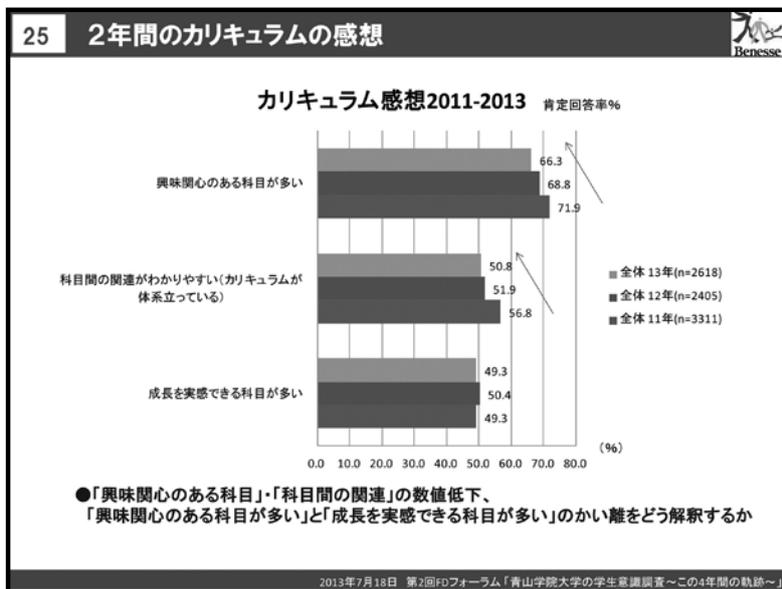
実は、少し上回っているところとしましては、丸を打ってはいませんが、真ん中にあります「論理的思考力」「問題解決力」というところも全国を上回っております。押し並べてみるとこうですが、例えば国際政治経済学部、1年生からディスカッションなどに取り組みますが、学部でいきますとここが一番飛び出ている学部になります。ですので、1年生からディスカッションですとかゼミ形式というところが普及していきますと、ある意味、こういった力が役立っているという回答になるのかなあ、ということが言えると思います。

簡単ではございますが、2年生以上ということで、入学当時の期待もしくは希望に対して、叶えられる環境がある程度充実していたりお薦めしたりという結果につながっているところがあり、授業も語学に関して反応しているということがわかりました。

では、24は3年生ですが、こちらは簡単に進めてまいりたいと思います。24のスライドでは、これは3年生ですので1年生・2年生同様の教育がある程度終わったところになるかと思いますが、それを受けた段階で充実しているのか、お薦めしているのかを聞いております。こちらにつきましては、やはり全国と同じように「充実している」「お薦めしている」ということですが、やや高くなっているところがあります。ですので、1・2年生を通してそれなりの環境で過ごすことができているということが挙げられるかなというところ です。



23のスライドになりますと「どのような能力を身につけるのに授業が役立っているか」、先ほどの2年生と同じようなテーマで聞いておりましたが、やはり語学といったところの影響がでて、一番左端のコミュニケーションスキルの数字が良く出てくるところです。ですので、2年間を通してある程度語学の取り組み感というところが出てきているかと思えます。



2年間ですので、大学生活を半分終えた段階で彼・彼女らが授業に対してどういう評価をしているかというところを25・26で見ていきたいと思います。

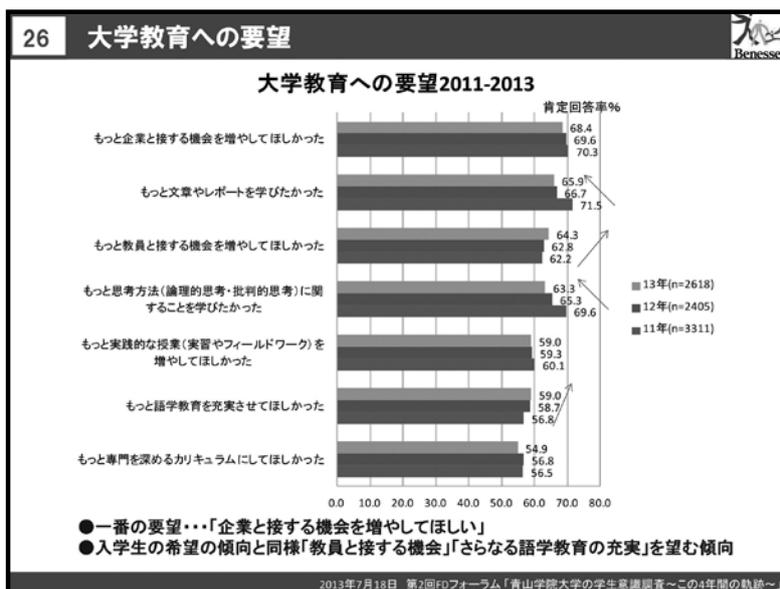
この2年間、カリキュラムの感想という点でどういう評価になっているかというところですが、この3つを抜粋しております。「興味・関心のある科目が多い」これに対して肯定的に回答している割合、それから、今、ナンバリングなどが進んでいると思いますが、「科目間の関連がわかりやすいかどうか」「成長を実感できる科目が多いかどうか」、それに対

して肯定的に回答している割合を掲載しています。

実は、この3つに関しては非常に重要な項目になっておりまして、特にこの3つが大学のカリキュラム満足度、大学の授業、学部のお薦め度、こういうところに大きく影響してくるところになります。これは青山学院大学独自に採っている項目ですので比較するものがなく、3年間の傾向だけを載せています。

この欄を見ますと、興味・関心のある科目が多いということには7割ぐらいの学生が「そうだと回答しています。ただし、一方で、一番下の成長を実感できる科目が多いかということになりますと、20パーセントぐらい下がり、50パーセントぐらいになってしまいます。これは学部によって同じぐらいの数値になっている所もございまして、彼らにとっては、興味・関心のある科目も大事ですが、「成長を実感できる科目が多い」ここが高いほうが授業ですとかカリキュラムの満足度が高いような関係性になっております。

一点気になりますのは、3カ年を通してみますと肯定回答率が少しずつ低下してきているところです。この重要な指標に対して少しずつ低下してきていることは、解釈が難しいところではありますが、例えば科目の関連が理解しにくくなってきているのか、科目の関連を捉えようとしている学生が減ってきているのか、その解釈はわからないところですが、気になる点ではございます。

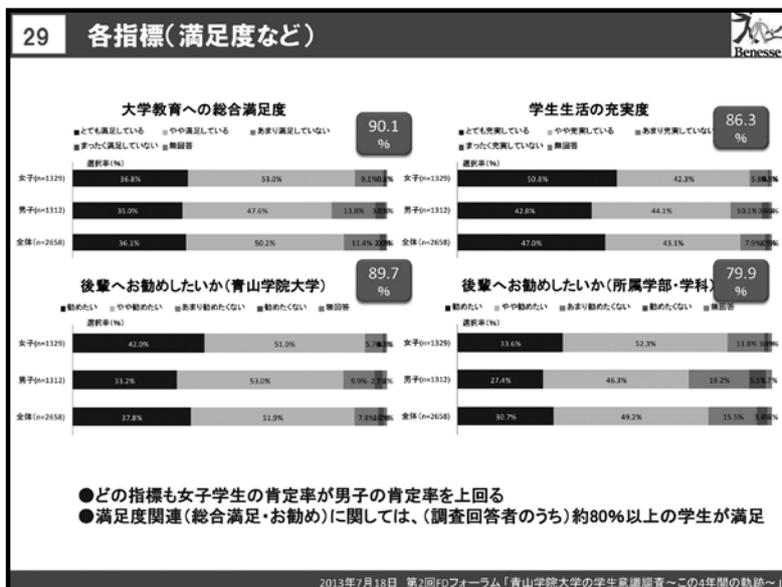


26のスライドは大学教育への要望ということで具体的なニーズになっております。一番高いニーズが「もっと企業と接する機会を増やしてほしい」ということで、このようなものになっております。以前はこれではなくて上から4つ目の「もっと思考方法に関することを学びたかった」ですが、今年度はもっと企業と接する機会を増やしてほしいという要望に変わっております。

二点目は「もっと文書やレポートを学びたかった」ということで、初年次に取り組むようなものについて挙がってきているということです。それから、近年ニーズが上がってきますというようなお話をしましたが、こちらについても3カ年を通して少しずつ伸びてき

ていまして、「もっと教員と接する機会を増やしてほしい」と、60パーセント以上の学生がこういうことをやってほしいという形になっております。

これに迎合ということではなくて素直にこういう感想が出ていますというお話ですが、2年間の教育を受けた段階で初年次教育あたりに望むものはこういったことであるということになります。



では、駆け足ですが3年生は以上にしまして4年生を見ていきたいと思います。29のスライドをご覧ください。こちらは卒業前の学生に聞いておりますが、各指標、重要な指標になっております。

左上から、「大学教育への総合満足度」こちらは肯定的に回答した学生が90パーセントに上ります。右側の「学生生活の充実度」充実していたかということに対しては86.3パーセント、これも非常に高い割合かと思えます。それから何より左下です。「後輩に青山学院大学をお勧めしたいか」ということに対して、89.7パーセントの学生がお勧めしたいという結果になりました。

それから「今、所属している学部を後輩にお勧めしたいか」という点については、これも79.9パーセントということで、80・90パーセントの学生が最後に満足して出ていくということになります。ただ、いずれにしても女子学生の満足度が高い、これはいろいろなどころに出ておまして、男子学生の反応は少し薄い、というところが挙げられます。

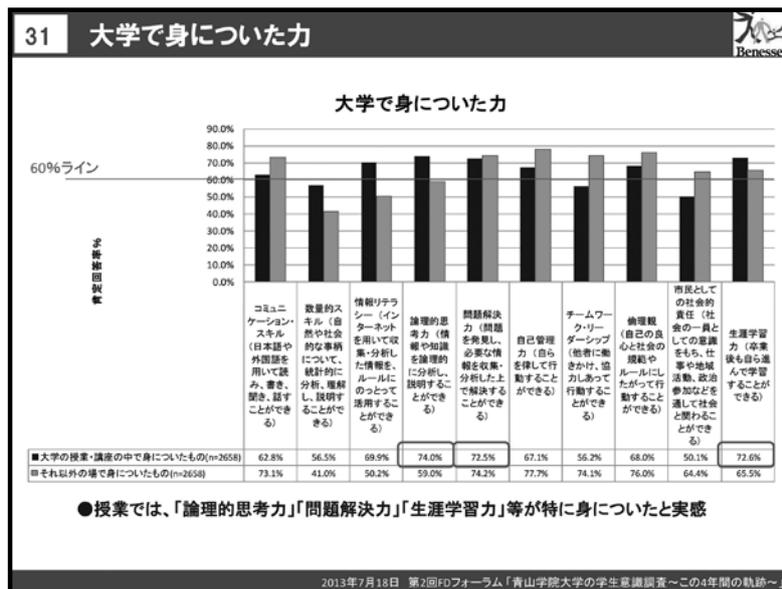


30のスライドでは、「大学で力を入れた取り組み」ということで同じような項目で聞いてきましたが、どういうことになっているかというところを見ていきたいと思います。

では一番左、4年生の卒業前に力を入れたという実感がある者は、これも比較対象の全国がありませんので60パーセントあたりに一本線を入れてみましたが、専門的な勉強に取り組みましたという学生が約8割です。同じぐらいの背丈のものになりますと友人との交流ということですので、こういうところも充実度に影響する部分ですが、人間関係も充実していたのかなあというところでは、

ここで着目するべきは、囲っている所ですが、コミュニケーションスキルを身につける、論理的思考力を身につける、文章作成を身につける、幅広い教養を身につけるということで、おそらく卒業前になったら、先ほどはニーズとした文書作成とかいろいろありましたが、学びという点ですごく記憶が残るのであろうと推測されます。

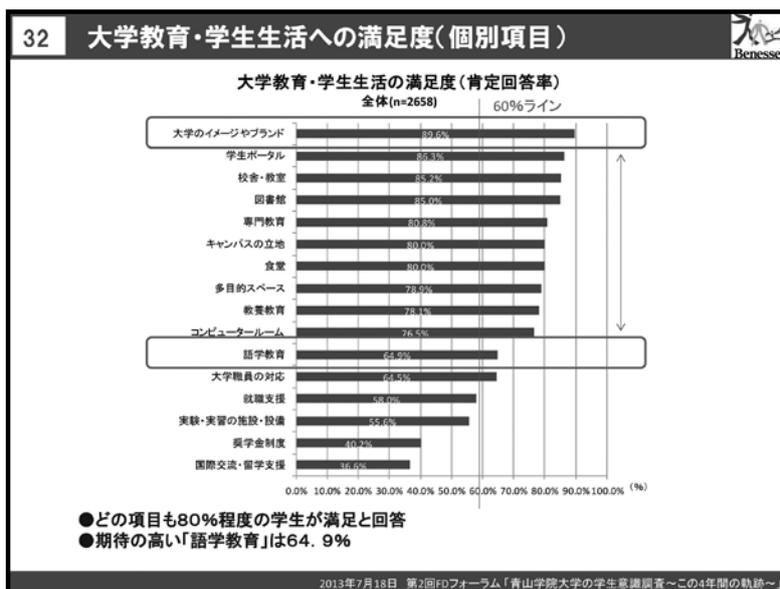
ゼミのところの効力が非常に大きいのではないかと思います。この後、いろいろ見ていきましたがゼミの影響がいろいろ出てまいります。大学に対するブランド満足度という点では、課外活動もあるかと思いますが、この教育面に対する反応が大きいのではないかと思います。



続いて、31の「大学で身についた力」ということですが、こちらは簡単に授業で何が身についたのかということだけ触れていきたいと思ひます。

これも2種類のグラフがありますので、紺色のほうは大学の授業・講座の中で身についたものですが、これは「身につきました」という肯定的な回答をした学生の割合を示しています。薄いほうは授業以外の中で身についた、つまり課外活動で身についたということになりますので少し差が出ている面がありますが、特に濃いグラフのほうをご覧くださいと思ひます。

これは、大学が提供している授業・講座で身についたものになりますので、何が身についたか見ていきますと、下で赤い丸を入れておりますが、論理的思考力、問題解決力が比較的高くなっており、おそらく大学で目指す最終的なところだと思ひのですが、一番右側の生涯学習力に反応があります。ですので、おそらく考えていろいろなことを解決していく、これは社会に出ていく力だと思ひますが、そういうところが学び続けようという意欲に変わっているのではないかと、というふうと考えられます。



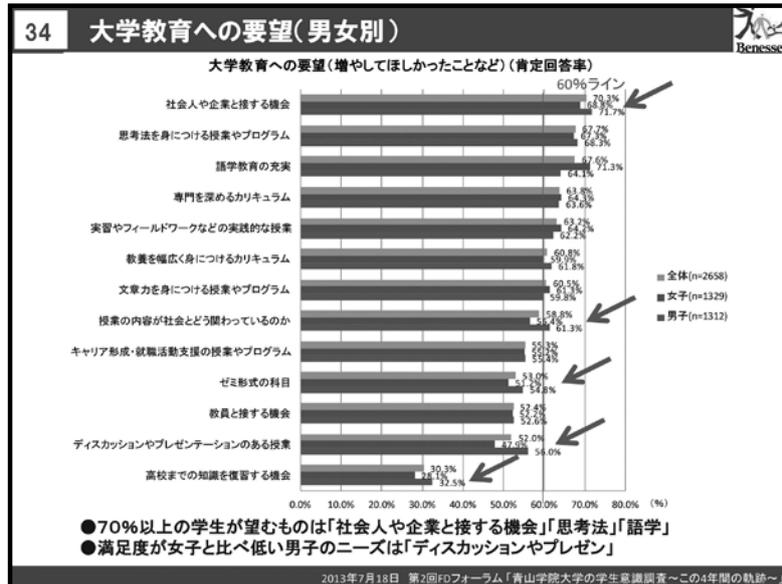
じゃあ授業にすごく満足しているのではないかとと思われるのですが、これはちょっとびっくりしたデータですが、32になりますと、それぞれの項目にどれぐらいの学生が満足しているのかということですが、授業を差し置いて大学のイメージやブランドに満足している学生が約9割です。大学に高い期待を持って入ってきた学生が最後に大学のイメージやブランドに満足をされている、こういう構造が青山学院大学全体の強さではないかと思えます。

ちょっとどうかと思われるのですが、高い期待のある語学教育が65パーセントぐらいにとどまっております。これは、卒業を前にしてもう少し取り組みたかったということも反映しているのかもしれないですが、授業関係などを上回って、いろいろなものを含んでブランドに満足していくという結果になっております。



33のスライドにおきましては男女でどれぐらいの反応の差があるかというところを示し

ておりますが、こちらは後ほどご覧ください。

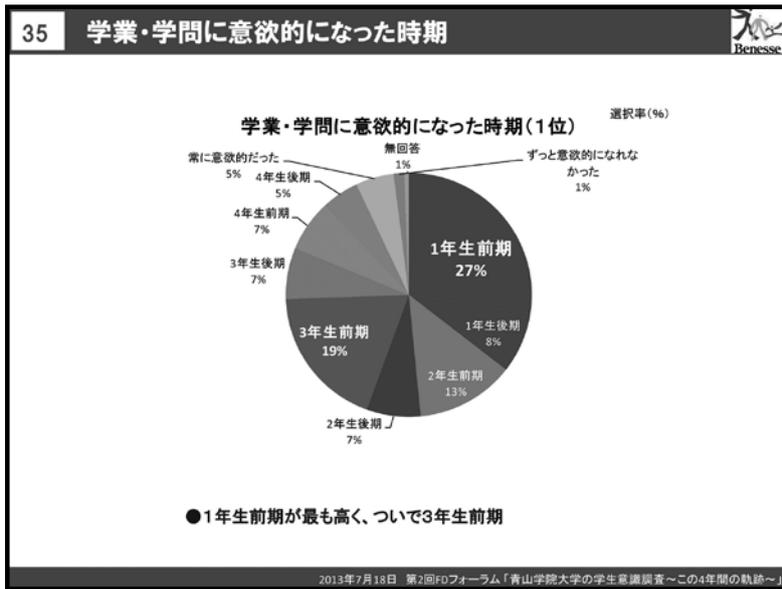


34ページのスライドになりますが、大学教育の要望ということで、最終的に大学を卒業する時にどのような要望が挙がっているかという点になります。これも希望の高い順に並べ替えております。

先ほどの「2年間の教育を受けての要望は」と共通する点がトップで、「社会人や企業と接する機会」ということです。ですので、2年間の教育を受けても卒業前になってもここが強い要望として挙がっているということが挙げられるかと思えます。

次に、先ほどは少し下がっておりましたが、出ていく時は思考を身につける授業やプログラムということで、これは何年生の段階でとは書いておりませんが、これをもう少しやっておきたかったということが出ているかと思えます。あとは、望んでいた語学系ですとか専門といったところが特に出ておりますが、上位2つはおそらくずっと通して思っていることではないかというところが出ております。

ちなみに、これを男女別にしておりますので一点だけ見ていきますと、下から2つ目の「ディスカッションやプレゼンテーションのある授業」これは女子学生より男子学生のニーズが高いです。こういう見方をしていきますと、反応が低い男子学生が女子学生と比べて「もう少しこういうことをやってほしかったな」というのが見えてくるかと思えます。



では、最後に角度を変えて一点ご紹介したいのですが、彼らはいったいつ学業に意欲的になったのかというところを見ていききたいと思います。ここからの話は大学にとって工夫の余地がある部分ではないか、ここにテコ入れをしたら一つ工夫の余地があるのではないかとこのところですが、「4年間を振り返るといつ学問に意欲的になりましたか」という選択率を見ていきますと、1位が1年生の前期、次いで3年生の前期ですので、1年生の一番選択率の高い所、ここをもっと有効に活かしていくべきではないかというようなことが挙げられます。

36 学業に意欲的になったきっかけ

1.1. 時期(1位)	1年生前期	1年生後期	2年生前期	2年生後期	3年生前期	3年生後期	4年生前期	4年生後期	ずっと意欲的になれなかった	常に意欲的だった	NA	総計
選択人数	729	215	344	181	502	181	179	133	38	133	15	2658
期待していた通りの教育環境だった	22.34%	7.44%	3.78%	0.53%	1.20%	0.55%	0.56%	0.75%	0.00%	12.78%	0.00%	8.24%
入学後のオリエンテーション・各種などで刺激を受けた	33.04%	9.77%	3.20%	0.00%	0.20%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.75%	6.67%	10.38%
コース選択、ゼミ・研究室選択などが契機となった	4.68%	20.00%	13.08%	14.29%	16.14%	5.52%	8.38%	3.76%	0.00%	4.51%	0.00%	19.01%
教授の授業で学院の面白さを感じた	17.15%	20.00%	24.71%	12.55%	11.55%	6.63%	5.03%	5.28%	0.00%	21.80%	13.33%	15.51%
学業・学問に関連する文献を読んで刺激を受けた	2.74%	1.88%	6.89%	5.29%	3.39%	2.78%	0.56%	0.00%	0.00%	4.51%	0.00%	3.24%
いい先生に出会った	3.70%	7.44%	8.14%	8.99%	9.78%	7.18%	7.26%	6.02%	0.00%	7.52%	0.00%	6.81%
このままでは退屈・卒業できないと思った	1.37%	7.44%	11.92%	9.52%	7.97%	6.03%	8.94%	12.03%	2.63%	2.26%	0.00%	6.47%
ゼミ・研究室での学びを通じて	0.00%	1.40%	4.07%	4.78%	20.72%	12.15%	26.82%	12.03%	0.00%	0.75%	0.00%	8.18%
卒業論文の準備・執筆を通じて	0.14%	0.00%	0.29%	1.06%	0.40%	3.31%	8.94%	33.23%	0.00%	3.01%	0.00%	2.90%
進路について意識し始めた	1.78%	3.72%	6.40%	10.58%	15.54%	24.31%	13.41%	5.28%	10.53%	8.27%	0.00%	8.89%
インターンシップで刺激を受けた	0.00%	0.93%	0.87%	0.53%	1.20%	2.78%	1.12%	0.00%	0.00%	0.75%	0.00%	0.73%
就職活動を経験した	0.00%	1.88%	0.29%	0.00%	0.40%	12.71%	8.94%	11.28%	0.00%	0.00%	0.00%	2.29%
海外留学(短期留学、語学研修を含む)を経験した	0.55%	0.93%	6.10%	9.52%	2.99%	5.52%	2.78%	0.00%	0.00%	3.01%	6.67%	3.01%
ボランティアを経験した	0.14%	2.32%	0.58%	0.00%	1.20%	0.55%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.58%
アルバイトが契機となった	0.14%	1.40%	0.00%	1.06%	0.60%	0.00%	0.00%	5.28%	0.75%	0.00%	0.00%	0.43%
学外での活動(上記以外)で学びの必要性を感じた	0.98%	3.28%	2.03%	3.17%	1.59%	4.42%	2.23%	1.50%	2.63%	2.26%	0.00%	1.99%
友人の影響	3.98%	2.32%	3.49%	5.82%	1.39%	1.66%	2.23%	2.28%	0.00%	4.51%	0.00%	3.01%
その他	6.31%	6.51%	3.78%	5.29%	3.59%	3.31%	2.23%	4.51%	50.00%	18.05%	0.00%	6.02%
NA	0.96%	1.40%	0.58%	0.00%	0.20%	0.55%	0.56%	1.50%	28.95%	4.51%	73.33%	1.89%
総計	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%

2013年7月18日 第2回FDフォーラム「青山学院大学の学生意識調査～この4年間の軌跡～」

では、細かいのでお手元の資料をご覧くださいなのですが、意欲的になった時期を挙げてもらいましたが、何がきっかけで意欲的だったのかというところをクロスして見ていきます。見ていただきたいのは1年生の前期になりますが、ここは729名の学生がここで意欲的になったというわけですが、一番何で反応しているかといいますと、これは上から2

つ目の「入学後のオリエンテーション、合宿などで刺激を受けた」というのが33パーセントの選択率になっています。

ですので、もしかしたらここでそれほどやる気がなくても意欲的になったという学生が多数いるかもしれないですし、オリエンテーション・合宿はそれなりの工夫をしたほうがよいということが言えるかと思います。

3年生の前期になりますと、これは口頭でお伝えしますが、やはりゼミですとか研究室、こういった所がやる気になったのだということになります。これは、先生方に近い所で勉強したいというニーズにも合致するところになります、学部によっては必須ではない所もあるかと思いますが。全員入ることができない所もあるかと思いますが。そういうところは工夫の余地があるのではないかというふうに考えられます。

飛びましてここからは、今まで見てきたところに続きまして、どうしたらもう少し満足度を上げていくことができるのかという点について分析的な視点でお伝えしていきたいと思います。

今までお伝えしてきました印象的だったところとしては、入学前に大学ブランドに期待をして、卒業する時に大学ブランドに満足しているという学生像が浮かび上がってくるのですが、その大学ブランドに対する満足が何を左右するかということですが、ここからは資料がないので前のスライドを、どう見ても見えないのですが、私が補足しながら進めますのでご覧いただきたいと思います。

これは完全に見えませんが次をご覧いただきたいのですが、大学ブランド、何が一番影響しているのかということをいろいろ調べましたら、入学時の志望度と関連が強いということがわかりました。

他の大学でこういう調査をしますと入学時の志望度と満足度があまりリンクしない大学もあるのですが、青山学院大学を調べてみますと入学時の志望度がブランド満足度に対して影響していると、1年生の起点の所では理解することができましたので、この視点をもって分析を試みたということが挙げられます。

どういう試みかといいますと、入学時に第一志望だった学生が当然卒業時、卒業生調査の段階で不満になってしまう、もしくは第一志望で入り、そのまま満足していく学生がいると、それから、第三志望で入ったけれども卒業する時にうんと満足している学生、第三志望で入ったけれどもそのまま沈んでいった学生、こういうところでの違いはどこに現れてくるのだろう、それをあぶりだして、そこに何か満足度を高めるきっかけがあるのではないかということを見ていきたいと考えてつくった資料になります。相模原キャンパスの方は（グラフが）見えないかもしれませんが、口頭で補足していきます。

上が進学理由という形になっております。オレンジの棒グラフが満足組、青い棒グラフが不満組というふうに考えていただきたいと思います。上のグラフ全体は、第一志望で入学して満足組と不満組、こういうところで違いありますというデータになっています。

結果的に満足した学生の進学理由はどのようなものであったかといいますと、差がでている所を見ますと、一番左端の「興味や関心のあることを勉強したいから」、次が「専門的

な知識を身につけたいから」ということで、学びに対する意識が強いことがわかります。

一方で、青いグラフを見ますと、不満に終わってしまった学生は「大卒の学歴が欲しいから」「やりたいことがはっきりしていないから」「皆が大学に行くから」このように学びというより何となく入学したということが挙げられます。第一志望ではあるがこういう学生もいるということです。ですので、こういうところが違いに挙がっているということが一つ、ポイントになります。

下も同様の傾向があるのですが、第一志望だけでもこういった潜んでいる学生を、先ほどありましたように、1年生の前期のところはどう惹きつけていくか、そういうところは一つ、工夫の余地があるのではないかと思います。

続いて、学業に意欲的になった時期を見ましても、第一志望で「とても満足」になった学生、それから第三志望以下だったけれども「とても満足」になった学生は1年生の前期で意欲的になっているという結果になっています。当然期待して入ってきているわけですが、ここでどう惹きつけていくかということは一考に値するのではないかと思います。

それから、学業に意欲的になった時期においてその違いを見ていきますと、特に下のほうをご覧いただきたいのですが、満足組と不満組でずいぶん差がつくところがあります。これは、第三志望で入った学生が、結果的に満足している原因とも考えられますが、何かといいますと、ゼミ・研究室での学びを通じて意欲的になったということで、このような環境は第三志望でも救い上げていくには非常に重要な環境であると言えるのではないかと思います。

では、先ほどご紹介しましたカリキュラムの感想においてはどうかということです。これは一点お伝えしたいのですが、上の満足組と不満組の差、下の満足組と不満組の差を見ても、興味・関心がある・なしですとか成長を感じるなどがあるのですが、共通していることは「成長を実感できる科目が多いと感じた」もしくは「教員との距離が近い」というところで差がひらいているようですので、先生と接点を持つような授業が非常に大事であることがわかります。

また、「成長を実感できる科目が多い」につきましても、結論だけを申し上げますと、考えるというような成長実感がある、積極的な対人コミュニケーション、おそらく今、話題になっていますアクティブラーニングという部類になるかと思いますが、そういった授業の中で身につく成長感というもので満足組・不満組で差がついております。

ここまでで先生との距離が非常に大事なことがわかるのですが、それだけかといいますと、最後に個別満足度という所をご覧いただきますと、上が第一志望で満足・不満組を、下が第三志望で入ってきた学生ですが、一つ面白いことが入っております、大学職員の対応というところでも満足・不満というところでは結構差がついている、トントンになります。ですので、こういう観点を職員の方はどうのような対応をしていくかという点も少しここにあたりするのではないかなという形になります。

では、まとめの観点といたしまして、皆さまのお手元の資料には最後のページに付いております。

42
まとめ①

1年生データ(2013)・・・大学ブランドと語学に期待

- ・専門や教養、語学だけでなく、クラブ・サークルや社会活動、海外留学などさまざまなことに取り組みたいと考える活発な学生が入学
- ・青山学院大学に対しては“大学ブランド”に信頼を寄せ、語学教育、国際交流などに期待している。語学教育に求めるレベルは高い
- ・近年、教員との交流を期待する学生が増加

2年生データ(2013)・・・希望に近い学生生活、充実と満足

- ・入学前に抱いていた青山学院大学に対するよいイメージは維持されている
- ・約8割の学生が充実、約7割の学生が所属する学部・学科をお勧めしている
- ・入学時の希望通り、「語学」「クラブ・サークル」に力を入れている⇒特にコミュニケーションスキルが身についた実感が高いことが特徴
- ・期待が高まる教員との交流を実現している割合は低い

3年生から(2013)・・・希望に近い学生生活、充実と成長、満足

- ・約8割の学生が充実、約7割の学生が所属する学部・学科をお勧めしている
- ・特にコミュニケーションスキルが身についた実感が高いことが特徴
- ・大学教育に対し、「企業と接する機会」を求める割合が約7割、「文章やレポートを学ぶ機会」「教員と接する機会」「思考方法を学ぶ機会」「実践的な授業」「語学教育の充実」は6割を超える学生が希望している(いずれも回答者に占める割合)

4年生から(2012)・・・大学ブランド、教育に満足。論理的思考力や問題解決力が身についた

- ・大学教育に総合的に満足している割合、後輩へ青山学院大学をお勧めする割合は約9割
- ・約9割の学生が充実、約8割の学生が所属する学部・学科をお勧めしている
- ・学業・学問に意欲的になった時期は1年生前期⇒3年生前期。1年生前期では、「オリエンテーションや合宿」などで意欲的になる学生が多く、3年生では「ゼミ・研究室」などが影響している。
- ・学生生活では、専門、教養、語学だけでなく、クラブ・サークル活動やアルバイトなど正課・課外ともに取り組んだ学生が約8割
- ・約8割の学生が、スキル系(コミュニケーションスキル、論理的思考力、文章作成)等に力を入れた実感をもつ
- ・約7割の学生が大学の授業では「論理的思考力」「問題解決力」「生涯学習力」などが身についたと実感している
- ・個別満足16項目のうち、12項目において6割以上の学生が満足している。
- ・特に9割の学生が、「大学のイメージやブランド」に対し満足している。
- ・大学教育に対し、約7割の学生が「企業と接する機会」「思考方法を学ぶ機会」「語学教育の充実」などを要望している
- ・英語教育に対しては約6割の学生が「スピーキング」を充実させてほしいと回答
- ・進路・就職先には約8割の学生が満足しており、就職準備で役立ったことで最も多い回答は「進路・就職センターに行く」

2013年7月18日 第2回FDフォーラム「青山学院大学の学生意識調査～この4年間の軌跡～」

43
まとめ②と今後の活用について

青山学院大学に対する満足度をさらに高めるための観点として

- 入学前後の施策(高大接続、マインドセット)
- 成長を実感できる科目(思考力を鍛える、積極的な対人コミュニケーション)
- 教員との交流(ゼミ、ゼミ形式科目)
- 職員対応
- 早期からのキャリア支援

という示唆が出てまいりましたが・・・

「データは議論のスピードを速め、共通認識をもつための最適ツールです」
 データが全てではなく、データを加えて対話を重ねていただければ幸いです

青山学院大学が目指す人材育成
大学満足度向上

施策立案
(PDCA)

語学

留学

学部

青
スタ

就
職

広
報

↑
教職員の皆様の対話

データにより
可視化された学生像

確認
すり合わせ

日ごろの皆様の実感

2013年7月18日 第2回FDフォーラム「青山学院大学の学生意識調査～この4年間の軌跡～」

1～4年生までおおまかにいきますと、大学に期待して入った学生の期待にある程度応えていると、特に大学ブランドについては絶大な満足度を持っていることが挙げられるということをご報告いたしました。

最後のまとめのところでは、これから満足度をさらに高める観点としましては、入学前後の施策について、先生との距離感、職員の方の対応等についていくつか差がでておりますので、こういうところを皆さんで考えていくのはいかがでしょうかという話になるのですが、今回ご紹介したデータは、データであって、もしかしたら日頃の皆さまの実感とは少し離れているものもあるかもしれません。

ただ、皆さまが議論の中でこういうデータをもって一つの事実として進めていただくこ

とで、おそらく議論のスピードは上がると思いますし、学生の全体像を共有しやすくなる、こういう点もぜひデータを活用して皆さまの教育改善に活かしていただきたいと思っております。

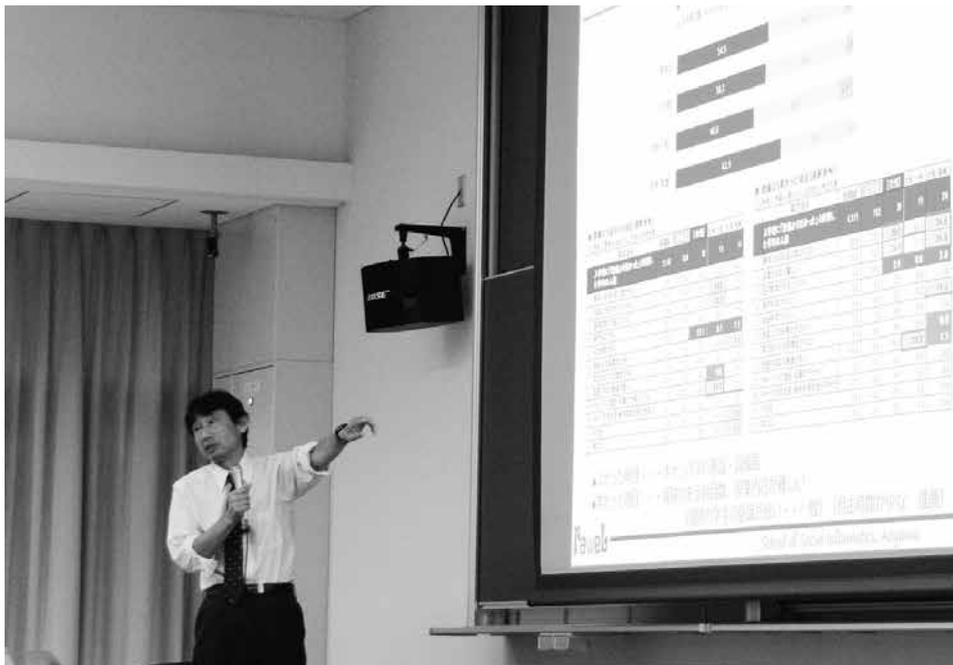
最後はずいぶん駆け足になりましたけれども、また見にくい資料になっておりました恐縮ですが、以上、私からのご報告とさせていただきます。どうもありがとうございました。

最後の資料につきましては、おそらく学内の方には見ていただくことができると思いますので、後ほどご確認いただきたいと思っております。

加藤：谷口さま、どうもありがとうございました。質疑応答につきましては、別途時間を設けてありますので、その時にお願いします。

続きまして、本学社会情報学部稲積宏誠学部長から、「学生意識調査の活用事例報告」につきましてご報告をいただきます。

2) 「学生意識調査の活用事例報告」



成果報告：稲積 宏誠教授

稲積：学生意識調査の活用事例報告ということで、社会情報学部、その地味な取り組みを振り返るということでこれからお話をさせていただきたいと思っております。

データを分析したり、処理したり、それを活用したりというのは自分自身の専門の中の一つですが、日頃実感しているようなことをデータの裏付けに基づいて確認をして次のステップを考えるというものと、何か新しい取り組みをしようとしたときに、コンセプトだけを示すのではなくて、何らかの裏付けを示すことによって説得力を増すと、大きく2つ

あると思うのです。

谷口さんからきめ細かい説明を聞きまして、ちょうど最後の「どのタイミングで学生が意欲を増すのか」というのは、つい最近、確か一緒に飲みながら話を聞いた中のトピックスだったかなと思うのですが、ああいう切り口でどんどん展開をしていくと、どのタイミングでどういうガイダンスをしていくか、ゼミの勧誘をどうしていくかということに悩んでいる時に、そういったタイミングの中であのような裏付けの資料のようなものを活用して次の展開にもっていくにはすごく有効です。

ただ、我々は、それだけに踊らされないようにといたしますか、このところ文科省のこれでもかこれでもかというアクションと社会からの大学に対するいろいろな指摘というものにどんどん振り回されていて、いつの間にか自分たちが何をやっているのかわけがわからないというような状況に陥りがちなところがありますので、データの扱いに関して言っても、そういうところに気をつけながらということはあると思いますし、決してベネッセに食われてはいけないという意識を持ちながら取り組んでいかなければならないとは感じております。

2012年7月15日 第2回Foフォーラム「青山学院大学の学生意識調査〜この4年間の軌跡〜」

社会情報学部のおかれている状況

- 2008年発足：
 - 発足と同時に青山回帰の英断 青山初完全郊外型新設学部としての歩み始める 郊外型キャンパスとしての豊かな空間を享受したい
- 既存の理系資産・文系資産を有効活用することが学部としての存在意義
- 国立文型・私立文系志望者の中から数学好きの受験生の発掘
- 理系から文系に転じた受験生，文系で情報分野に関心のある受験生の発掘
- 学生を育てるための教育で他学部との差別化を図る

Faweb
School of Social Informatics, Aoyama
2

社会情報学部は、2008年に発足いたしました。名前のおりといいますか、いわゆる文理融合型の学部です。情報と社会というようなものを視野に入れ、念頭に入れた形で、学部の構成メンバーも、数学系の教員、情報をベースにして展開していった教員、経営経済というところをベースにしている教員、心理教育というところをベースにしている教員がある種混在する形で構成されています。

そうなりますと結局、それぞれがバラバラに動く、あるいは教養系の階層の中でそういう学部が多くつくられてきているというような経緯があるわけですが、教員というのは垣根を越えて自分たちのテリトリーに他者が入ってくることを拒むという本能がありますし、他者の所に踏み込むのもそれなりの遠慮のなかで、踏み込みすぎてしまうと自分の所に戻って来てしまうというようなところがあるので非常に難しいのですが、社会情報学部

はおおいに踏み込もうと、踏み込みながら、ぐじゃぐじゃになりながら取り組んでいくと、それを継続しない限り学部の明日はないというところでスタートしています。

ただ、なかなか苦しい船出になっていますのは、ちょうど発足した2008年に今のキャンパス配置が決定されたという皮肉な結果になりました。したがって、ある意味では我々の学院始まって以来の純粹郊外型の学部としての歩みを始めざるをえないと、そういう宿命を負うことになったのです。

ただ、学部コンセプトということではいますと、既存の理系の資産というものと既存の文系資産というようなものをどのように有効活用して青山学院大学の中の一つの領域を展開していくかということが非常に重要なテーマでありまして、それをとにかく追求していくという使命を我々は負っているということです。

それから、国立文系や私立文系志望者の中で数理的な取り組みに関心をもっているような受験生をいかに集めてくるかということが我々の学部の存亡に係わるところで、従来ですと人文社会系の所であれば人文社会系の学部に行きますが、社会情報学部という学際的な学部にも目を向けさせるためにはどうすればいいかということのを常に考えなければ学部の存立はないということになります。

もう一点は、理系から文系に移転した、文転をしたという種類の受験生です。これに関しては、学部の中でもいくつか議論しているところもあるのですが、理系から文系に移転した受験生の確保というと比較的それなりの方針を立てられやすいのですが、そのリスクもあるということで、この両者をどういうバランスのなかで我々は受験生に対してアピールしていくかということが非常に大きな課題です。

もう一点は、これも、表裏一体というところがあるのですが、学生を育てるための教育をいかに展開していくかということが他学部との差別化を図るものなのだと位置づけて学部の取り組みをしているということになります。

2013年7月10日 第2回Fawelフォーラム (青山学院大学の学生意識調査〜この4年間の軌跡)

社会情報学部はこのよう学生を育てたい

- **骨格・筋肉は理系要素：**
統計 コンピュータ 基礎数学を必修 誰もが数理・情報のセンスを磨く
- **心・表情、外見は人文社会系の幅広さ：**
経営 経済 心理 学習 人と社会への視点を体系的に学ぶ
- **社会・人間・情報が織りなす現代社会のさまざまな問題解決に取り組むことのできる人材**

学生・企業・社会に対してこのことをいかに理解してもらうか


School of Social Informatics, Aoyama

もう少し社会情報学部の説明をさせていただきたいと思うのですが、これはどういふ

うに説明をすればいいのだろうか、そもそも論でいきますと、社会情報学部発足の私個人的なきっかけは、私自身が理工学部にも所属していたときのエピソードの中にあるのです。企業の比較的トップクラスの方の話を書く機会があった時に、その方は理系出身の役員ですが、「自分自身としては人文社会系出身の学生のほうが魅力があるんだ」と言ったのです。僕は当時理工学部にも所属していましたので愕然としたところがあるのです。

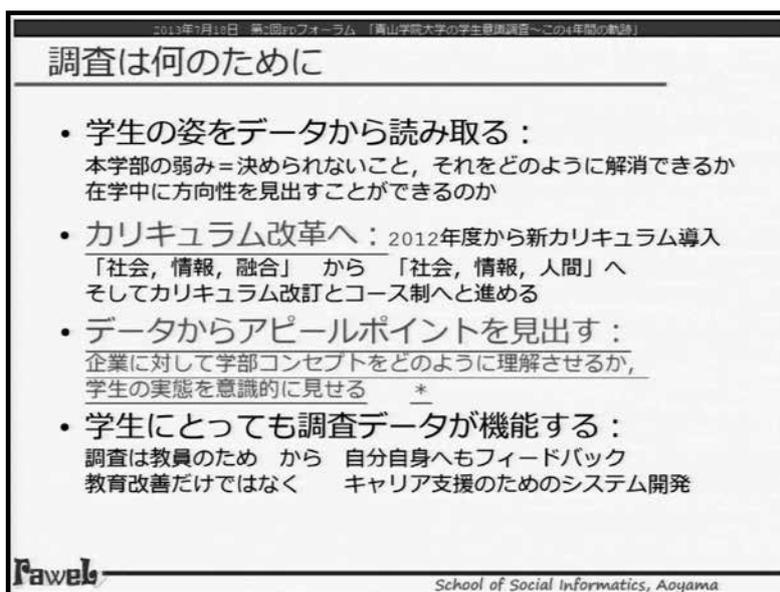
それは、未知のテーマに取り組む際のパワーが期待できるという説明だったのです。やはり理系の学生は、きちんと勉強しているところもあるが、言われたことをきちんとこなす、そこを超えることがなかなか大変で、自分としてはそこが非常に重要なポイントだと言われたのです。

したがって社会情報学部は、骨格筋肉が理系要素、統計はコンピュータや基礎数学を必修とし、誰もがそういう情報のセンスを磨くということ、ただし、その応用領域は自然科学の領域ではなくて人間や社会に関わることだということ、心、表情、外見は人文社会系の幅広さというところを狙っている。これは企業に非常にうけるのですが、学生にはどう説明してもなかなか理解してもらえないというジレンマを常に抱えながら取り組んでいるというのが我々の学部の状況です。

それを踏まえて社会・人間・情報が織りなす現代社会のさまざまな問題解決に取り組むことのできる人材ということ、これが我々の学部のコンセプトと言えるかと思います。したがって、学生や企業や社会に対して我々の立ち位置というものをどういうふうに理解してもらおうかということが、発足から今日に至るまで常にテーマになっているということになります。

具体的にどういう状況があるかといいますと、学際領域というようなものを受験生が調べようとすると、メジャーな領域の後ろのほうにちょろっとそれに近いネーミングのものがあって、そこに行き着くまでに相当時間が経ってしまうし、ほとんど行き着かないまま終わってしまうというような状況なのです。

これを我々の競争相手と言ってもいいだろうと、いわゆる慶應のSFCなどもそういうところがありますが、SFCはSFCで一つの固有のブランドを勝ち得ていますので、そのジレンマからは若干脱却しているかなというところがあります。ですから、見てもらう、知ってもらうということが学部そのものの重要な課題になっているということが他の学部とは大きく異なる点かと思っています。



そうしますと、この調査、先ほど長谷川副学長の話にもあったのですが、スタートは国政経が開いて、社会情報学部がこれに加わったということがあります。なぜその調査が必要なのかということになるわけですが、先ほど申し上げたように我々のコンセプトがいかにかに理解されているのか、されていないのか、彼らは学部や学科のことをどう見ているのかということを知らなければその次のステップは無いということになるわけですが、したがって、学生の姿をデータから読み取ることは、これは学部の本質的なところに関わってくることになるということなのです。

それから、ここでは弱みと言ってしまいましたが、我々を受験する大半の受験者層は高校時代、大学受験の段階で専門領域を決めかねている学生です。そうしますと、決められなかったという部分とその後の学生生活にどのように反映しているのか、影響しているのかということを見えていかないといけないというところがあります。いずれにしても、学生の姿をデータから読み取るということは、当然のことではありますが、我々としては必須の課題であったということなのです。

それから、先ほど申し上げました繰り返しになるところもあるのですが、カリキュラムは固定されていないわけです。既存の専門領域ということであれば一定の体系化がなされているわけですからその体系化の中でどういう組み方をしていくか考えればよいわけですが、我々はカリキュラムそのものを自分たちで一から組み立てるという宿命を負っています。

しかも、常に学部の中でさまざまな分野の教員がああでもないこうでもない自分たちの垣根を越えて議論していくことが必須課題ですので、そうしますと継続的にカリキュラムの見直しを図ることが必要になってくると、したがって、カリキュラム改革、カリキュラムの見直しの材料をどこから手に入れるかということによって調査が重要であるということになります。

実は、2008年発足ですので2011年度が第一期の卒業生を輩出するタイミングということ

になりました。その時にいくら我々はこういう取り組みをしている、受験者はこうだと言っても、やはり裏付けとなるデータがあるか無いかということが非常に重要な点になりました。したがって、そういったところでもこのデータをどう活用するか考えたということになります。

これが最後ですが、先ほどベネッセの細かいデータの分析があり、ほとんど上の所はそこ重複するところがあるのですが、我々独自で取り組み始めてやっとモノになりつつあるというのは、今までお示したことは学生の調査を利用して我々が、つまり教員あるいは大学がそれを利用しているという状況なのです。

学生は、自分たちである程度労力をかけて調査に協力しているのですが、具体的に何に跳ね返ってくるかということになります。もちろんすばらしい教育環境を提供することでフィードバックされることが本質であるわけですが、もう少し具体的に学生にフィードバックできるようなものにならないかということで、ここにあるキャリア支援のためのシステムというものを、この調査データの裏打ちのもとにつくることができたのです。

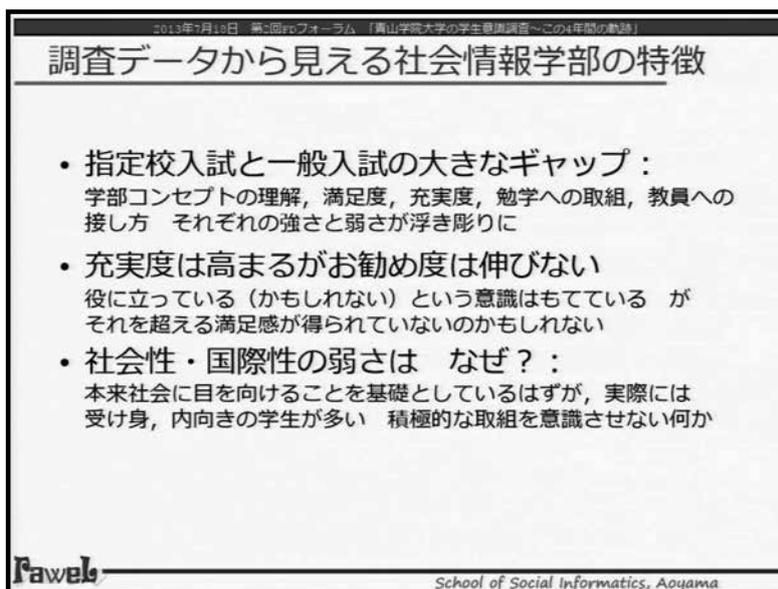
なんとなく流れ的には最後のところを中心に話してもいいのかなと思いますが、データからのアピールポイントはどのようなものかということです。実は就職を控えて我々はこのように求められる人材を新しいアプローチで輩出しているのだというメッセージを出したパンフレットを作成しました。

こういう所に人材を輩出するような学部ですよ、こういう取り組みをしてきましたということで、今、社会人基礎力という教育を本当にきちんとやっていますというアピールをしようとしたわけです。その時に「じゃあ社会情報学部の学生はどんな学生でしょうか」というところをどういうふうに示すかということで利用させていただいたということです。

他学部との比較というのも、見てみますといろいろ感じるところがあるのですが、なかなか微妙ですので、ベネッセの調査データの一番参考になるところは、我々自身を客観視できるところがポイントです。

実際に、「平均的な大学生と我々との違い」、このグラフのところは実はあまり意味がないかと思いつつ、我々の学部の学生の特性というものを、自己コントロール力、対人関係力、社会的な態度というところで、2・3年前にどこをピックアップしようかとさんざん苦労してここに書かれている「目標が高いほどやる気がでる」「グループ活動は協力的なほうである」とかいくつかの項目をピックアップし、こういう学生が育ってきていますと企業にアピールする材料として使わせていただいたというところがあります。

具体的な活用の第一番目は実はこのタイミングで企業側にこの情報を開示した点かと思います。それから、カリキュラムに関しては、本当は細かい話をするべきだったのかもしれないですが、その断片といいますか、これは雑誌に載せたところですが、新入生の意識のようなものと学部コンセプトの理解度というようなところをベースにして次のステップにどう持っていったかというようなことを紹介した記事です。これの説明は省略させていただき、次に進めさせていただこうと思います。



このような形で毎年、調査データの報告を受けつつ、それをどういう形で活用するかということを中心に考えながら進めてきているところではあります。これから具体的なデータを少しお見せしながら、社会情報学部の特徴と伺いますか、そこで考えられること、問題点等を少し紹介しながら進めていこうと思います。

先ほどの話とも共通点はあるのですが、実は社会情報学部は指定校入試と一般入試のギャップの大きさが他学部に比べて非常に大きい傾向がありましたので、これがどのような問題に波及するののかということを経年の間に見ていっているところがあります。これは非常に大きなものだと思います。

それから、先ほど充実度とお勧め度の話があったかと思いますが。学生生活あるいはカリキュラム、教育に対する充実度の評価とそれがお勧め度にどうつながるかということですが、社会情報学部は、充実度は高いのですが、お勧め度は極端に低くなるという傾向があるのです。そこをどう説明するかということも経年の間に見ているテーマです。

それから、決めかねている学生、高校時代に俺はこういう道へ進むと言えなかった、あるいは言わなかった学生を大きく抱えてしまっているところの影響かもしれないですが、残念ながら社会情報学部は「社会」という文字が付いているにもかかわらず、社会性や国際性の点が大きなウイークポイントになっています。なんとなくパーソナルな、なんとなく小市民的と伺いますか、こじんまりしたところを多く見る、全部が全部というわけではないですが、こういう傾向があります。



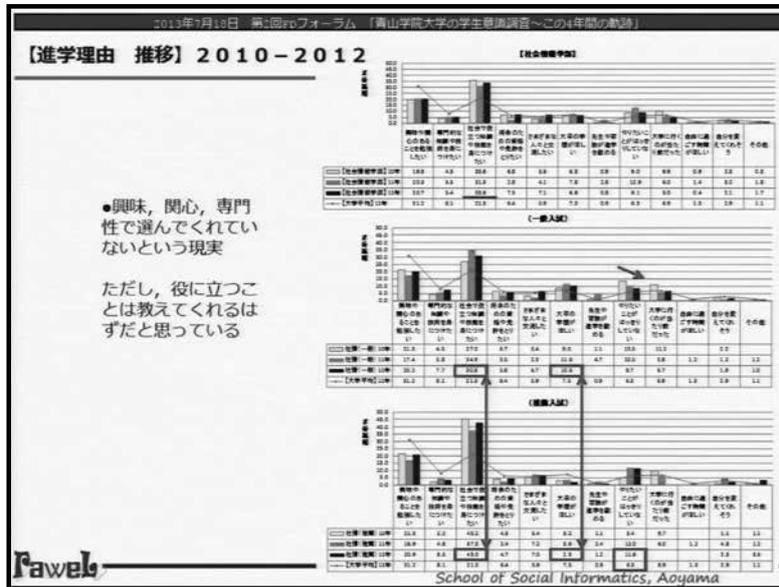
そこで、いくつかの切り口から社会情報学部の特徴を少し紹介しておこうと思います。どういう意識で入学してきたかといいますと、先ほどの全体の傾向とも関係するのですが、第一志望度、第二志望度というところで「我々はどうしても学部・学科としてこの学科に行きたかったんだ」「この学部に行きたかったんだ」という数は低くならざるをえないです。

これはやむをえないとは思っているのですが、やはりその低さと教育理念の理解度というところの低さが最も気になるところです。これは一般入試で、指定校の場合は必ずしもそうではないと、このギャップが非常に大きいところが我々の学部の問題点であり特徴である、というふうに考えています。

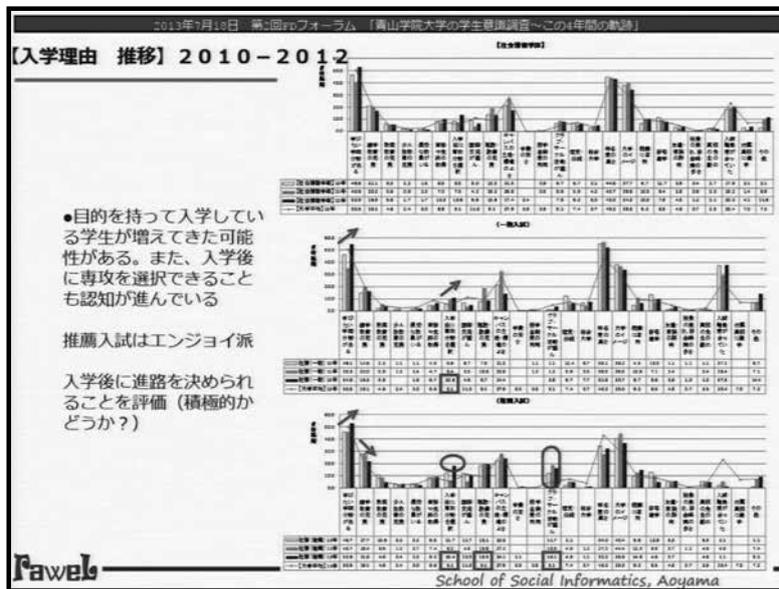


それから、一般入試で入ってくる学生のなんとなくの弱さがいくつかの点で出てくるのですが、進路の意識とことなのです。入試のところの自己理解度、進路条件の明確化、働くことの意味、そういういくつかのポイントが必ず平均より下回るような状況で、少し意

識の低さが出ているのが非常に気になるのと、これも推薦と一般で比べますとその違いがでている、というようなどころがあります。



これは、全学的なものとも共通するのですが、興味、関心、専門性で選んでなくて、役に立つことだけを教えてくれるという意識で選んでいるようです。この辺は小さいのでコメントだけです。



それから、学生生活を楽しみたいという意識が推薦入試では非常に高く見られますし、入学後に進路を決められることというのを積極的に評価しているのか消極的に評価しているのかわからないが、その意識だけは持っているというところが見てとれます。そこは、積極的に考えてくれるのであればプラスですし、消極的にということであればマイナスというところがあるかもしれません。

推薦入試は良い子だということがよくわかりますし、一般入試の学生はそういう日頃の勉強はあまりやっていないというのがこういうデータから出てくるのです。一番右の所が予備校や塾ですが、一般入試の学生は予備校・塾の依存度が非常に高いことも見てとれます。そうしますと、我々の学部的一般入試で入ってきた学生と指定校で入った学生は明らかにカラーが違いますし、背景が異なるようなところがデータからは明確に見えてくるというところがあります。

2013年7月15日 第3回F&Fフォーラム「青山学院大学の学生意識調査～この4年間の軌跡～」

教員との交流の程度

026 希望する教員との交流の程度

72 教員との交流の程度

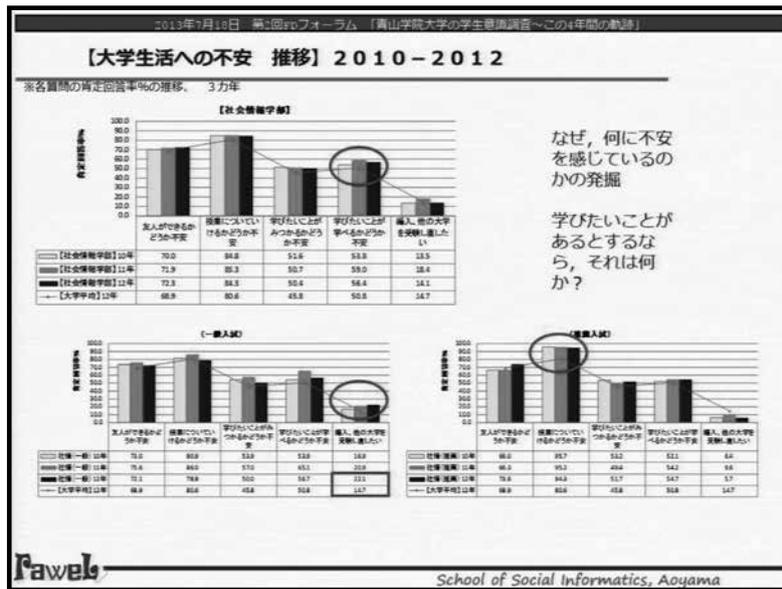
	受験者数	希望する教員との交流の程度					
		1 名前を覚えてもらいたい	2 勉強の相談の相談にのってもらいたい	3 1人の先生と深く関わりたい	4 多くの先生と関わりたい	5 教員とあまり関わりたくない	
社会情報学部	12年	242	55	71	23	79	2
			23.7	30.8	9.9	34.1	0.9
一般入試	12年	104	24	31	11	29	2
			24.5	31.5	11.2	29.8	2.0
推薦入試	12年	87	19	29	6	31	
			22.4	34.1	7.1	36.5	
内部進学	12年	14	3	4	2	4	
			23.1	30.8	15.4	30.8	
わくわく利用	12年	20	6	4	3	6	
			31.6	21.1	15.8	31.6	
全学部入試	12年	17	3	3	1	9	
			17.6	17.6	5.9	52.9	
男子	12年	143	35	35	18	46	1
			25.7	25.7	13.2	33.8	0.7
女子	12年	99	20	36	5	33	1
			20.8	37.5	5.2	34.4	1.0

●特に「勉強の相談にのってもらいたい」「多くの先生と関わりたい」の希望が強い

Faweb School of Social Informatics, Aoyama

あと、社会情報学部の大きな特徴として教員との接点を多く持ちたいという傾向があるのですが、どのような形で接点を持ちたいのか、それが指定校や一般入試という入試形態とどういう関係があるかというデータも経年的に見てきています。これは微妙で、これをどう捉えるかいくつか考え方がありますが、勉強の相談にのってもらいたいというある種の弱さに映るかもしれない、学生の持っている弱さの反映として教員との接点というところを言っているのかもしれないです。

それから、「名前を覚えてもらいたい」これをどう捉えるのだろうか、といいますか、ちょっと微妙だなと思います。それから「多くの教員との接点を」という声と「1人の教員と」という、この考え方の違いがどこにあるのかというようなことも少し気になることですが、いずれにしても、全国平均、他学部との比較においてこの数字が我々の学部は非常に高いという特徴を持っています。これは学部運営上、気にしなければならない点かなと考えています。



大学生生活への不安という点があるのですが、我々の学部で一番気にしていることは、学びたいことが学べるかどうか、学びたいことが見つかるかどうかという不安を常に抱えざるをえないような学部であり、そういった感じ方をしている層がどの程度いるのかということと、赤丸の所は授業についてですが、推薦入試の学生が授業についていけるかどうかということに強い不安を感じているという状況で、授業のレベルとか授業の質というようなものをどう改善していくかということの材料にしているということになります。

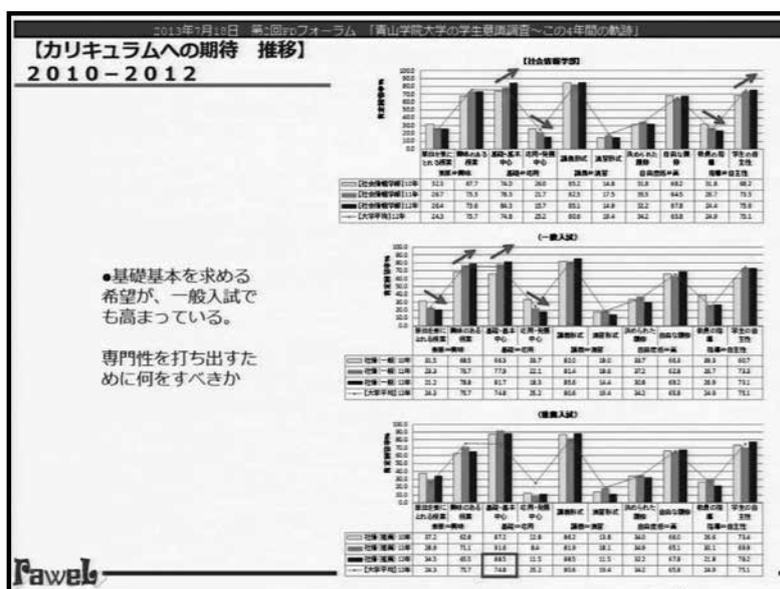
2013年7月10日 第4回Fwフォーラム「青山学院大学の学生意識調査～この4年間の軌跡～」

困っていること

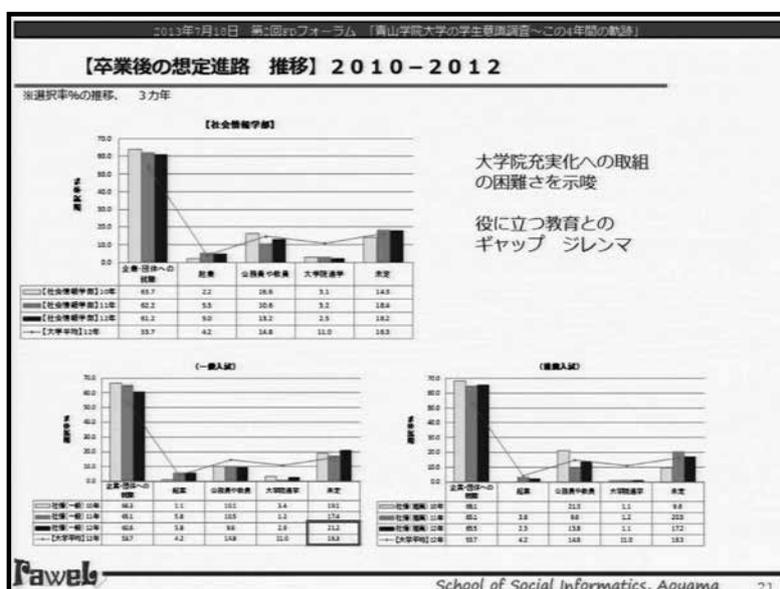
入試区分詳細	困っていること	授業のレベルが高い	授業のレベルが低い	学生の意識が低い	やりたいことが見つからない	友人・異性関係	生活が不規則	経済的な事情	その他	無	総計
一般	A方式(日本史)	3	5	1	4	3	2	1		1	23
	A方式(世界史)	1			2	2		2			7
	A方式(数学)	1			1	5	1	1	1		11
	B方式	2		1	1	3					9
推薦	全学部日程		3		1	2	3	4		1	14
	指定校推薦	4	14		3	14	3	1	2	8	50
	ゼミスト就生員		2								3
	スポーツ推薦	1	3			1					5
	スポーツ推薦(強化指定部)		2								2
内部	海外就学奨励費				1	1					3
	内部進学				1	1					2
	センター利用	2	1		2	2		1			8
合計	13	30	2	16	32	11	9	7	10	6	137

Fawel School of Social Informatics, Aoyama

これは困っていることの要望ですが、これも入試種別ごとにだしてもらっています。授業のレベルは高いと感じている学生、周りの学生の意識が低いと感じている学生、やりたいことが見つからない、このあたりが社会情報としては常に気にしながら経年的に見ていかなければならないポイントであると、これは谷口さんから「こんなところ、データ出しているじゃないですか」と言われそうですが、そうです。



ここは、グラフとしては少し見にくいかもしれませんが、左から3番目のラインの所です。基礎とか基本を求める、「もうちょっと基礎的なことをきちんとやってほしい」という要望ですが、その値が強いということです。我々、専門性をどう打ち出すかというのが学際系の学部としては非常に重要なテーマですが、学生ニーズとしては「常に基礎的なものをちゃんとやってくださいね」と言われていることが少しジレンマを招くところになっています。少し小さい字ですが、左から3つ目の所が基礎のところ、そういったポイントがあります。



今、大学院の改革プロジェクトというものをスタートさせているのですが、我々の学部は想定進路といったときに就職と大学院進学の数値が最初から出ているのです。多くの学生の意識の中に大学院進学をこちらから誘導しない限りそこに意識を持っていくと、それが実態として存在していると、したがって、入学後のナビゲーションという

ようなものをどう持っていき、大学院の活性化につなげていくかというところが重要なテーマになるということになります。

2013年7月15日 第2回サフォーラム 「青山学院大学の学生意識調査～この4年間の軌跡～」

【学士力への授業の役立ち度】

■ 学士力への授業の役立ち度(肯定回答率%) 上段: 今年度2年生 下段: 昨年2年生

質問項目	今年度2年生	昨年2年生	全国計	平均値	【偏差値】	社情(一般)	社情(産業界)
1 コミュニケーションスキル (日本語や外国語を聞いて読み、書き、話すことができる)	61.5	60.5	67.6	71.2	68.1	72.4	68.3
2 数量的スキル (数値や社会的な事柄について、統計的に分析・理解し、説明することができる)	48.9	51.1	44.2	47.7	82.8	63.8	59.7
3 情報リテラシー (インターネットを利用して収集・分析した情報、ルールに基づいて活用することができる)	69.1	68.5	70.9	70.4	87.2	86.2	81.0
4 論理的思考力 (情報や知識を論理的に分析し、説明することができる)	61.5	56.9	64.5	63.9	69.3	71.9	68.8
5 問題解決力 (問題を発見し、必要な情報を収集・分析しうえで解決することができる)	65.2	62.5	65.9	66.7	68.2	69.9	65.1
6 自己管理能力 (自らを律して行動することができる)	67.0	65.1	67.9	67.7	73.5	71.9	77.4
7 チームワーク・リーダーシップ (役割に働きかけ、協力し合って行動することができる)	56.1	56.1	55.9	56.2	66.6	69.5	70.9
8 倫理観 (自己の良心と社会の規範やルールに従って行動することができる)	70.1	70.5	68.8	71.8	69.6	81.5	71.4
9 市民としての社会的責任 (社会の一員としての意識を持ち、仕事や地域活動、政治参加などを通じて社会に関わることができる)	54.4	55.8	59.6	57.4	48.9	57.1	45.0
10 生涯学習力 (卒業後も自ら進んで学習することができる)	60.4	60.1	61.9	66.0	58.1	55.9	67.7

●授業の役立ち感は、1年次の授業は成長に役立っていると感じている様子

Fawels School of Social Informatics, Aoyama

これが最後でしょうか、これも谷口さんのところでありました。我々の学部をどう評価するかということで、コミュニケーションスキル、情報スキル、情報リテラシー、論理的思考力というものの役立ちと評価というのは非常に高く、チームワーク、リーダーシップという理性的な取り組みに対する評価は非常に高い数字がでていうことで、先ほどネガティブな説明をしたのですが、我々の学部の専門力・実践力という点でいきますと、実践力に関してはそれなりに評価をし、それなりに向上して巣立っているというような状況がデータからはうかがえるということになります。

2013年7月15日 第2回サフォーラム 「青山学院大学の学生意識調査～この4年間の軌跡～」

【大学生生活の充実度】 【学部・学科のお勧め度】

質問項目	今年度2年生	昨年2年生	全国計	平均値	【偏差値】	社情(一般)	社情(産業界)
1-2 とても充実している+まあ充実している	80.7	77.8	80.4	79.0	84.9	87.8	81.0
1 とても充実している	20.9	18.9	23.0	23.0	77.2	31.7	22.0
2 まあ充実している	59.8	58.9	67.4	60.4	61.9	70.7	47.7
3 あまり充実していない	16.1	16.2	18.5	17.5	10.9	8.4	15.9
4 まったく充実していない	3.2	4.0	3.1	3.7	4.3	3.4	3.2

●両区分ともに充実しているが、一般の学生の方が充実している様子。

質問項目	今年度2年生	昨年2年生	全国計	平均値	【偏差値】	社情(一般)	社情(産業界)
1-2 とても勧めたい+まあ勧めたい	72.8	68.2	73.0	70.7	55.4	51.7	54.0
1 とても勧めたい	13.1	11.8	15.7	13.9	71.0	32.2	26.0
2 まあ勧めたい	59.7	56.9	57.3	57.3	47.5	46.6	45.0
3 あまり勧めたくない	22.1	24.6	22.6	23.6	33.8	37.8	33.3
4 まったく勧めたくない	5.2	7.2	4.5	5.7	10.4	5.1	14.0

●お勧め度は例年通り、全学と比べると低い状態

Fawels School of Social Informatics, Aoyama

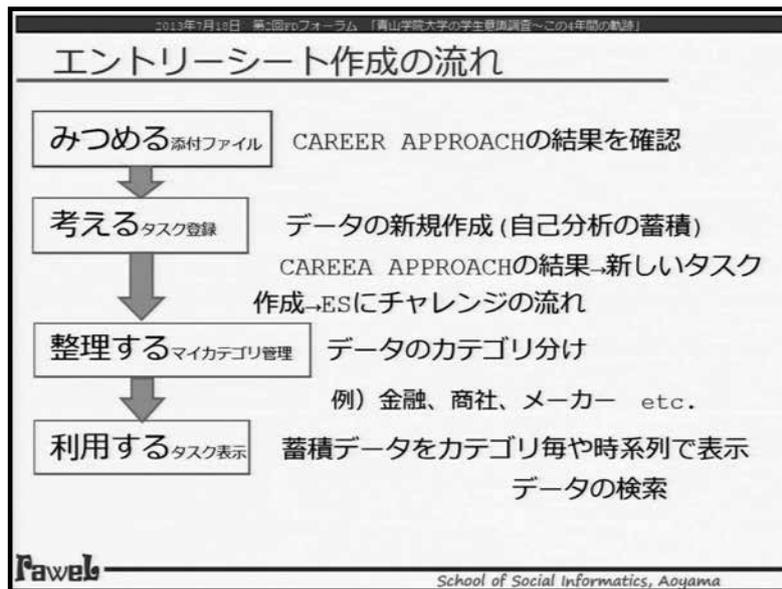
大学生生活の充実度という点ですが、「とても充実している」「まあ充実している」という数字も、平均が80あたりで、87.9と非常に高いですが、「薦めたいか？」と言われますと、

平均70に対して我々は常に50台、「あそこまで充実度に対するの評価が高いのになぜ薦める気になれないのか」というところはまだ解明されておりませんが、数字としては経年的に出てきている数字になります。



これは最終的なイメージギャップです。これも先ほど後半で話が出ていたかと思うのですが、授業の内容に関してのわかりやすさの評価が比較的高いのに比べて、「自由時間が多いという評価が少ないです」から自由時間が少ないということですが、それはそれでいいかということです。

それから「周囲の学生の意識が高いという評価が低い」、高いと思えないというところがなんとなく自己否定的で、この内容についての解明も急がれるかなと思っています。それから「興味のある科目の数が少ない」「授業内容が難しい」これは、難しいというところはあれですが、やはり分野が分散されているのでドットと一つのテーマを進めていきたいという学生にとっては、興味のない科目もとらなければいけないというカリキュラム体系が、若干の不満といえますか、想像より悪いというところの評価につながっているのかもしれないです。そういう意味で新しいカリキュラムでは自分の専門性というものをどう意識させるかというところに反映させているようなところもあります。



時間がオーバーしているかもしれませんが、もう一点最後にご紹介したいのは学生にこの調査結果をどうフィードバックさせるかという取り組みです。エントリーシートという具体的なターゲットを置きまして、キャリア支援の中でこの調査結果を利用させたいということで1年から2年ぐらいかけて取り組みを進めました。

みつめる、考える、整理する、利用するというステップの中でキャリアアプローチというものがこの調査結果であります。学生は3年生の段階でこういうキャリアアプローチの結果報告書というものを受け取るわけですが、具体的にこの結果報告書をどう活用するかというところに踏み込んでいないところでした。





そこで、これがこの後期からスタートさせようとしているシステムのトップページとなります。最終的に、エントリーシートにチャレンジということでエントリーシートをつくっていくわけですが、従来ですと紙ベースでしか配布されていなかったものをPDFのファイル形式で配布可能な形にしてそれぞれの学生に対して配布し、「まずこれを確認しましょうね」というところからスタートです。

それから、このエントリーシートを作成する、あるいは自分が就職に向けて取り組んでいくというときにどういうステップで何をやらなければいけないかということをもナビゲートしようということで、これもベネッセのキャリアアプローチのところを基にしてつくったものです。自己PR云々と志望動機、エントリーシートをつくっていくと、志望動機では会社を選ぶ際の価値観というものをもどう考えるのか、企業とその企業の適正をどういうふうに調べていくのかということです。

0件の所は何もないわけですが、2件の所は学生につくってもらったサンプルがあります。このように埋めていくのですが、その学生が従来つくってくれたものをこのような形で表示することができます。以前つくったものをほぼ参考にしながらもう一度考えていくというような環境になっています。

それから、最終的にエントリーシートにチャレンジということで、自己PRの仕方など、自分で作成したものをベースにしてエントリーシートをつくっていくこととなります。今までつくってきたものを素材としてエントリーシートを完成させるというようなプロセスになります。

たとえば、これは管理者側で提供しているのですが、「これはなかなか参考になるな」というようなエントリーシートをサンプルとして提示しています。これは凸版に就職したときのエントリーシートの例です。それから〇〇商事、これはサンプルでつくったものです。A銀行、金融です。

自己PRするので学生生活の振り返りがあり、以前に自分がつくったものを参考にしな

がら志望理由を完成させていくというシステムになっています。詳細な説明は省かせていただきますが、我々の学部では、これは相模原の社会情報学部の先生も何人か見ているので「本当に完成したんだ」と思ってくれる先生もいますが、夏休み明けぐらいをめぐりに、3年生の学生をユーザー登録し、キャリアアプローチのデータをフィードバックし、サンプルデータを入れ、参考資料を入れながらタスクの作成といったところを、振り返りをさせながら取り組ませていくという取り組みをしていこうと考えています。

ということで、雑駁な話になってしまいましたが、学生意識調査の活用事例報告とさせていただきます。ありがとうございました。

4. 質疑応答と意見交換

加藤：稲積先生、どうもありがとうございました。

それでは、ここから質疑応答に移りたいと思います。質問の際には、マイクをお届けいたしますのでお手数ですが挙手をお願いいたします。マイクが手元に渡りましたら所属とお名前をおっしゃっていただけますでしょうか。それでは皆さま、よろしく願いいたします。

質問者：私は受験関係のことを扱っていますが、受験業界ですと「英語の青山」と言われて、英語教育に対して外部からの評価が非常に高いです。きょうの発表で大学生の中では課題があるという声大きいということで非常に驚いていますが、実際に大学側としては、学生から挙がっている語学教育に対する要望に対してどのように対応するお考えなのか、ご意見をお伺いできればと思います。

長谷川：ありがとうございます。英語の青山という世間に行き渡っているイメージと先ほどの結果はちょっとギャップがあるというご指摘かと思えます。これにつきましては、現在、各学部で英語教育をやっているわけですが、さまざまな改革の動きがあります。

コミュニケーション中心の英語教育のほうに切り替える動きが今、進んでいるところであると認識しておりますので、そういったことを大学としてさらに支援していくような形をとり、さらに、語学教育だけではなく、英語を使った専門科目の授業など、そういうところに力を入れていくなかで今後解決していきたいと考えております。

質問者：ありがとうございました。

加藤：ほかにご質問はございますか。

質問者：きょうの先生のお話の中に大学院進学に対して学生の目が向かないという発表がありました。大学院というと今、非常に多様化してまして、先生のイメージされる大

学院は、学校自体、学際的な要素が強いのですが、専門職大学院なのか、研究者を目指す従来型の大学院か、どちらを念頭に置いて大学院に目を向けてくれないとおっしゃるのでしょうか。

稲積：従来型のものか専門職かと、確か大学院はいくつかこうカテゴライズされていて、今度職業人員云々というようなところも含めるとカテゴリー的にはもう少し多くないかなと思っていますが、その意味では、研究者養成まではいかないとしても、つまり修士レベルで就職を想定した高度職業人というようなレベルをまず確保したいということ、もう一点は、我々の研究科の中ではある分野においては比較的進んだ取り組みをやっているのですが、社会人向けのコースを整備していくことも併行的にやっているのですが、いずれにしても、学部から大学院へという基本的な高度職業人養成のパスというものがまだ確立されていないことが最大の弱みで、まずはそこをなんとか確保したいということでお話をさせていただいたということです。

質問者：わかりました。ありがとうございます。

加藤：ほかにご質問はございますか。いかがでしょうか。

質問者：先ほどの学生の要望のアンケートを見ていて考えたのですが、大学生が大学側に対して授業の改善などを要望する窓口とか、その団体なるものは存在しないのでしょうか。あるいは今後そういうものを設置するような計画等、ございませんでしょうか。

長谷川：私のところで少しご説明いたしましたが、授業に関しましては基本的に学生の授業アンケートを実施しております。これはかなり実施率の高いもので、個々の授業につきましてはその中で学生の意見を聞くという形になっております。

それから、最近、FD活動の中で学生のFDスタッフというものもつくられておりますので、そういったところからも今後、意見を吸い上げていけるのではないかと考えておりますので、単に授業アンケートだけではなくて、こういう学生意識調査とか、そういうものを複線で少し考えていきたいというところでございます。

質問者：ありがとうございました。

加藤：もう一方、後ろの方

質問者：ベネッセさんの35ページですが、学業・学間に意欲的になった時期ということで1年生前期、1年生後期という形でポイントが高くなっております。青学さんには「青山スタンダード」というすばらしい教養科目がございまして、今回のキャンパス再配置によ

って多少の変化が生まれてくるかと思います。その点をご説明いただければと思いますが、いかがでしょうか。

長谷川：青山スタンダードにつきましては、すべての学生に一定のスタンダードを持った教育をと、一定水準の技能、一定範囲の知識・教養を身につけてもらいたいという形で進めております。これにつきましては、できるだけ同様のカリキュラムを両キャンパスへ提供するという方向で進んでいる形で、その変更はありません。

ただし、相模原キャンパスは現行2学部、青山キャンパスは7学部という形で学部数がアンバランスになり、専門領域も構成が異なっておりますので、そのあたりが今後どのように影響してくるのかというところを見ながら青山スタンダードの改革を進めていければと考えております。

質問者：ありがとうございました。

加藤：ほかにご質問はございませんでしょうか。それでは、どうもありがとうございました。時間も押してまいりましたので、このあたりで閉めさせていただきたいと思います。とりわけ、報告者のベネッセコーポレーション谷口さま、社会情報学部長の稲積先生、ご多忙のところを大変ありがとうございました。また、ご参加いただきました皆さまにも御礼を申し上げます。ありがとうございました。

最後に再び長谷川副学長より今後の学生意識調査のあり方についての展望を申し上げまして、本フォーラム閉会のご挨拶とさせていただきます。長谷川先生、よろしく願いたします。

5. 閉会挨拶

長谷川：本日は、長時間にわたりましてこのフォーラムにご参加いただきまして大変ありがとうございます。また、貴重なご意見・ご質問をいただきましてありがとうございました。

報告と議論の内容につきましては改めてまとめる必要はないと思います。今回のフォーラムを準備する中で、これまでの学生意識調査から、学生のみなさんが大学教育、大学生活につきまして一定の満足度を得ていることがわかったことは、大変ありがたいと思っております。

ベネッセさんのご指摘によりますと、大学ブランドという言葉が使われておりますが、これを大切にしていくことが一つのあり方だと思います。ただ、マーケティング用語で言いますとブランドというのは補助的サービスでございますので、私どもとしては今後、本質サービスのほうにもますます力を入れていきたいと考えているわけです。

それについてもかなり貴重な示唆がこの調査でも得られていると思います。特に教育支援については少人数での授業、またPBL型の授業がやはり必要になってくることが資料の

中からも見てとれますし、それが1年前期というかなり早い時期、さらに、大学志望度が低かった学生を育てていくために非常に重要な仕組みであることも示されていたと思います。

いろいろ耳の痛い点もございましたが、そういった点を今後活かしていくなかで、そのためには、先ほど稲積先生のお話にもありましたが、学部の力が必要不可欠で、また大変重要な役割を果たしていると思います。そういった経験を含めながら今後、この大学満足度の向上というところに向けて取り組んでいきたいと考えております。

本日はどうもありがとうございました。以上で学生意識調査—この4年間の軌跡—と題したフォーラムを閉じさせていただきたいと思います。

加藤：それでは、最後になりますが、最初にお願いしましたように、アンケートにご協力いただければ幸いです。アンケートの回収場所は入り口の所にごございます受付でございますので、ご回答いただきました方は受付のほうにご提出をお願いいたします。本日はどうもありがとうございました。



2. 学生意識調査の4年間とその成果について



青山学院大学副学長
長谷川 信

2 調査実施概要 (データの蓄積について)

年度	1年生	2年生	3年生	4年生
2008	1学部 【国】		国…国際政治経済学部 経…経済学部 総…総合文化政策学部 社…社会情報学部	
2009	4学部 【国】【総】【経】【社】	1学部 【社情】		
2010	全学部	4学部 【国】【総】【経】【社】		
2011	全学部	全学部	全学部	全学部
2012	全学部	全学部	全学部	全学部
2013	全学部	全学部	全学部	全学部

- 2010年度より全学的に実施
- 2013年度4年生の意識調査実施で1年～4年生までつながる

3 学年別の調査目的

- **1年次生(4月実施)**
(学生にとって)
学生生活の目標設定、学びと進路のつながりを意識するきっかけとする。
(大学にとって)
入学時の意識、期待感を把握し、学生の意識の変化を測る起点のデータとする。
- **2年次生(4月実施)**
(学生にとって)
学生生活の振り返りをもとに、2年次以降の目標を再設定するきっかけとする。
(大学にとって)
1年間の学生生活の満足度・成長感を把握し、教育改善・学生生活の充実につなげる。
- **3年次生(4月実施)**
(学生にとって)
自己分析の結果にもとづいて、進路就職に結びつく、自己PRのポイントを明確にする。
(大学にとって)
学生生活の満足度・成長感と学生が身につけた能力を把握し、教育改善・学生生活の充実につなげる。
- **4年次生(3月実施)**
(大学にとって)
4年間の学生生活の満足度・成長感、学生が身につけた能力、本学の教育への評価などを総合的に把握し、教育改善・学生生活の充実につなげる。

4 個人向けフィードバックについて

1年 【テーマ】低学年キャリアデザイン：学生生活の目標設定・学びと進路のつながり



▲自分の強み、弱みを客観的に把握できます
▲ワークで自己理解が深まります

＜1年生受講者感想例＞
●自分が就職するにあたって、どういうことを考えて大学生活を過ごしたらいいのかを考えるきっかけになった。これから大学生活をどう過ごせばいいか、就職するためには何が必要とされるのかなどを知ることができた。
●おもしろく、真剣に勉強できた。とても参考になったうえ、不安感が拭われ、頑張ろうと前向きになった。自分のことも見えてきた！



2年 【テーマ】低学年キャリアデザイン：学生生活の振り返りと目標の再設定



▲この1年の成長や学びを振り返ります
▲1年次に学んでいる内容の定着が図れます

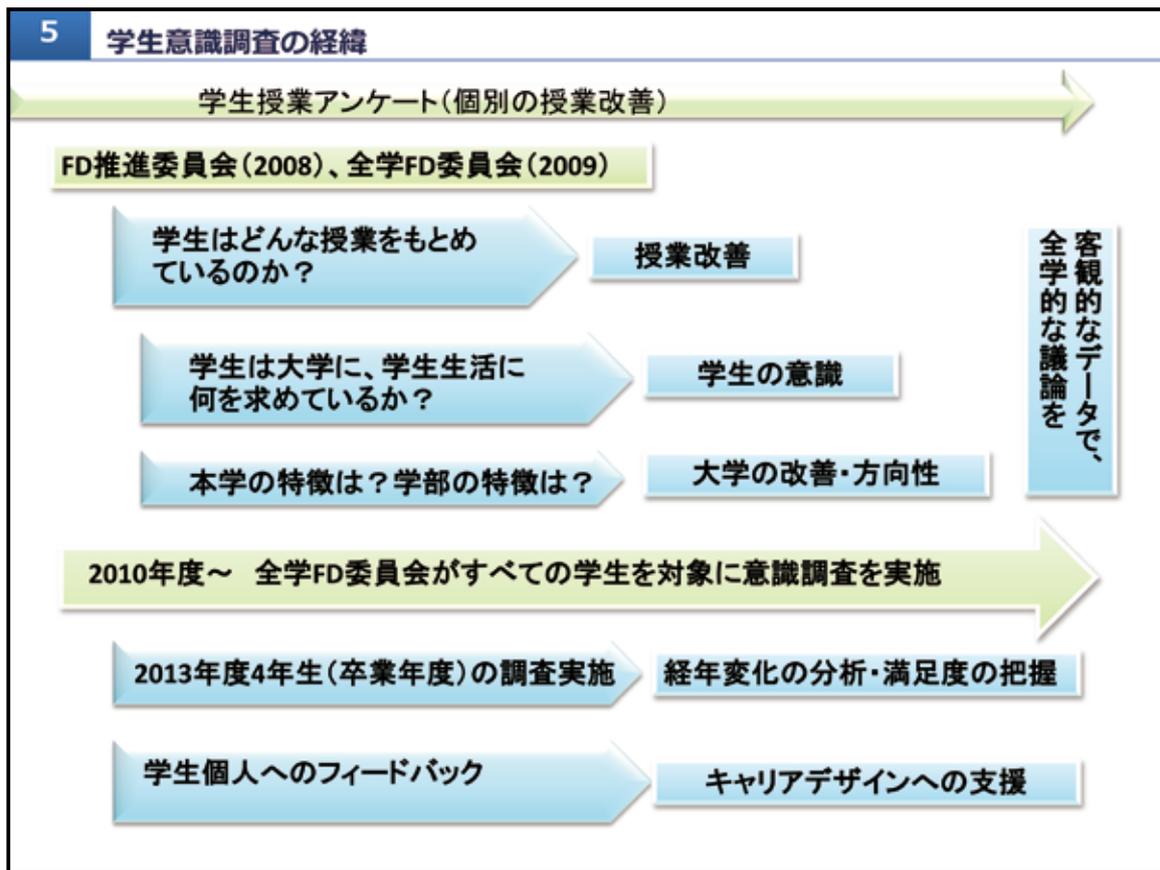
＜2年生受講者感想例＞
●私は今年からアクティブに活動しているのですが、講義の中で「2年生の間にはどれだけ経験しているかが大事」と言われたので、自分の今やっていることは間違いないかと勇気ももらいました。勉強と活動を両立させていくためにスケジュール管理をしてみたいと思います。それは将来、仕事と家庭の両立につながると思います。
●大学2年生の今が一番、自分のしたいことや興味のある事に挑戦できる時間がたくさんあるんだと改めて気づきました。楽しいことばかりじゃなくて、自分の苦手な事などにもちよつとの勇気を出して、どんどん参加していこうと思います。人見知り克服したい

3年 【テーマ】自己分析と就職活動：自己PRと志望動機の作成



▲就職結果から自己PRや志望動機を作成できます

＜3年生受講者感想例＞
●自分の中では就職への意識はかなりできていたと思っていたが、やるべきことはまだまだあると素直に感じた。少しずつでもいいので今からできることを進めていきたい。
●改めて自分の将来について考えさせられた。今までいろいろと企業にアピールできるようなこと(東南アジアボランティア旅行など)を大学時代にしておいてよかったと思った。これからは人と差別化できるような社会経験を積んでいきたい。



6 本学の活用事例(2012年度)

時期	場面・会議体	対象	データの着目ポイントなど
6月	ベアレンツウィークエンド	経済学部保護者	経済学部の学生がどのように成長しているか 学生生活でどのような力が身についているか
7月	学部パンフレット	経済学部	現代経済デザイン学科満足度
7月	報告会	文学部	比較芸術学科の特徴、併読受験先など
7月		教育人間科学部	充実度や満足度の高さとその背景について
7月		経済学部	英語への学びの意識の高さ
7月		経営学部	学びの環境面への満足度について
7月		法学部	推薦入試入学生の3年次の満足度について。カリキュラム改訂をする2013年度の変化予測。
7月		総合文化学部	推薦入試と一般入試の成長・満足度の差と背景
7月		国際政治経済学部	学びの意欲や意欲の高さとその背景。カリキュラム満足度。
7月		理工学部	学科ごとの成長感、満足度の差。特に、学びへの目的意識と対人面の自信有無についてなど。
7月		社会情報学部	推薦入学生の特徵について/入学後、どのような分野に進みたいか
7月		執行部	各学部の学生が、入学から卒業までどのように成長し、どのような満足度で卒業していくのか。
10月		FD委員会	職員と学部部門との連携。就職支援の広報について、職員対応満足度の全国比較
10月		全職員	職員による学生支援の振り返り/各種施策の効果確認/職員が学生に与える印象や影響について
11月		入試アドバイザー	学生向けサービスとしての「自己発見レポートⅠⅡ」「キャリア・アプローチ」、満足度など
1月	進路・就職センター	不本意入学生の内定有無、満足度、各種就職支援施策の妥当性検証	
-	オープンキャンパス	受験生、保護者	(国際政治経済学部) 学生の学部に対する期待、満足度など
11月	報告会	法人総合企画部	図書館建設に向けての学生の声、施設への満足度や要望、各学部の成長感とカリキュラム満足度の関係
-	ポートフォリオ作成	社会情報学部学生	キャリアアプローチ個人結果票を活用した、自己分析、志望理由作成、エントリーシート作成対策
1月	自己点検	社会情報学部	※今後、認証評価に活用
6月	1年生のための進路・就職講座	1年生(4回実施)	講座目的『大学生生活の目標を持つ』『就職活動や将来活躍するために、どのような経験が必要かを考えるきっかけとする』
	2年生のための進路・就職講座	2年生(4回実施)	講座目的『大学生生活を振り返り、成長をとらえ、大学生生活の目標を再設定する』『就職活動や将来活躍するために、どのような経験が必要かを考えるきっかけとする』
	3年生就職活動に向けた自己理解講座	3年生(3回実施)	講座目的『就活とは何かを知る』『今何を準備しておけばよいか本気で考えるきっかけとなる』『自己PR作成をイメージできるようになる』
過去	企業向けパンフレット	社会情報学部	本学部生の特徴

7 調査結果の利用について



教育支援

- 各学部学科におけるカリキュラム満足度
- 各学部学科における学生の成長、身につけた能力



学生支援(キャリアデザインの支援)

- キャリアアプローチ報告書による自己認識・自己評価
- 進路就職講座によるフィードバック(学生ポータル配信)



広報活動

- ペアレンツウイークエンド(父母懇談会)、進路説明会等の資料
- 本学ホームページによる結果の公表



大学の方針(戦略)

- 大学、学部学科の特徴やその変化を客観的に認識
- 学長基本方針、学部学科の人材育成方針との整合性

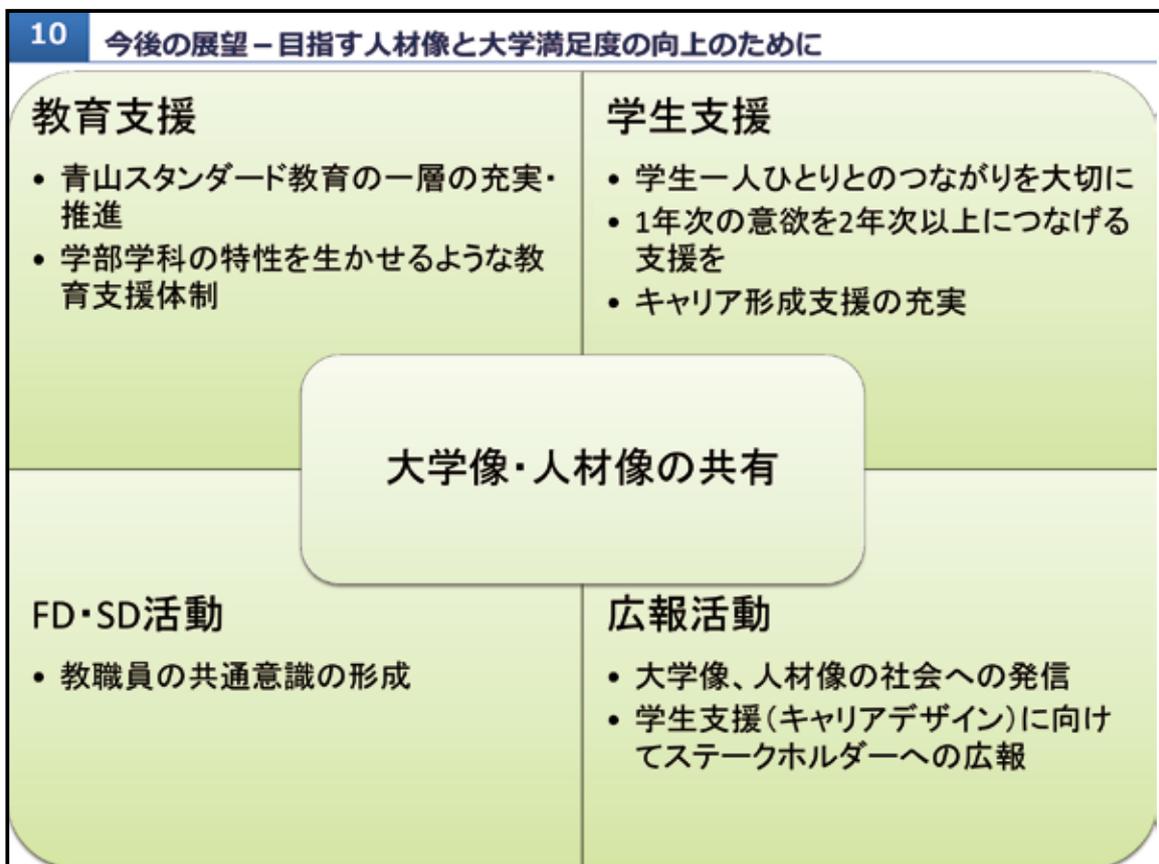
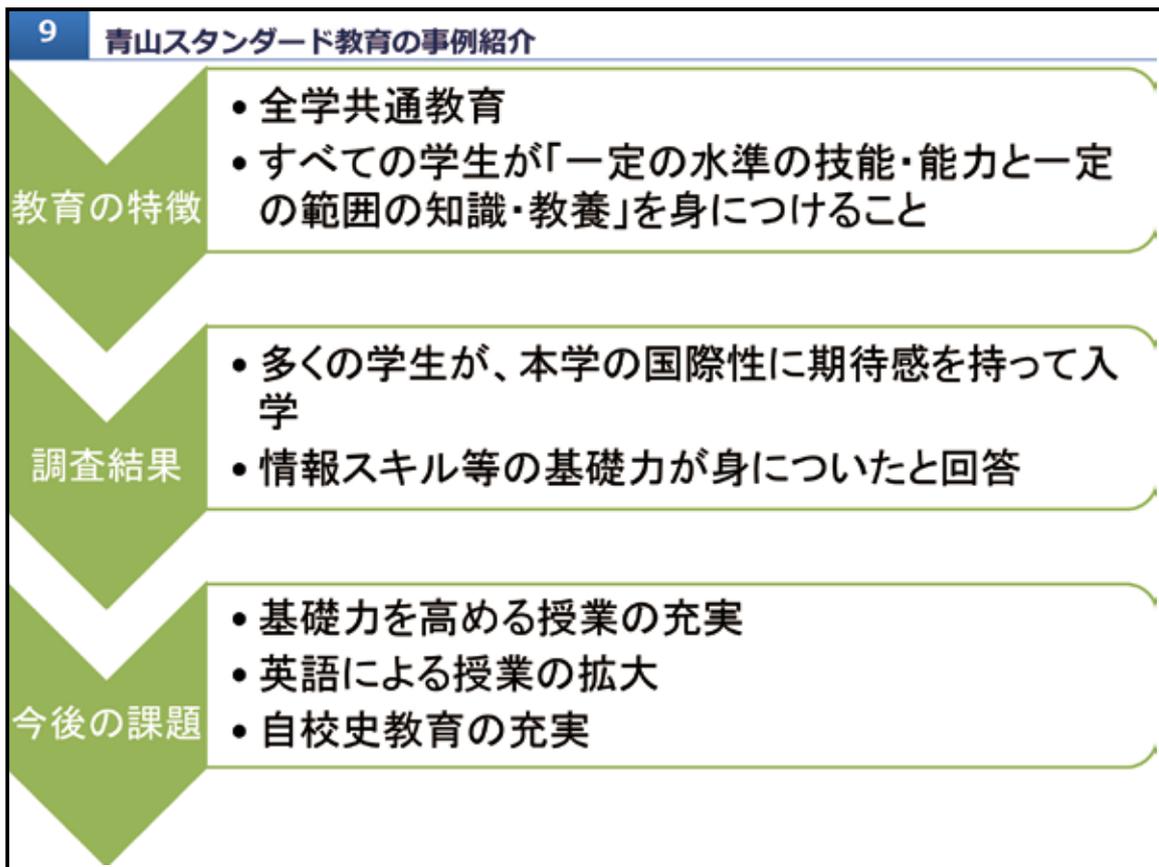
8 青山学院大学が目指す人材育成と調査結果

■仙波憲一学長の基本方針は、「様々な分野や国境を問わず広い視野で物事を考え、常に新しい可能性を探求し学び続け、自分の個性や能力を高め、社会に対して積極的に発信していく」人物像を基本に、「高い倫理観と社会性を併せ持った人材を育成する」としています。

■今回の学生意識調査では、
 入学した1年生が、勉学への関心と社会に役立つ知識、技能の修得に意欲をもち、また海外留学や語学学習に関して、高い意欲を示していることがわかりました。とくに海外留学への意識の高さが特徴的です。
 2年生では、コミュニケーションスキル、情報リテラシー、論理的思考力、問題解決能力などが1年間の授業の中で身についたと感じており、自己認識、対人積極性、社会理解、知的活動性などで成長感を感じています。
 3年生になると、社会的強みとして、国際性、現実的態度、自主性、発信力などが、入学時から順調に伸びていると自覚しています。
 そして、卒業時には、問題解決能力、論理的思考力、情報リテラシー、生涯学習力などを学生時代に身につけることができたと認識しています。

■このように、今回の学生意識調査の結果は、4年間の教育課程が一定程度、学生の成長に寄与していることを示すとともに、人材育成の方針に沿って、さらに教育課程の充実に力を注いでいく必要があることを示しています。

http://www.aoyama.ac.jp/outline/effort/fd/undergraduate/survey_result.html



学生の意識調査から見る青山学院大学の学生像

2013年7月18日 第2回FDフォーラム「青山学院大学の学生意識調査～この4年間の軌跡」



Benesse®
 2013年7月18日
 ㈱ベネッセコーポレーション
 大学事業部 東日本営業課
 谷口 雅子
t-masako@mail.benesse.co.jp
<http://www.benesse.co.jp/univ/>

2

本日のご報告と調査について

内容		
1	NO.3-NO.6	学生意識調査の概要
2	NO.7-NO.15	『1年生データから』 -どのような学生を受け入れているのか？ -学生は青山学院大学に何を期待しているのか？
3	NO.16-NO.22	『2年生データから』 -入学1年後の学生は何に取り組み今をどう感じているか？
4	NO.23-NO.29	『3年生データから』 -入学2年後の学生は今をどう感じているか？
5	NO.30-NO.42	『4年生(2012)データから』 -青山学院大学はどのような人材を育てたのか -卒業前の学生の大学生活に対する感想は
6	NO.43-NO.56	卒業生調査から教育改善のヒントを探る
7	NO.57-NO.58	まとめ・今後の活用について

【受検人数、受検率2013年度】

1年生 学生意識調査・・・ 3,798名(受検率96%)	全国平均(2012年度を掲載)は93,529名
2年生 学生意識調査・・・ 2,988名(受検率64%)	全国平均(2012年度を掲載)は25,843名
3年生 学生意識調査(キャリア・アプローチ)・・・ 2,618名(受検率61%)	全国平均(2012年度を掲載)は46,613名
4年生 (2012年度卒業生)卒業生調査・・・ 2,658名(受検率65%)	

* 1年生～3年生:4月オリエンテーションもしくは履修ガイダンス時に着席方式にて実施
 * 4年生(2012):2012年11月～2013年3月まで郵送方式にて実施

2013年7月18日 第2回FDフォーラム「青山学院大学の学生意識調査～この4年間の軌跡～」

3 学生意識調査の概要



学生意識調査構成

調査A	英語
	判断推理
30分	日本語理解

調査B (適性診断)

アンケート

【对学生】
 調査機能に加え、对学生個別フィードバックも充実
 ⇒自己理解に基づく進路オリエンテーションの役割



【对教職員の皆様】
 複数の入試経路から受け入れた学生を、
 さまざまな角度から分析することができるツール
 ⇒全国データと比較した相対的、客観的特徴の把握
 ⇒学生の個人・集団データとして可視化することが目的

- ・ 教職員の皆様と学生をつなげる多面的な基礎データ
- ・ 入試総括
- ・ 初年次教育、学士課程教育の検証データ
- ・ 広報データ (満足度など学生からの評価の公開)

2013年7月18日 第2回FDフォーラム「青山学院大学の学生意識調査～この4年間の軌跡～」

4 学生意識調査の意味合い(对学生)



	1年生	2年生	3年生
学生の気持ち <div style="border: 1px solid #ccc; border-radius: 50%; padding: 10px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> 期待vs不安 </div> <div style="border: 1px solid #ccc; border-radius: 50%; padding: 10px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> 「想像していたのと違う」 「授業についていけない」「面白くない」 「忙しい」「何となく流される」「友達ができない」 「日々過ごすことに精いっぱい」 将来への漠然とした不安 </div>	<div style="border: 1px solid #ccc; border-radius: 50%; padding: 10px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> 中だるみ。 現実が見え、目標を見失う。 就職への不安... </div>	<div style="border: 1px solid #ccc; border-radius: 50%; padding: 10px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> 就職準備！ </div>	<div style="border: 1px solid #ccc; border-radius: 50%; padding: 10px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> 大学生活の総括 </div>
学生意識調査実施 学生生活の目標設定 1年の振り返りと目標再設定 就職への意識付けと不安の解消			

● 学生生活のPDCAサイクル支援 * 節目で刺激を与える
 * 特に大規模大学では、学生個人にリーチすることが難しい。
 * 節目で刺激を与え、やる気を与える仕掛けを作る。(特に低学年における進路オリエンテーションの充実)

2013年7月18日 第2回FDフォーラム「青山学院大学の学生意識調査～この4年間の軌跡～」

7

2013年度 1年生

- どのような学生を受け入れているのか？
- 学生は青山学院大学に何を期待しているのか？

2013年7月18日 第2回FDフォーラム「青山学院大学の学生意識調査～この4年間の軌跡～」

8

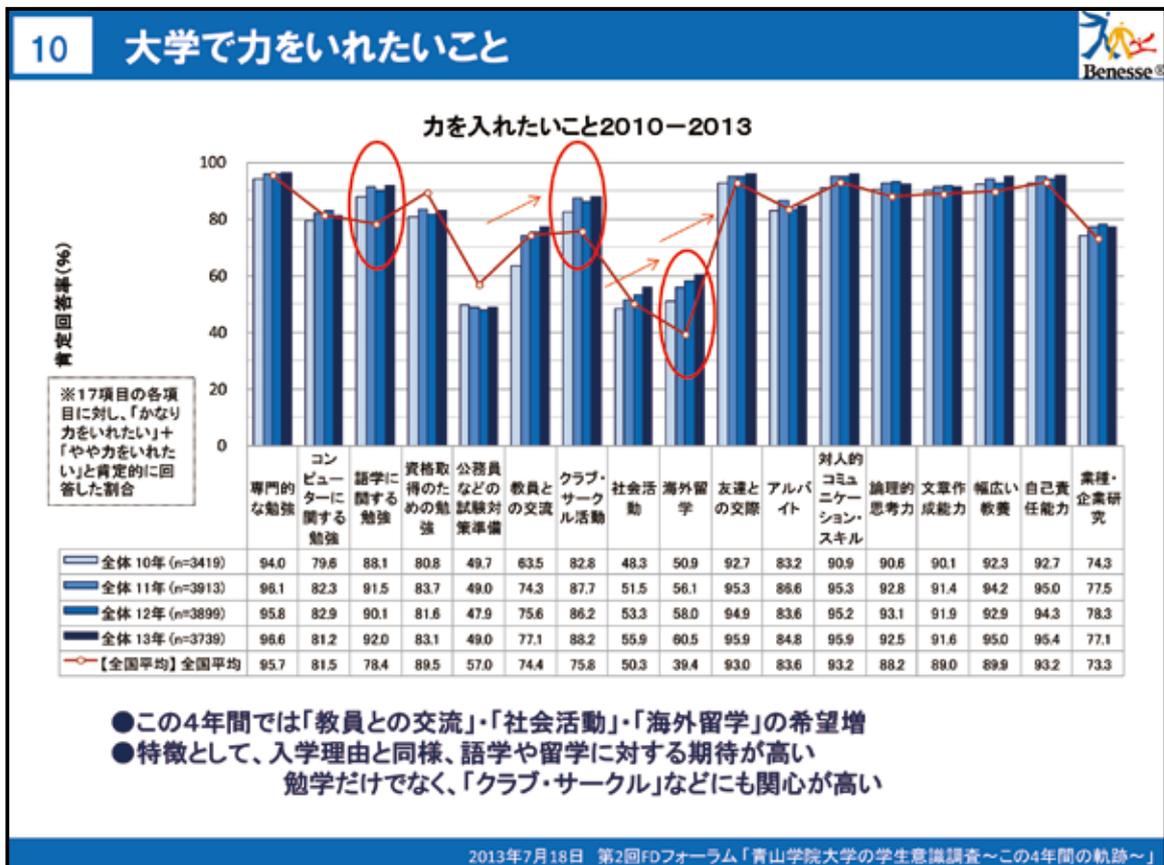
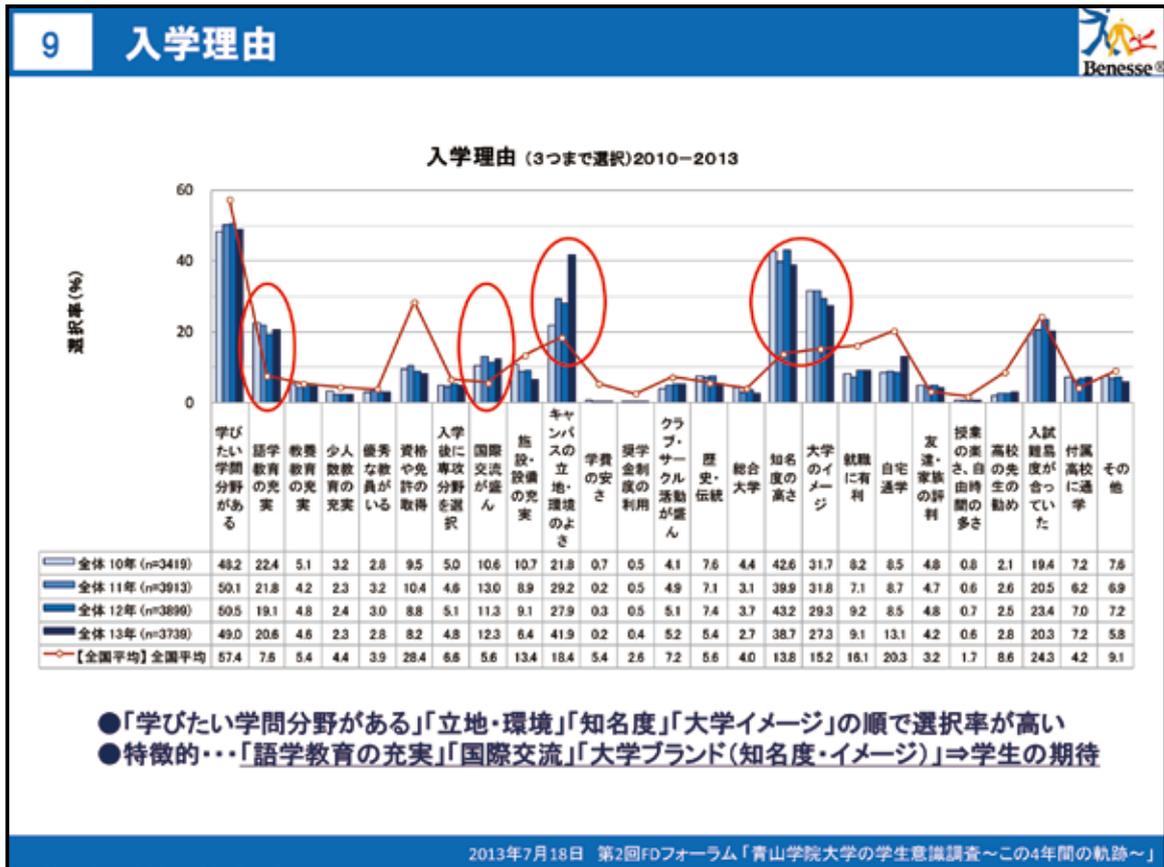
進学理由

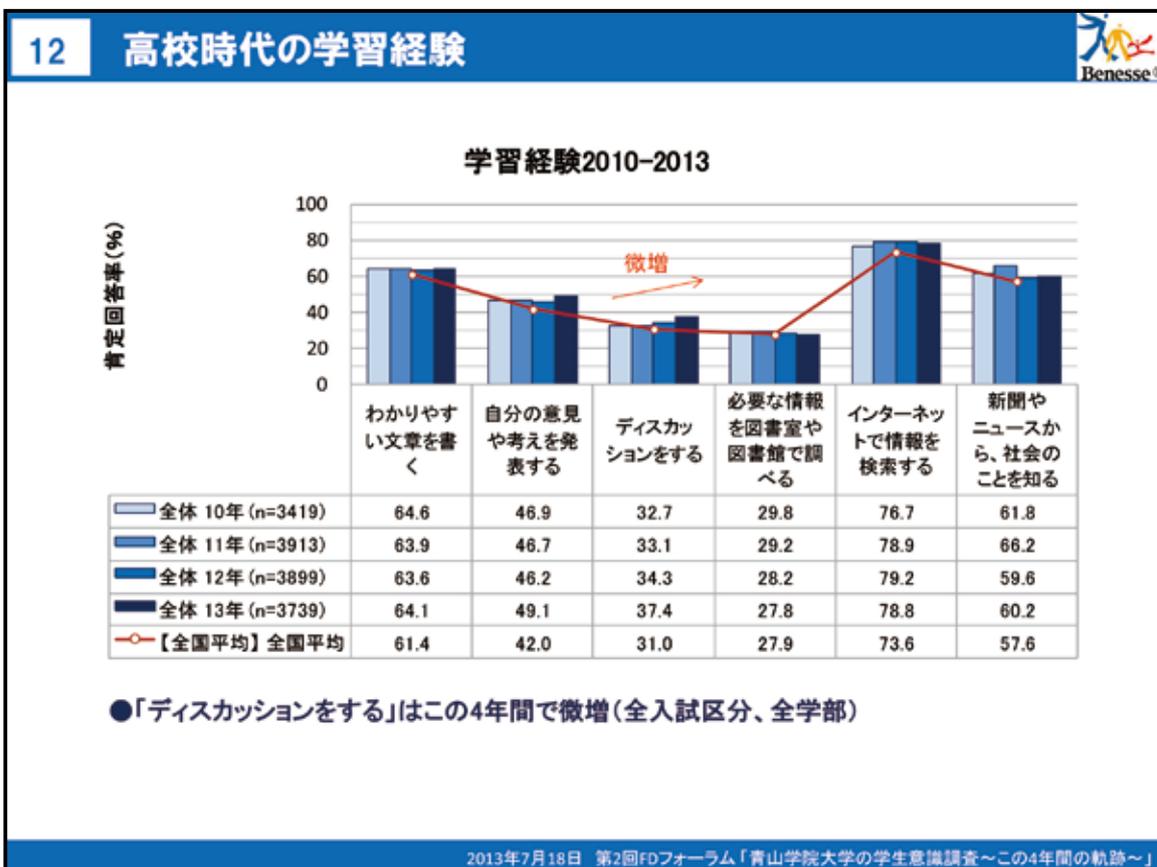
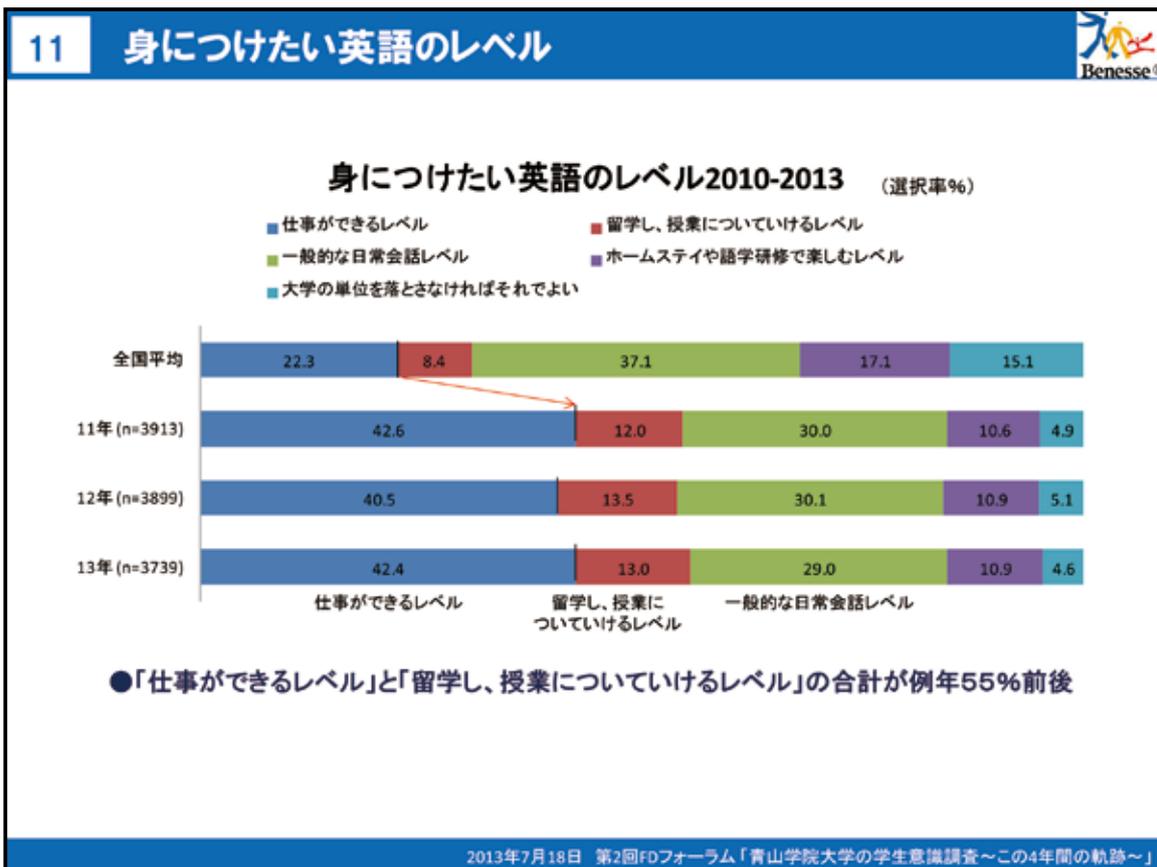
進学理由(2010-2013)

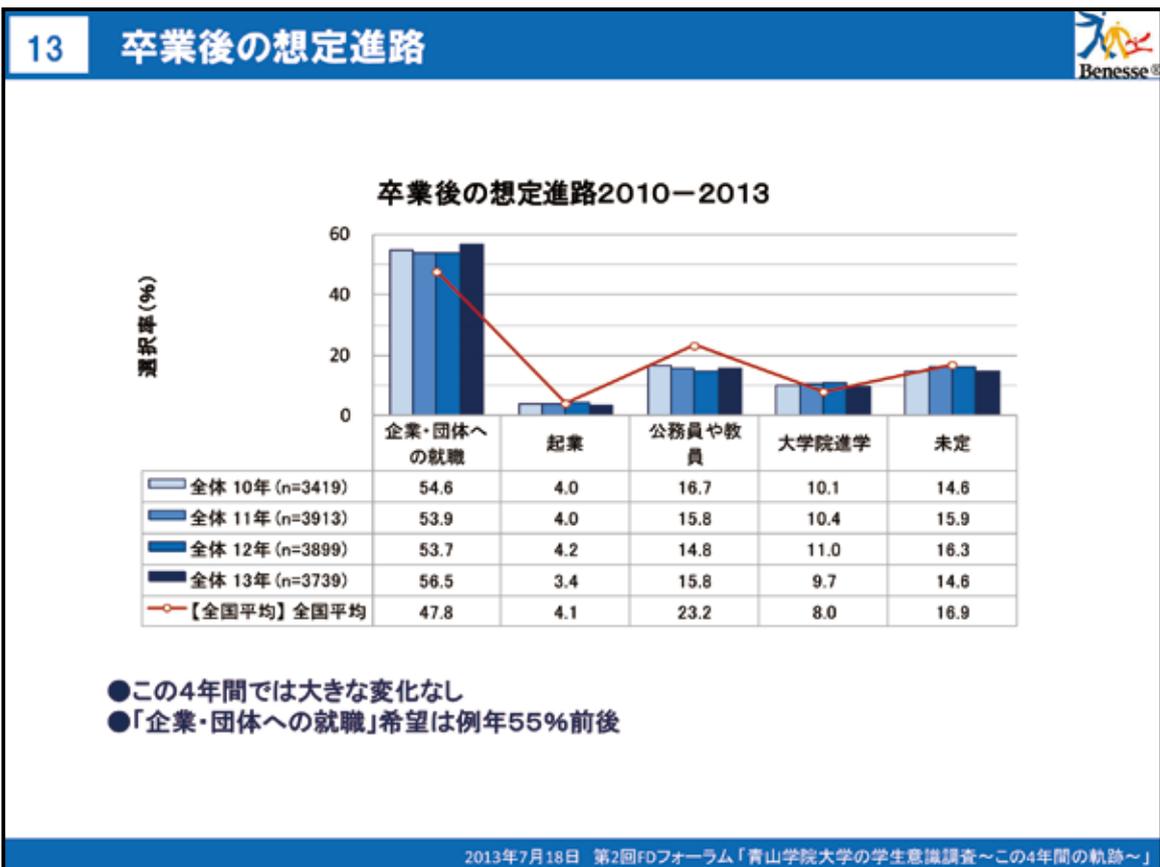
	興味や関心のあることを勉強したい	専門的な知識や技術を身につけたい	社会で役立つ知識や技能を身につけたい	将来のための資格や免許をとりたい	さまざまな人々と交流したい	大卒の学歴がほしい	先生や家族が進学を勧める	やりたいことがはっきりしていない	大学に行くのが当たり前だった	自由に過ごす時間がほしい	自分を変えてくれそう	その他
全体 10年 (n=3419)	31.8	7.8	19.8	6.3	4.9	9.1	1.1	6.4	8.1	1.2	2.0	1.6
全体 11年 (n=3913)	32.3	7.7	21.9	6.3	6.6	5.5	0.6	6.9	7.0	1.3	2.5	1.4
全体 12年 (n=3899)	31.2	8.1	21.3	6.4	5.9	7.5	0.9	6.3	6.9	1.3	2.9	1.1
全体 13年 (n=3739)	32.6	8.1	21.4	6.5	6.1	6.2	0.7	6.1	7.5	1.1	2.7	1.3
【全国平均】全国平均	27.1	12.6	16.5	16.1	3.3	6.3	1.7	7.2	4.0	1.2	2.3	1.7

- この4年間で大きな変化なし
- 「興味や関心のあることを勉強し」、「社会で役立つ知識や技能を身につけたい」
- 「大学に行くのが当たり前だった」の比率は例年7～8%前後(全国4%)

2013年7月18日 第2回FDフォーラム「青山学院大学の学生意識調査～この4年間の軌跡～」





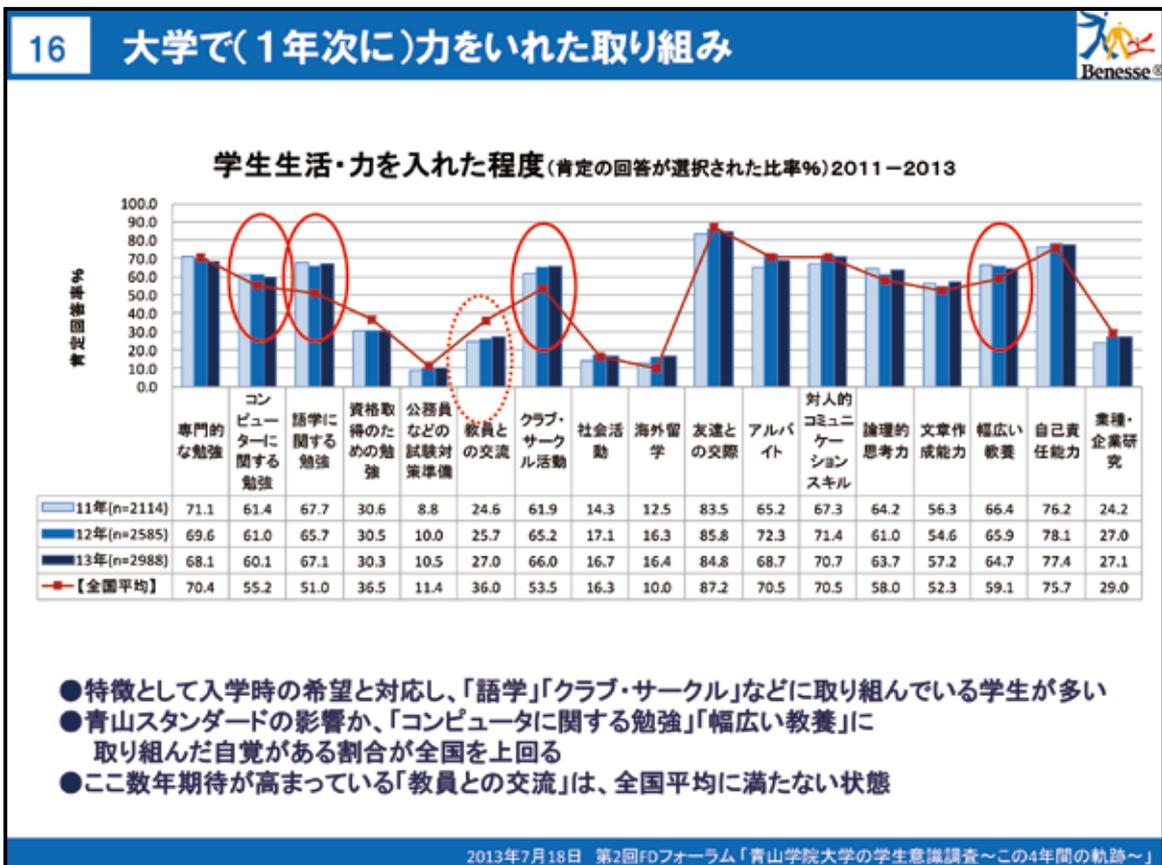
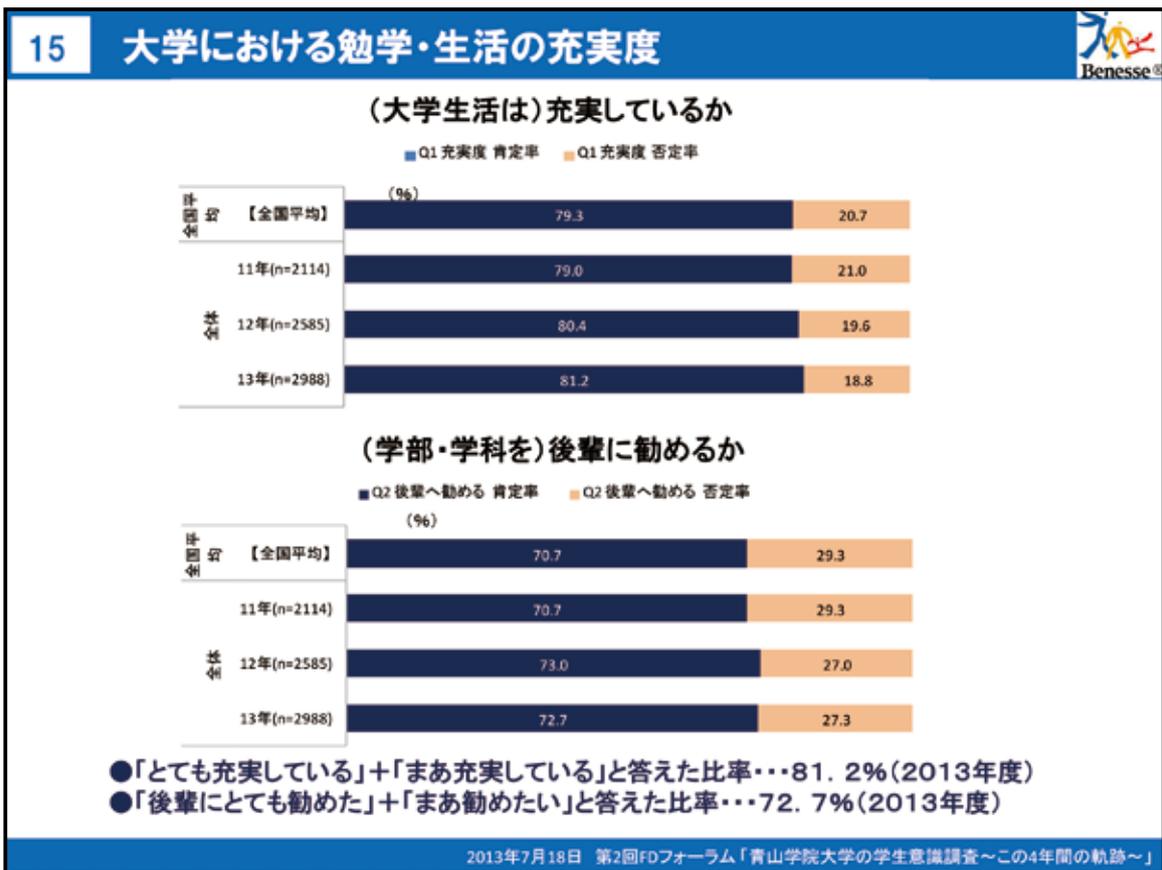


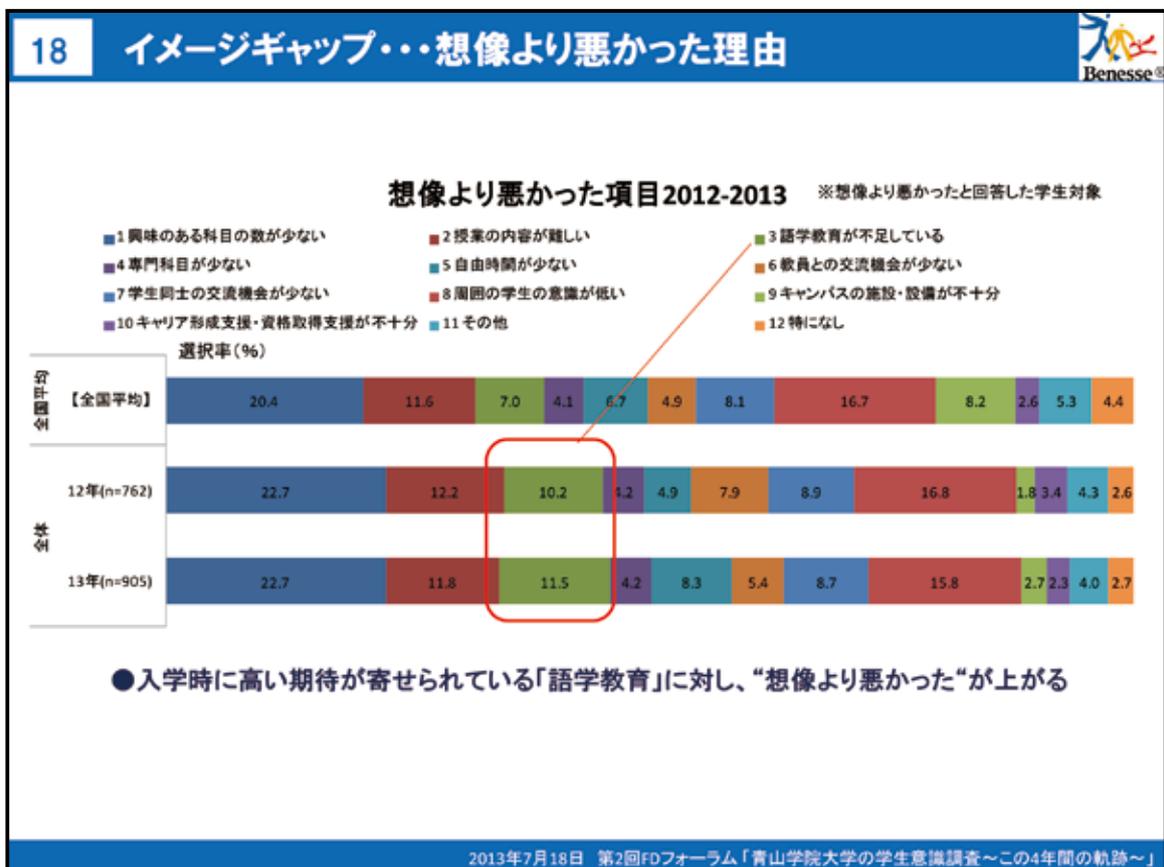
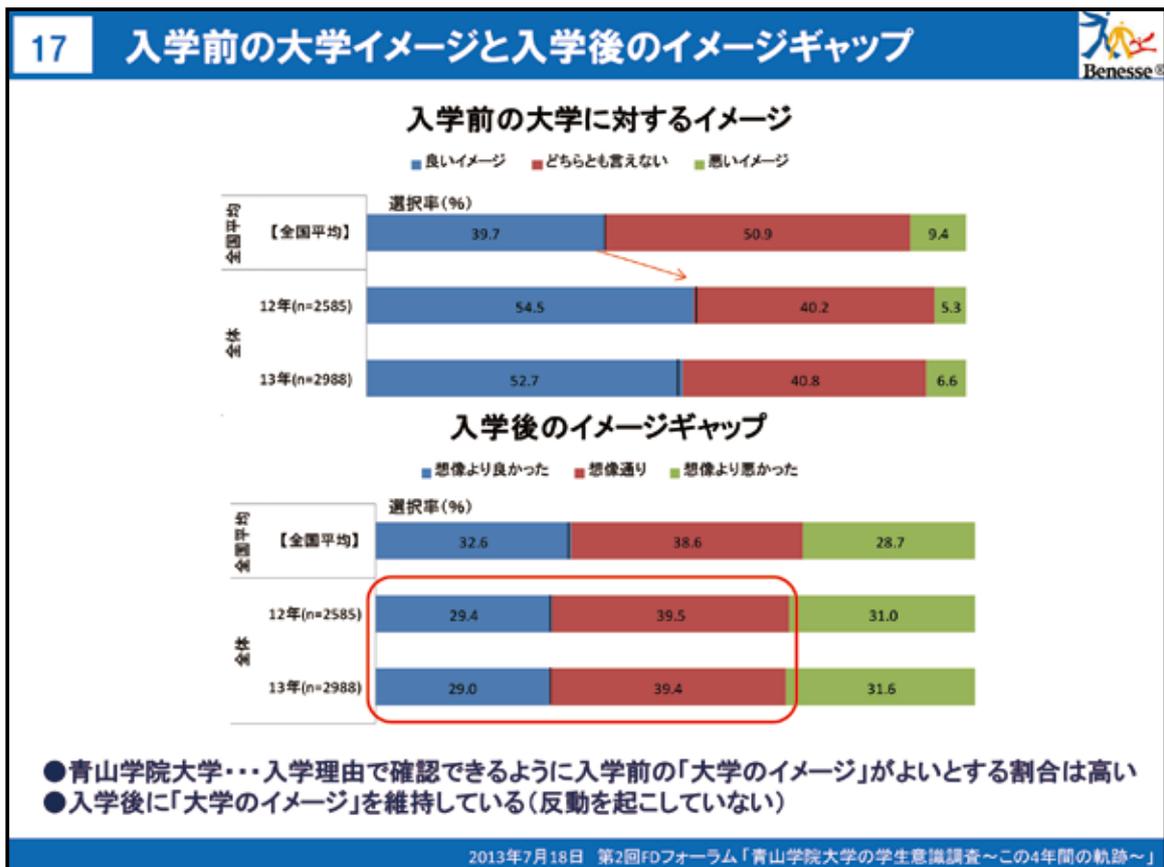
14

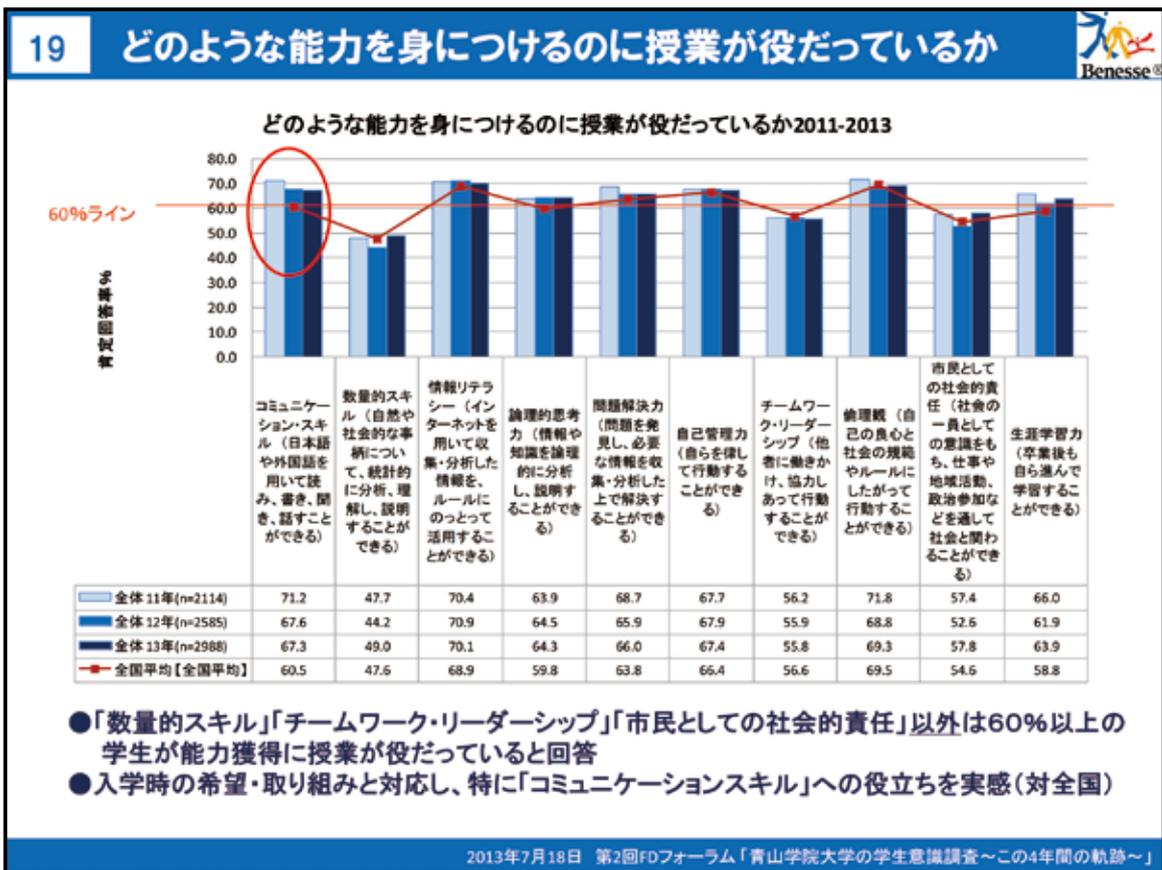
2013年度 2年生

- 入学1年後の学生は何に取り組み今をどう感じているか？

2013年7月18日 第2回FDフォーラム「青山学院大学の学生意識調査～この4年間の軌跡～」







21

2013年度 3年生

●入学2年後の学生は今をどう感じているか？

2013年7月18日 第2回FDフォーラム「青山学院大学の学生意識調査～この4年間の軌跡～」

22

大学における勉学・生活の充実度

(大学生活は)充実しているか

■肯定率 ■否定率

設計割合	肯定率 (%)	否定率 (%)
【全国平均】	78.5	21.5
12年(n=2405)	81.6	18.4
13年(n=2618)	81.7	18.3

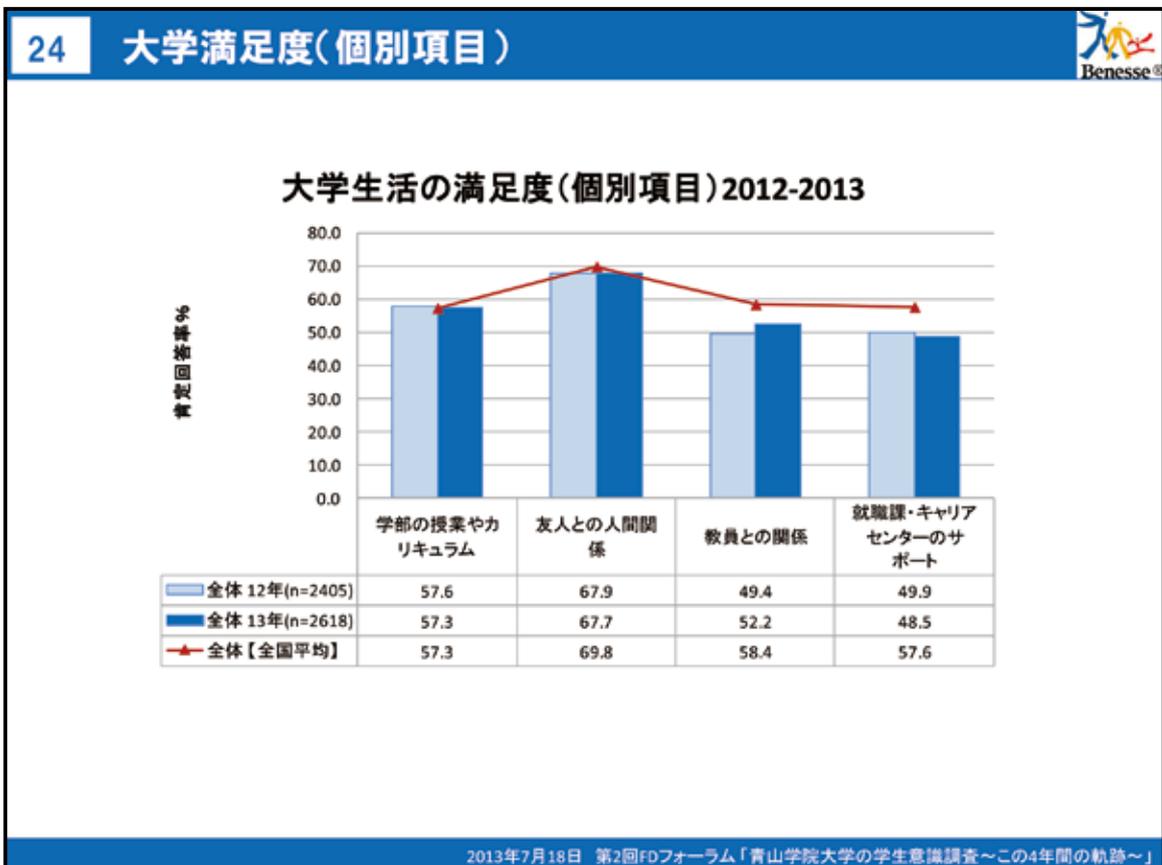
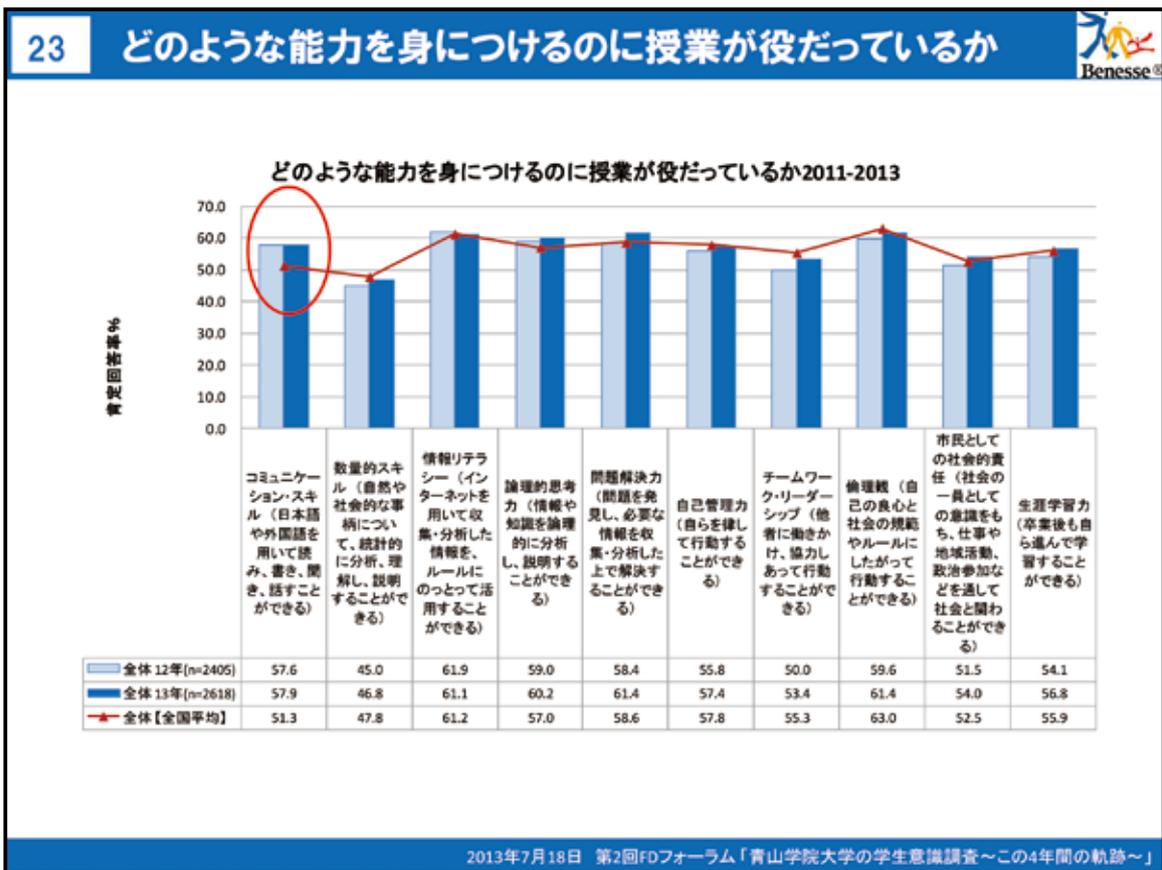
(学部・学科を)後輩に勧めるか

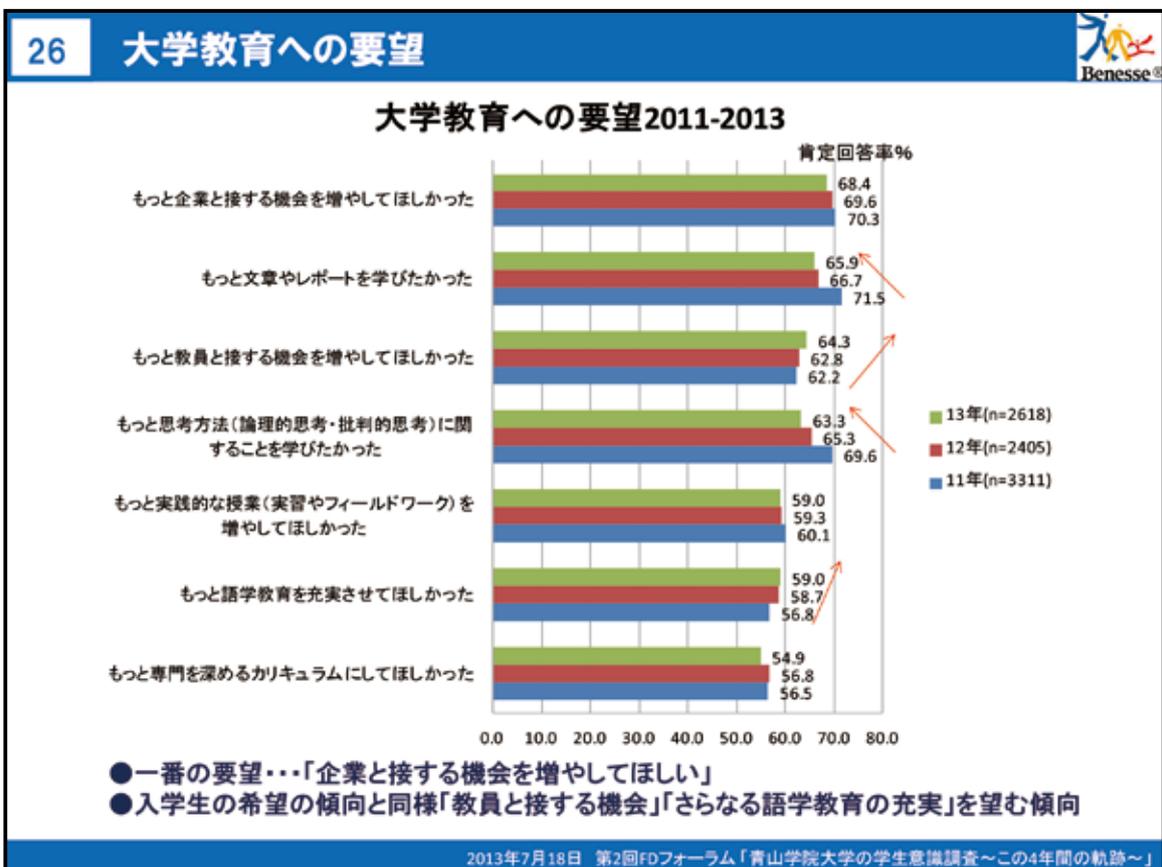
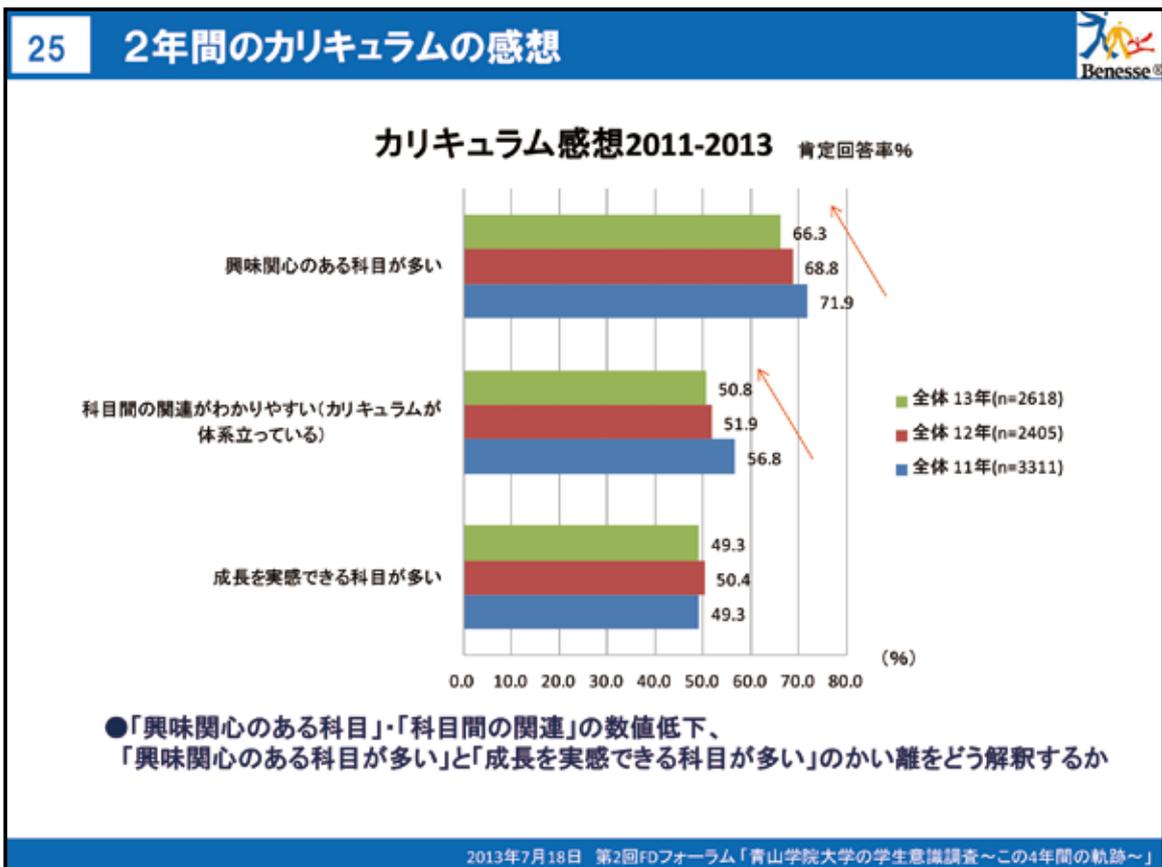
■肯定率 ■否定率

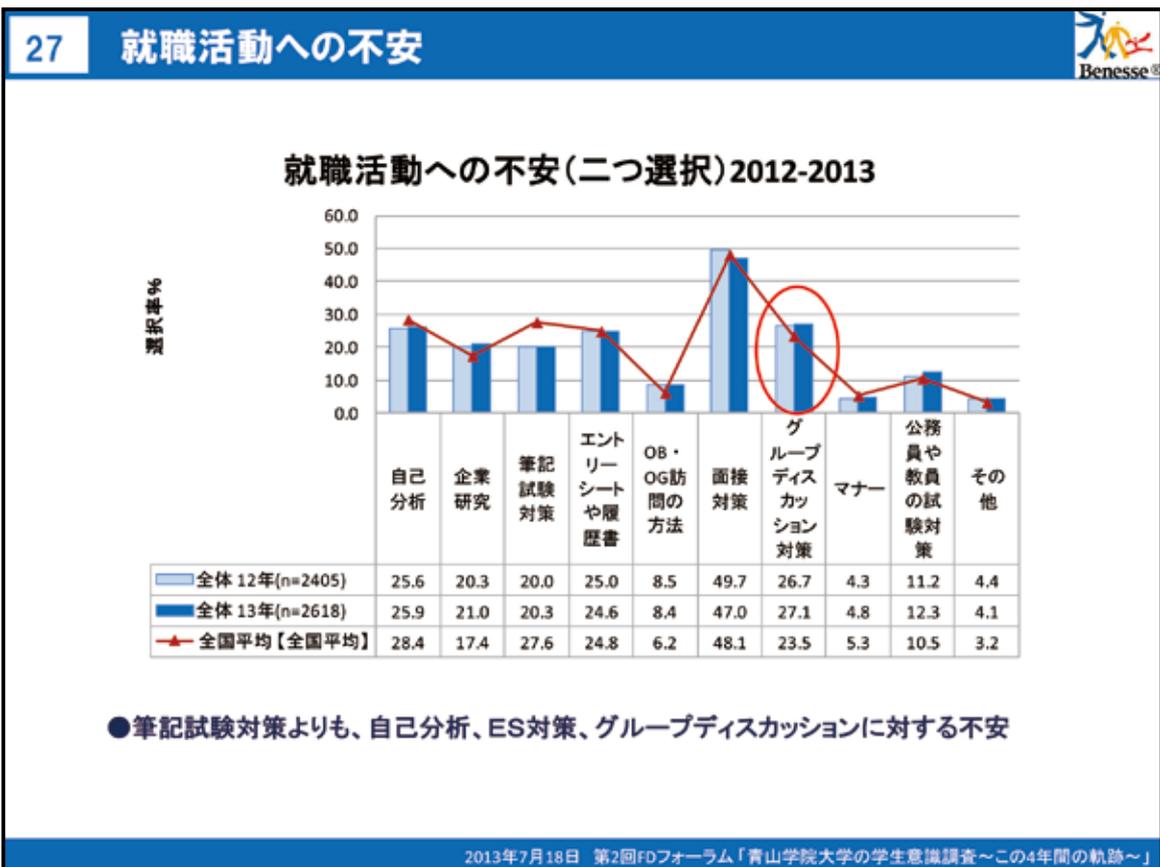
設計割合	肯定率 (%)	否定率 (%)
【全国平均】	64.7	35.3
12年(n=2405)	69.2	30.8
13年(n=2618)	68.9	31.1

- 「とても充実している」+「まあ充実している」と答えた比率・・・81.7%(2013年度)
- 「後輩にとっても勧めたい」+「まあ勧めたい」と答えた比率・・・68.9%(2013年度)

2013年7月18日 第2回FDフォーラム「青山学院大学の学生意識調査～この4年間の軌跡～」





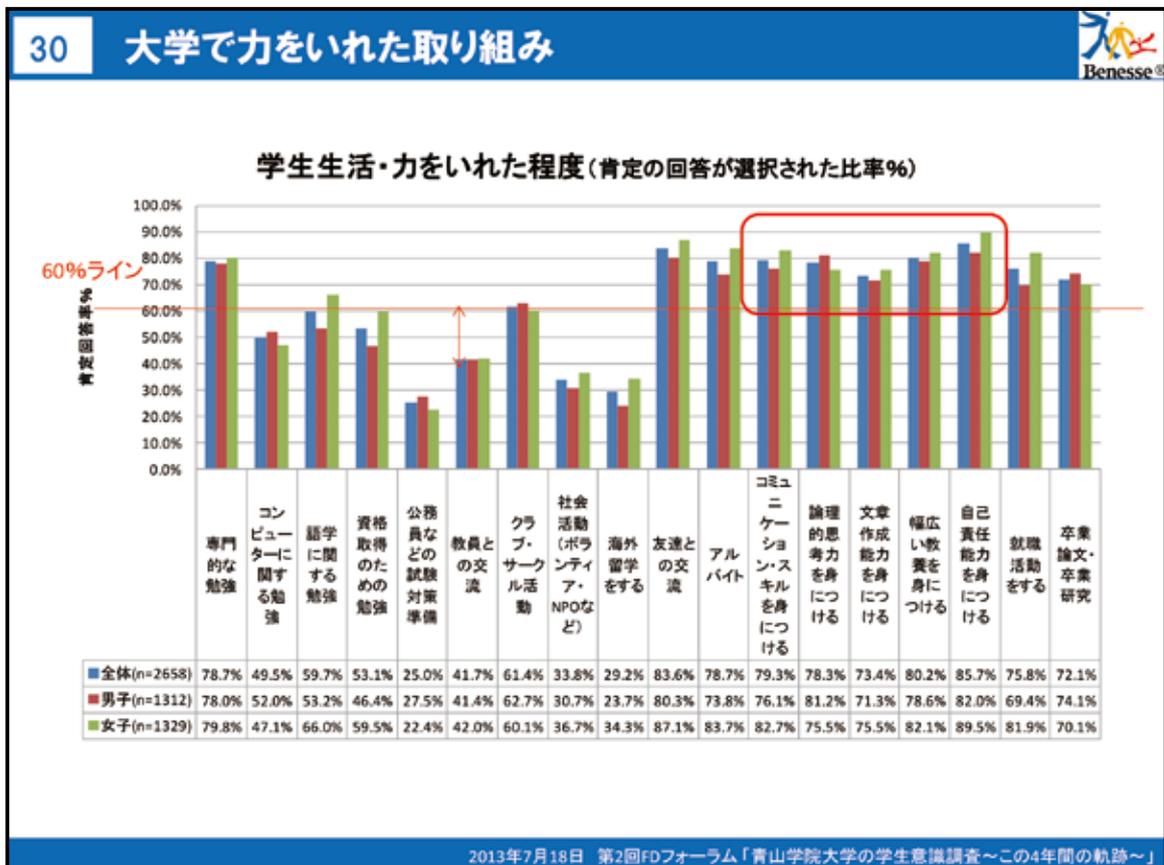
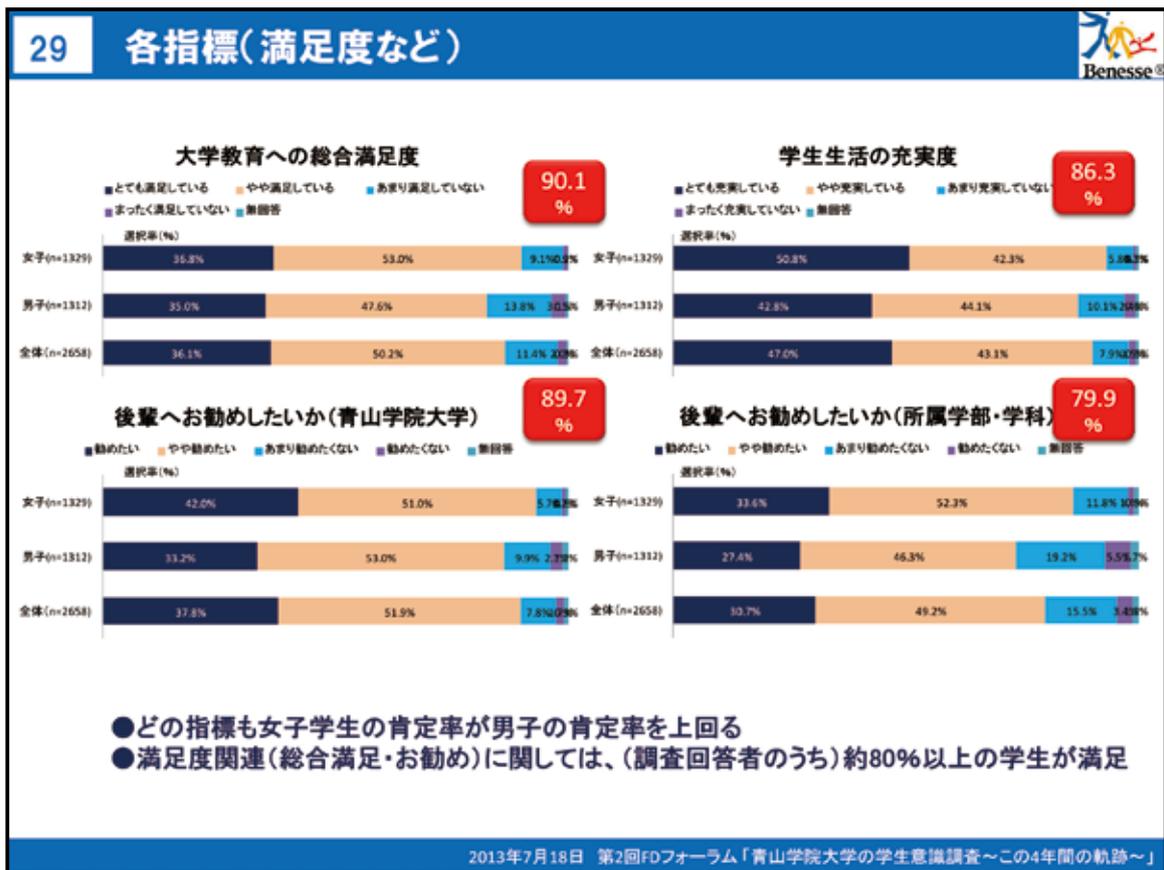


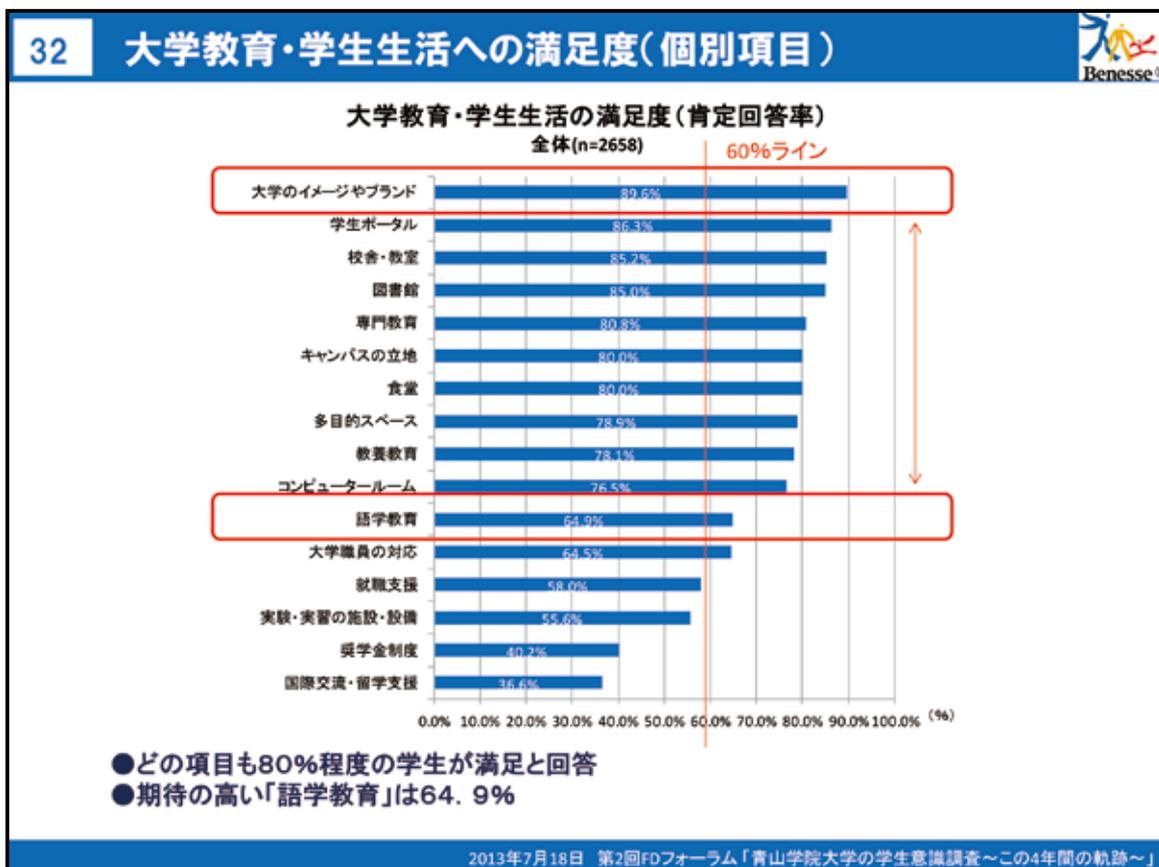
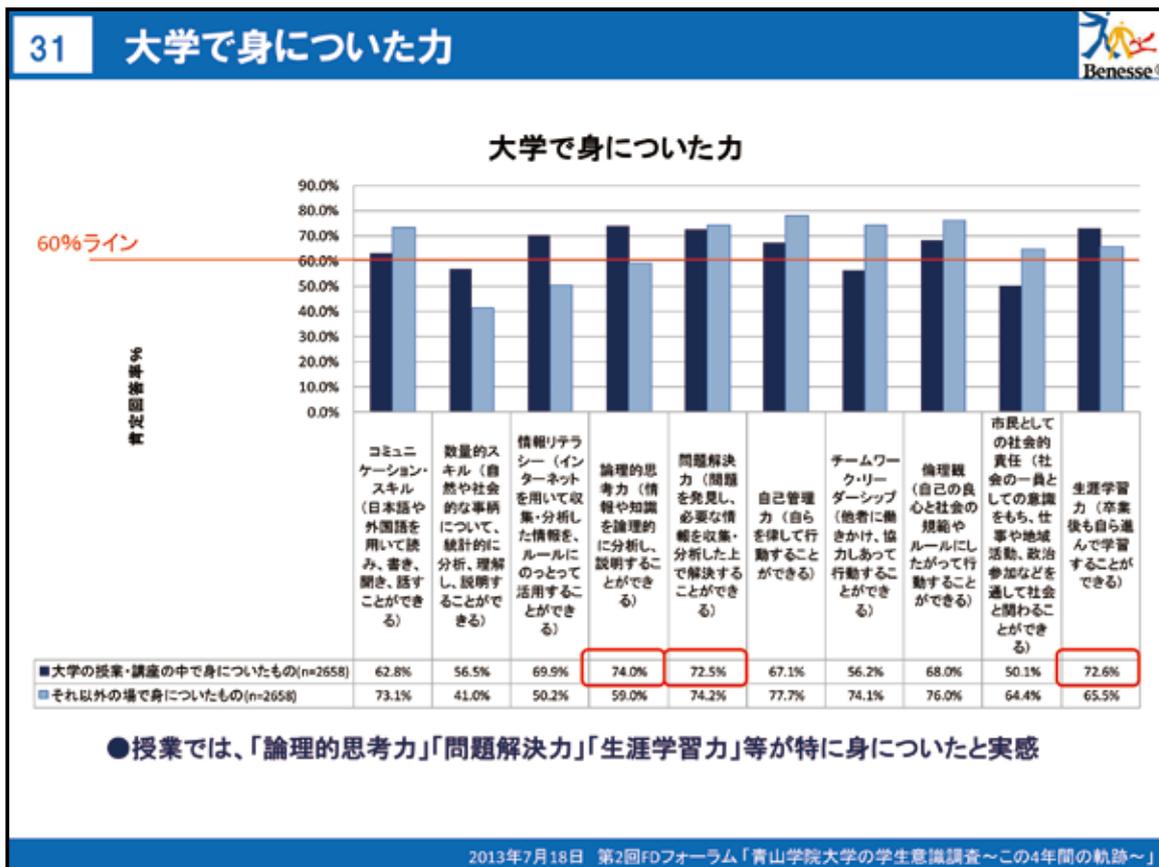
28

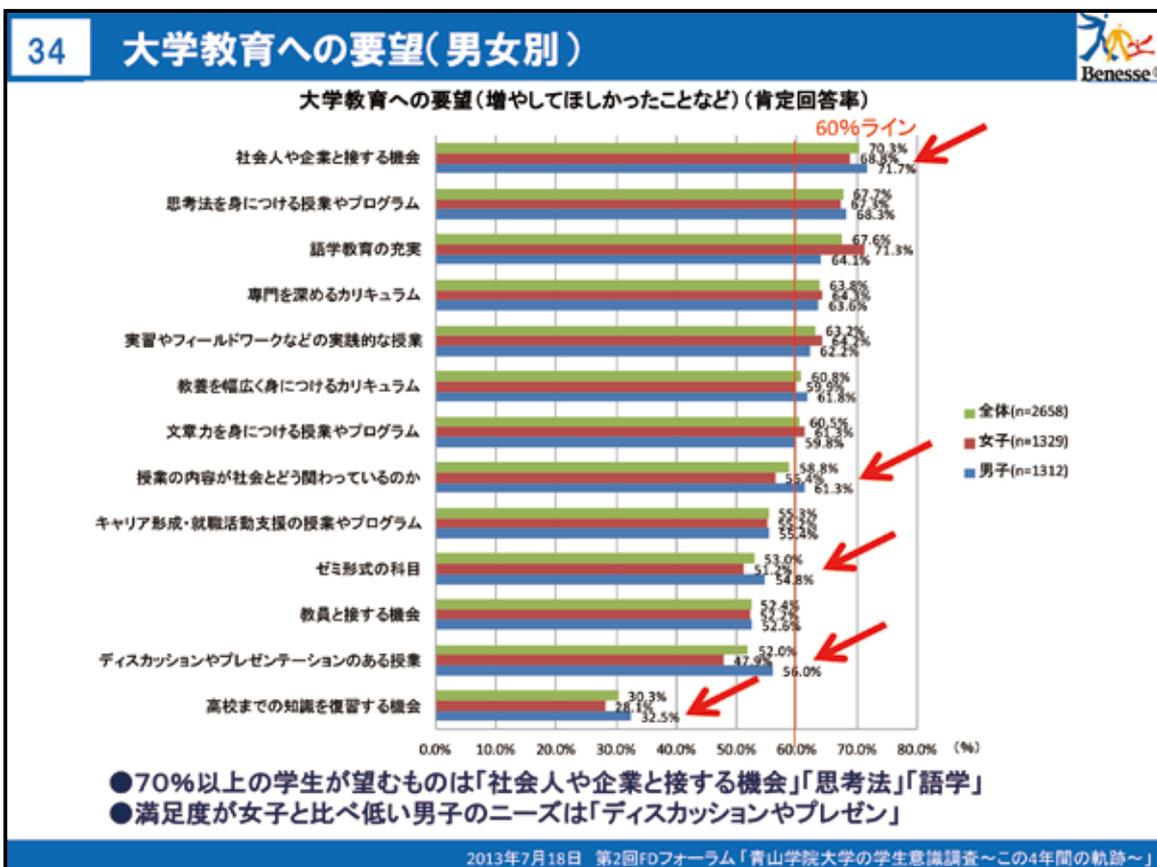
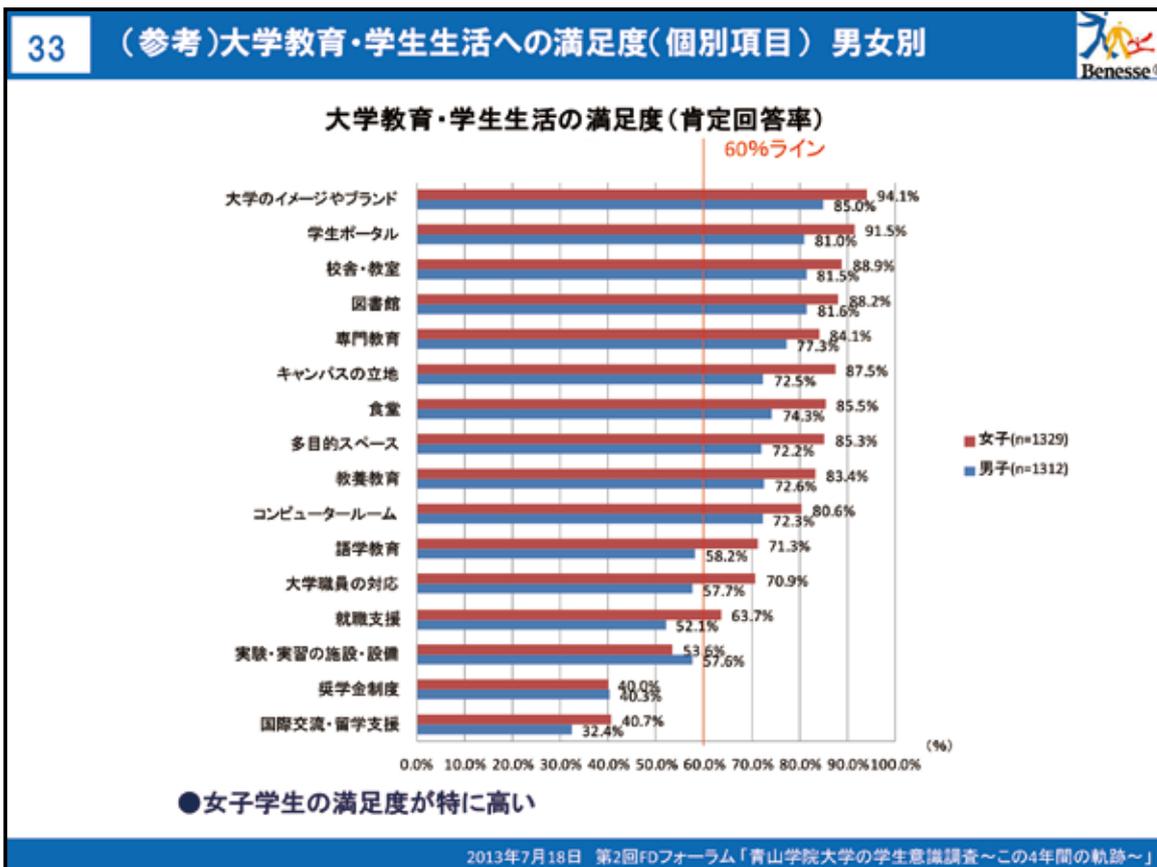
**2012年度 4年生
(卒業生調査)**

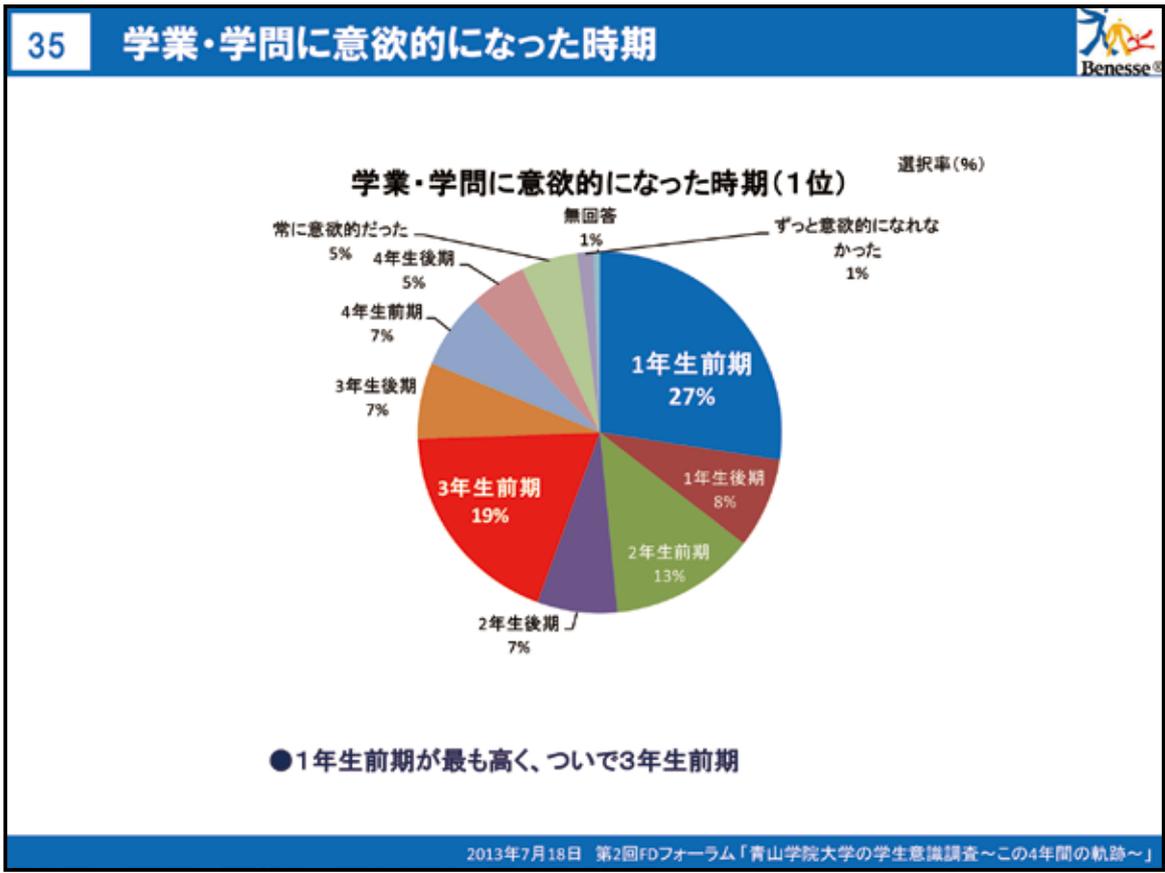
- 青山学院大学はどのような人材を育てたのか
- 卒業前の学生の大学生活に対する感想は

2013年7月18日 第2回FDフォーラム「青山学院大学の学生意識調査～この4年間の軌跡～」





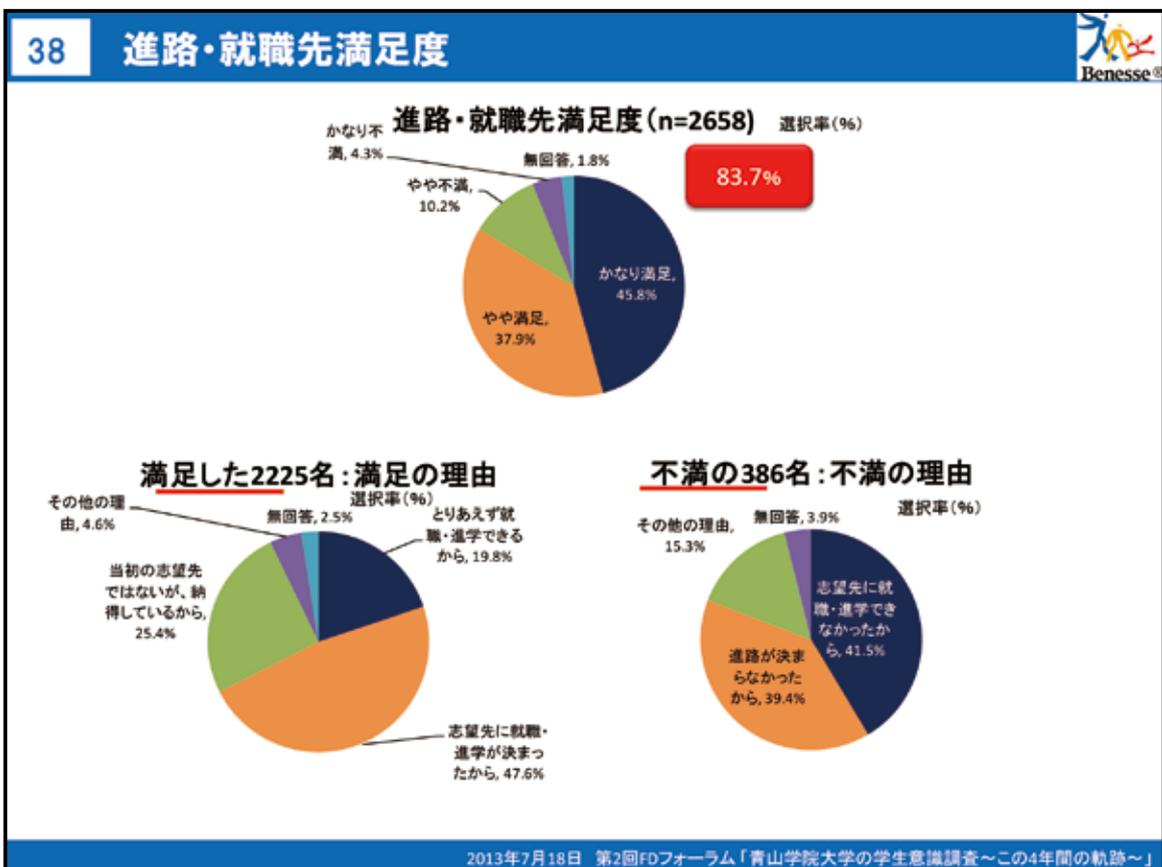
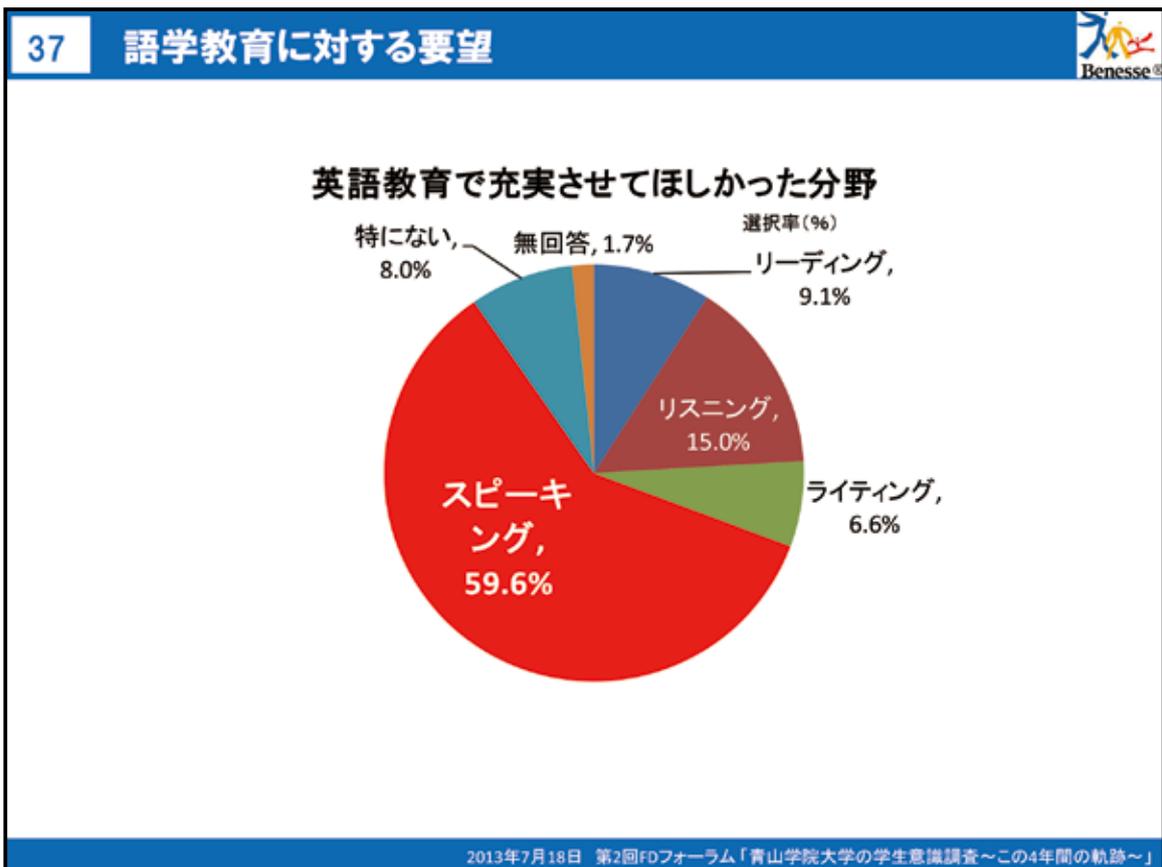


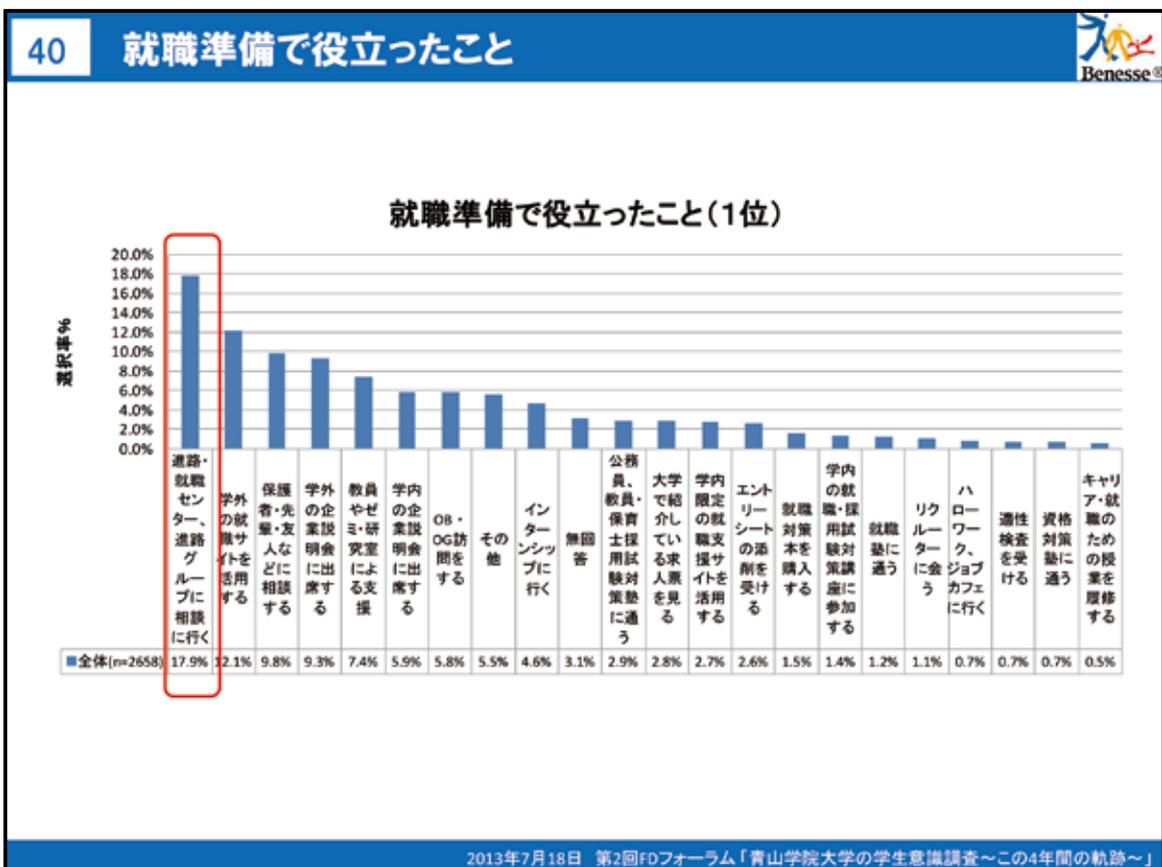
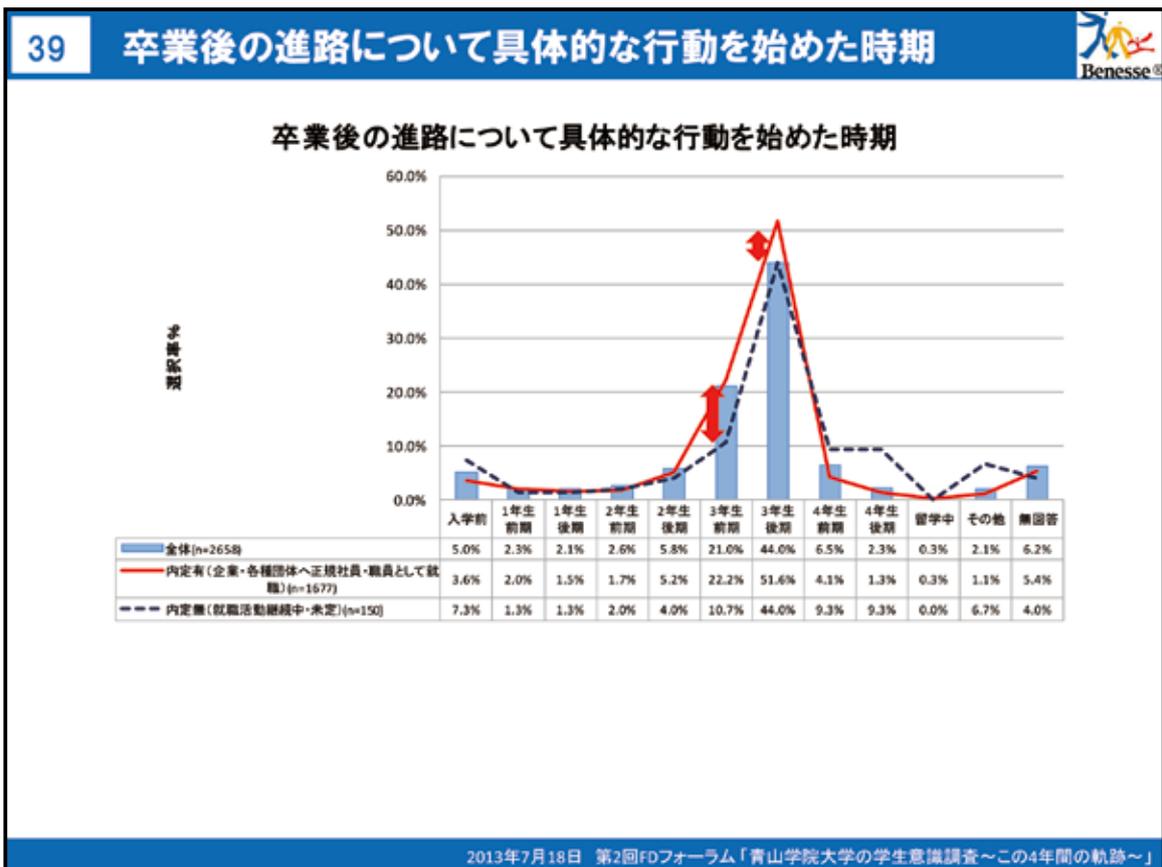


36 学業に意欲的になったきっかけ

1.1_時期(1位)	1年生前期	1年生後期	2年生前期	2年生後期	3年生前期	3年生後期	4年生前期	4年生後期	ずっと意欲的になれなかった	常に意欲的だった	NA	合計
選択人数	729	215	344	185	502	181	179	133	38	133	15	2658
期待していた通りの教育環境だった	22.36%	7.44%	3.78%	0.53%	1.20%	0.55%	0.56%	0.75%	0.00%	12.78%	0.00%	8.24%
入学後のオリエンテーション・合宿などで刺激を受けた	33.06%	9.77%	3.20%	0.00%	0.20%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.75%	6.67%	10.36%
コース選択、ゼミ・研究室選択などが契機となった	4.66%	20.00%	13.08%	14.23%	16.14%	5.52%	8.38%	3.76%	0.00%	4.51%	0.00%	10.01%
普段の授業で学問の面白さを感じた	17.15%	20.00%	24.71%	19.58%	11.55%	6.63%	5.03%	5.26%	0.00%	21.80%	13.33%	15.31%
学業、学問に関連する文章を読んだ	2.74%	1.86%	6.69%	5.29%	3.39%	2.76%	0.36%	0.00%	0.00%	4.51%	0.00%	3.24%
いい先生に出会った	3.70%	7.44%	8.14%	8.99%	9.76%	7.18%	7.26%	6.02%	0.00%	7.52%	0.00%	6.81%
このままでは退学・卒業できないと思った	1.37%	7.44%	11.92%	9.52%	7.97%	6.08%	8.94%	12.03%	2.63%	2.28%	0.00%	6.47%
ゼミ・研究室での学びを通じて	0.00%	1.40%	4.07%	4.76%	20.72%	12.15%	26.82%	12.03%	0.00%	0.75%	0.00%	8.16%
卒業論文の準備・執筆を通じて	0.14%	0.00%	0.29%	1.06%	0.40%	3.31%	8.94%	33.83%	0.00%	3.01%	0.00%	2.90%
進路について意識し始めた	1.78%	3.72%	6.40%	10.58%	15.54%	24.31%	13.41%	5.26%	10.53%	8.27%	0.00%	8.69%
インターンシップで刺激を受けた	0.00%	0.93%	0.87%	0.53%	1.20%	2.76%	1.12%	0.00%	0.00%	0.75%	0.00%	0.75%
就職活動を経験した	0.00%	1.86%	0.29%	0.00%	0.40%	12.71%	8.94%	11.28%	0.00%	0.00%	0.00%	2.29%
海外留学(短期留学、留学研修を含む)を経験した	0.55%	0.93%	6.10%	9.52%	2.89%	5.52%	2.79%	0.00%	0.00%	3.01%	6.67%	3.01%
ボランティアを経験した	0.14%	2.33%	0.58%	0.00%	1.20%	0.55%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.56%
アルバイトが契機となった	0.14%	1.40%	0.00%	1.06%	0.60%	0.00%	0.00%	0.00%	5.26%	0.75%	0.00%	0.45%
学外での活動(上記以外)で学びの必要性を感じた	0.96%	3.26%	2.03%	3.17%	1.59%	4.42%	2.23%	1.50%	2.63%	2.28%	0.00%	1.99%
友人の影響	3.98%	2.33%	3.49%	5.82%	1.39%	1.66%	2.23%	2.26%	0.00%	4.51%	0.00%	3.01%
その他	6.31%	6.51%	3.78%	5.29%	3.59%	3.31%	2.23%	4.51%	50.00%	18.05%	0.00%	6.02%
NA	0.96%	1.40%	0.58%	0.00%	0.20%	0.55%	0.56%	1.50%	28.95%	4.51%	73.33%	1.69%
総計	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%

2013年7月18日 第2回FDフォーラム「青山学院大学の学生意識調査～この4年間の軌跡～」





41

卒業生調査から 教育改善のヒントを探る

**青山学院大学にとって「大学ブランド」が持つ意味合いは大きい
⇒入学時の大学志望度と、卒業時の大学総合満足度に着目して**

2013年7月18日 第2回FDフォーラム「青山学院大学の学生意識調査～この4年間の軌跡～」

42
まとめ①

1年生データ(2013)・・・大学ブランドと語学に期待

- ・専門や教養、語学だけではなく、クラブ・サークルや社会活動、海外留学などさまざまなことに取り組みたいと考える活発な学生が入学
- ・青山学院大学に対しては“大学ブランド”に信頼を寄せ、語学教育、国際交流などに期待している。語学教育に求めるレベルは高い
- ・近年、教員との交流を期待する学生が増加

2年生データ(2013)・・・希望に近い学生生活、充実と満足

- ・入学前に抱いていた青山学院大学に対するよいイメージは維持されている
- ・約8割の学生が充実、約7割の学生が所属する学部・学科をお勧めしている
- ・入学時の希望通り、「語学」「クラブ・サークル」に力を入れている⇒特にコミュニケーションスキルが身についた実感が高いことが特徴
- ・期待が高まる教員との交流を実現している割合は低い

3年生から(2013)・・・希望に近い学生生活、充実と成長、満足

- ・約8割の学生が充実、約7割の学生が所属する学部・学科をお勧めしている
- ・特にコミュニケーションスキルが身についた実感が高いことが特徴
- ・大学教育に対し、「企業と接する機会」を求める割合が約7割、「文章やレポートを学ぶ機会」「教員と接する機会」「思考方法を学ぶ機会」「実践的な授業」「語学教育の充実」は6割を超える学生が希望している(いずれも回答者に占める割合)

4年生から(2012)・・・大学ブランド、教育に満足。論理的思考力や問題解決力が身についた

- ・大学教育に総合的に満足している割合、後輩へ青山学院大学をお勧めする割合は約9割
- ・約9割の学生が充実、約8割の学生が所属する学部・学科をお勧めしている
- ・学業・学間に意欲的になった時期は1年生前期⇒3年生前期。1年生前期では、「オリエンテーションや合宿」などで意欲的になる学生が多く、3年生では「ゼミ・研究室」などが影響している。
- ・学生生活では、専門、教養、語学だけでなく、クラブ・サークル活動やアルバイトなど正課・課外ともに取り組んだ学生が約8割
- ・約8割の学生が、スキル系(コミュニケーションスキル、論理的思考力、文章作成)等に力を入れた実感をもつ
- ・約7割の学生が大学の授業では「論理的思考力」「問題解決力」「生涯学習力」などが身についたと実感している
- ・個別満足16項目のうち、12項目において6割以上の学生が満足している。
- ・特に9割の学生が、「大学のイメージやブランド」に対し満足している。
- ・大学教育に対し、約7割の学生が「企業と接する機会」「思考方法を学ぶ機会」「語学教育の充実」などを要望している
- ・英語教育に対しては約6割の学生が「スピーキング」を充実させてほしいと回答
- ・進路・就職先には約8割の学生が満足しており、就職準備で役立ったことで最も多い回答は「進路・就職センターに行く」

2013年7月18日 第2回FDフォーラム「青山学院大学の学生意識調査～この4年間の軌跡～」

43
まとめ②と今後の活用について

青山学院大学に対する満足度をさらに高めるための観点として

- 入学前後の施策(高大接続、マインドセット)
- 成長を実感できる科目(思考力を鍛える、積極的な対人コミュニケーション)
- 教員との交流(ゼミ、ゼミ形式科目)
- 職員対応
- 早期からのキャリア支援

という示唆が出てまいりましたが・・・

「データは議論のスピードを速め、共通認識をもつための最適ツールです」
 データが全てではなく、データを加えて対話を重ねていただければ幸いです

青山学院大学が目指す人材育成
大学満足度向上

施策立案 (PDCA)

語学 留学 学部 青スタ 就職 広報

教職員の皆様の対話

データにより
可視化された学生像

↔

確認
すり合わせ

日ごろの皆様の実感

2013年7月18日 第2回FDフォーラム「青山学院大学の学生意識調査～この4年間の軌跡～」

2013年7月18日 第2回FDフォーラム「青山学院大学の学生意識調査～この4年間の軌跡」

学生意識調査の活用事例報告

社会情報学部 その地味な取組を振り返る

学生の現状把握のために
 学部コンセプトを常に意識していくために
 カリキュラム設計への指針を得るために
 そして 学生にとっても意味のある調査とするために

社会情報学部 稲積宏誠

Faweb School of Social Informatics, Aoyama

2013年7月18日 第2回FDフォーラム「青山学院大学の学生意識調査～この4年間の軌跡」

社会情報学部のおかれている状況

- 2008年発足：
 - 発足と同時に青山回帰の英断 青山初完全郊外型新設学部としての歩み始める 郊外型キャンパスとしての豊かな空間を享受したい
- 既存の理系資産・文系資産を有効活用することが学部としての存在意義
- 国立文型・私立文系志望者の中から数学好きの受験生の発掘
- 理系から文系に転じた受験生，文系で情報分野に関心のある受験生の発掘
- 学生を育てるための教育で他学部との差別化を図る

Faweb School of Social Informatics, Aoyama 2

2013年7月18日 第2回FBフォーラム「青山学院大学の学生意識調査～この4年間の軌跡」

社会情報学部はこのような学生を育てたい

- **骨格・筋肉は理系要素：**
統計 コンピュータ 基礎数学を必修 誰もが数理・情報のセンスを磨く
- **心・表情、外見は人文社会系の幅広さ：**
経営 経済 心理 学習 人と社会への視点を体系的に学ぶ
- **社会・人間・情報が織りなす現代社会のさまざまな問題解決に取り組むことのできる人材**

学生・企業・社会に対してこのことをいかに理解してもらうか

Fawek School of Social Informatics, Aoyama

2013年7月18日 第2回FBフォーラム「青山学院大学の学生意識調査～この4年間の軌跡」

調査は何のために

- **学生の姿をデータから読み取る：**
本学部の弱み=決められないこと、それをどのように解消できるか
在学中に方向性を見出すことができるのか
- **カリキュラム改革へ：**2012年度から新カリキュラム導入
「社会、情報、融合」 から 「社会、情報、人間」へ
そしてカリキュラム改訂とコース制へと進める
- **データからアピールポイントを見出す：**
企業に対して学部コンセプトをどのように理解させるか、
学生の実態を意識的に見せる *
- **学生にとっても調査データが機能する：**
調査は教員のため から 自分自身へもフィードバック
教育改善だけではなく キャリア支援のためのシステム開発

Fawek School of Social Informatics, Aoyama

求められる人材を新アプローチで輩出

多様な世界で活躍できる人材輩出を目指した学びのステップ

人材育成の目的と教育戦略の要

近年増加しているグローバル化の進展に伴い、企業側もグローバルな視点で人材を求め、グローバルな人材を育成する必要がある。青山学院大学は、グローバルな視点で人材を育成し、企業に貢献できる人材を輩出することを目的として、グローバルな人材育成戦略を推進している。

教育担当者の役割とスキルアップ

教育担当者は、人材育成の鍵を握る重要な役割を担っている。最新の教育技術や教材を活用し、学生の学習意欲を喚起し、実践力を身につけさせることが求められる。

国際化を推進するグローバル人材の育成

国際化を推進するグローバル人材の育成には、英語力の向上だけでなく、異文化理解能力やコミュニケーション能力の育成が不可欠である。

1-2 年次
基礎的知識の習得と実践力の育成。英語力の向上と異文化理解能力の育成を目指す。

3-4 年次
専門知識の習得と実践力の育成。グローバルな視点での課題解決能力の育成を目指す。

学部が育てる4つの力
 1. 基礎的知識の習得
 2. 実践力の育成
 3. 異文化理解能力の育成
 4. コミュニケーション能力の育成

採用ご担当者の皆様へ

青山学院大学 社会情報学部



2013年7月18日 第2回FBフォーラム「青山学院大学の学生意識調査～この4年間の軌跡～」

学生はどのような意識で入学したのか

Fawel School of Social Informatics, Aoyama

2013年7月18日 第2回FBフォーラム「青山学院大学の学生意識調査～この4年間の軌跡～」

【志望度・教育理念認知率 推移】 2010-2012

【社会情報学部】

	(大学)第一志望	(学部学科)第一志望	教育理念認知率
【社会情報学部】10年	45.9	49.8	59.2
【社会情報学部】11年	47.5	52.5	51.6
【社会情報学部】12年	44.6	64.5	57.9
【大学平均】12年	38.6	74.3	60.6

（一般入試）

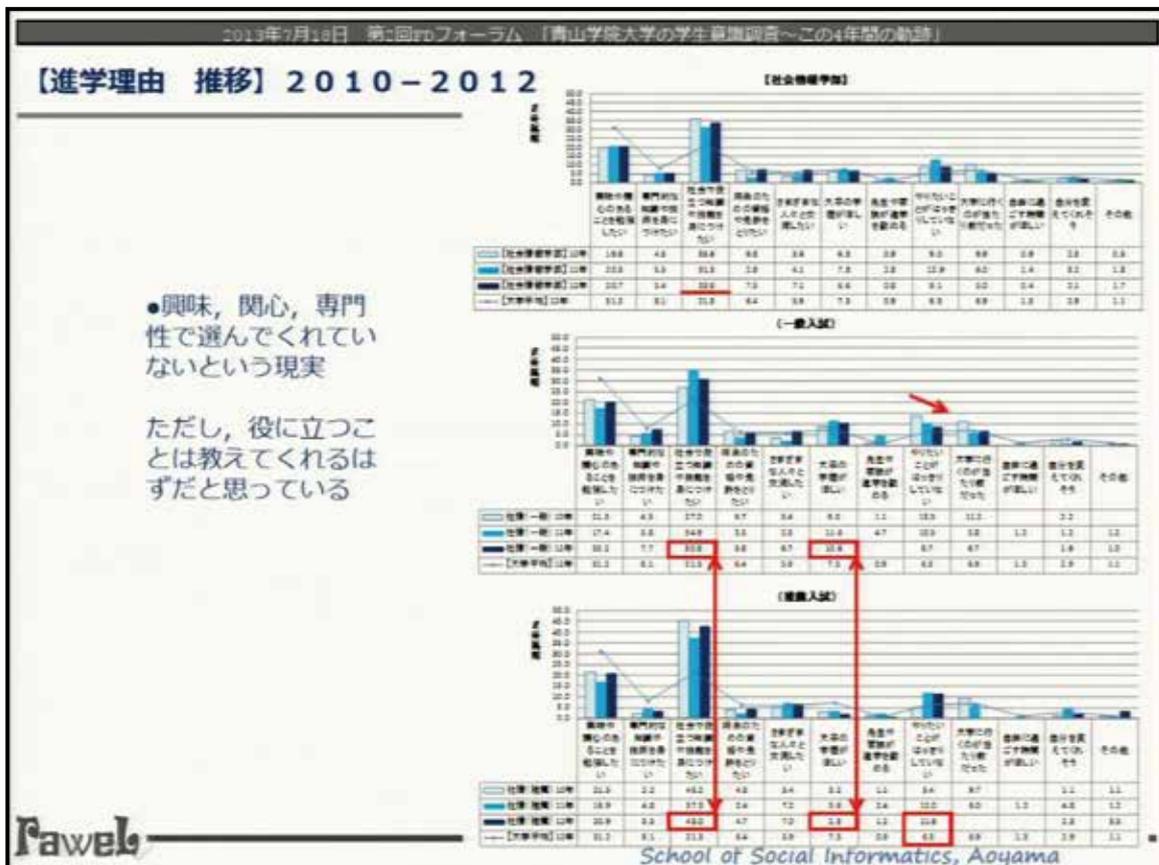
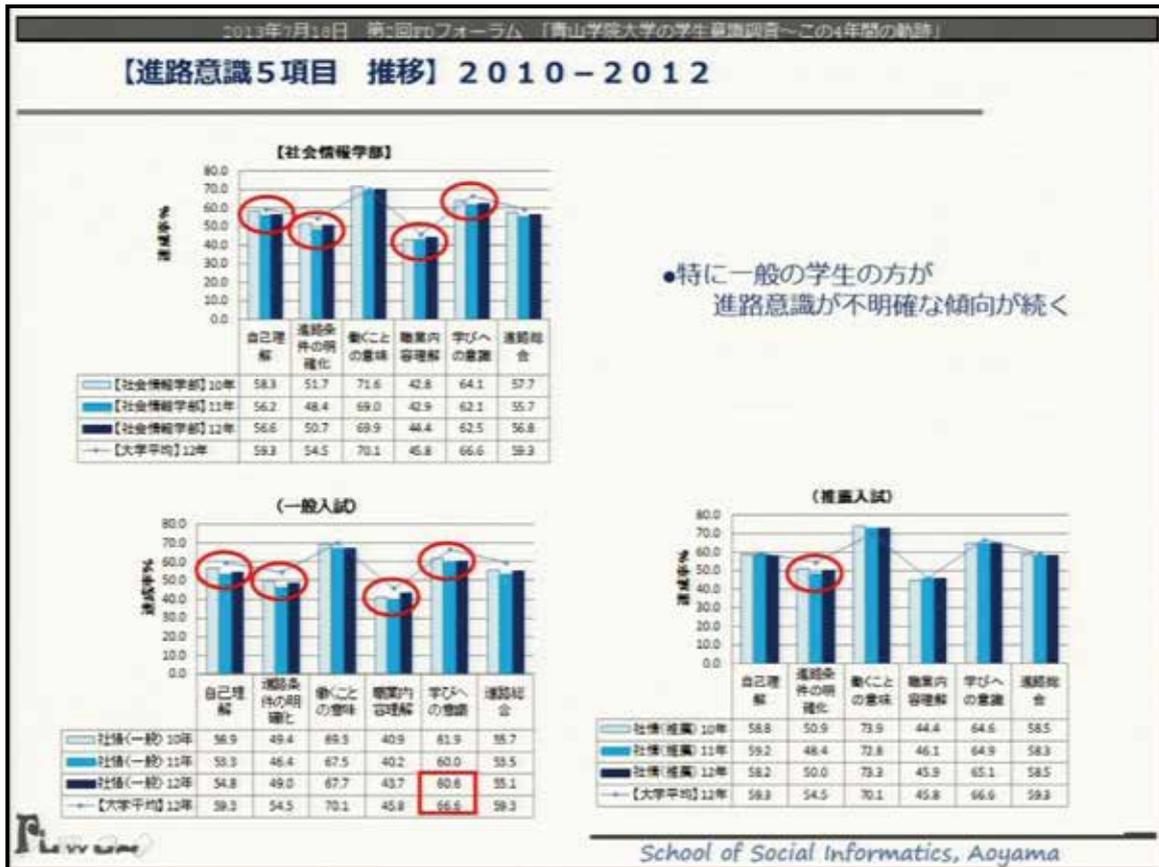
	(大学)第一志望	(学部学科)第一志望	教育理念認知率
社情(一般)10年	21.3	37.1	37.1
社情(一般)11年	22.1	37.2	36.0
社情(一般)12年	20.2	52.9	39.4
【大学平均】12年	38.6	74.3	60.6

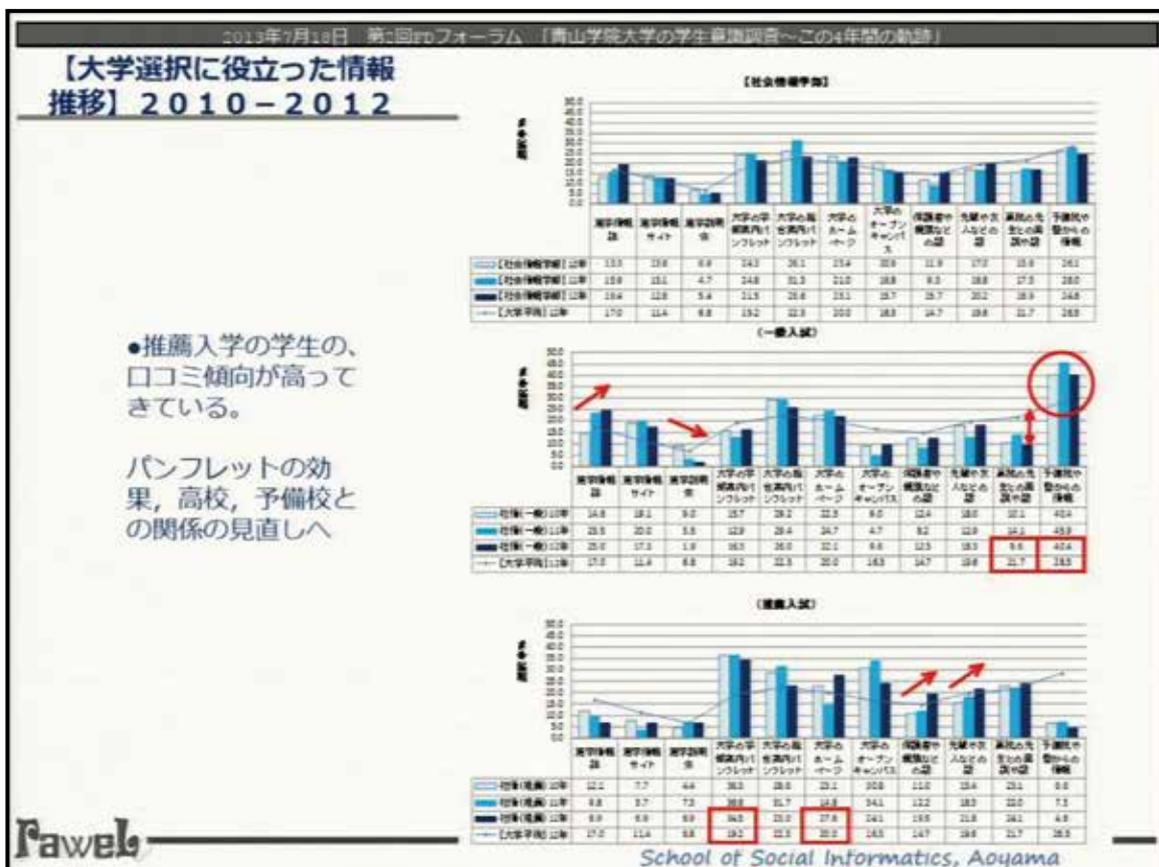
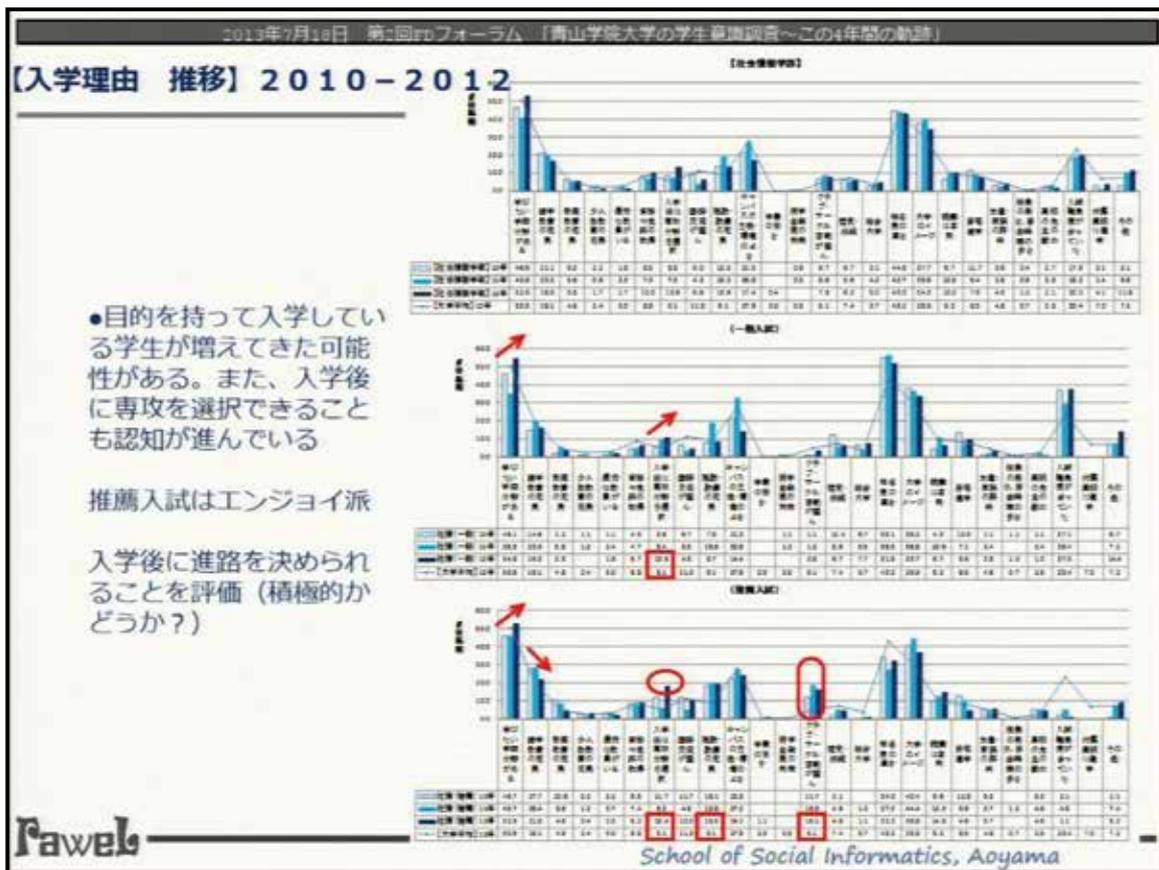
（推薦入試）

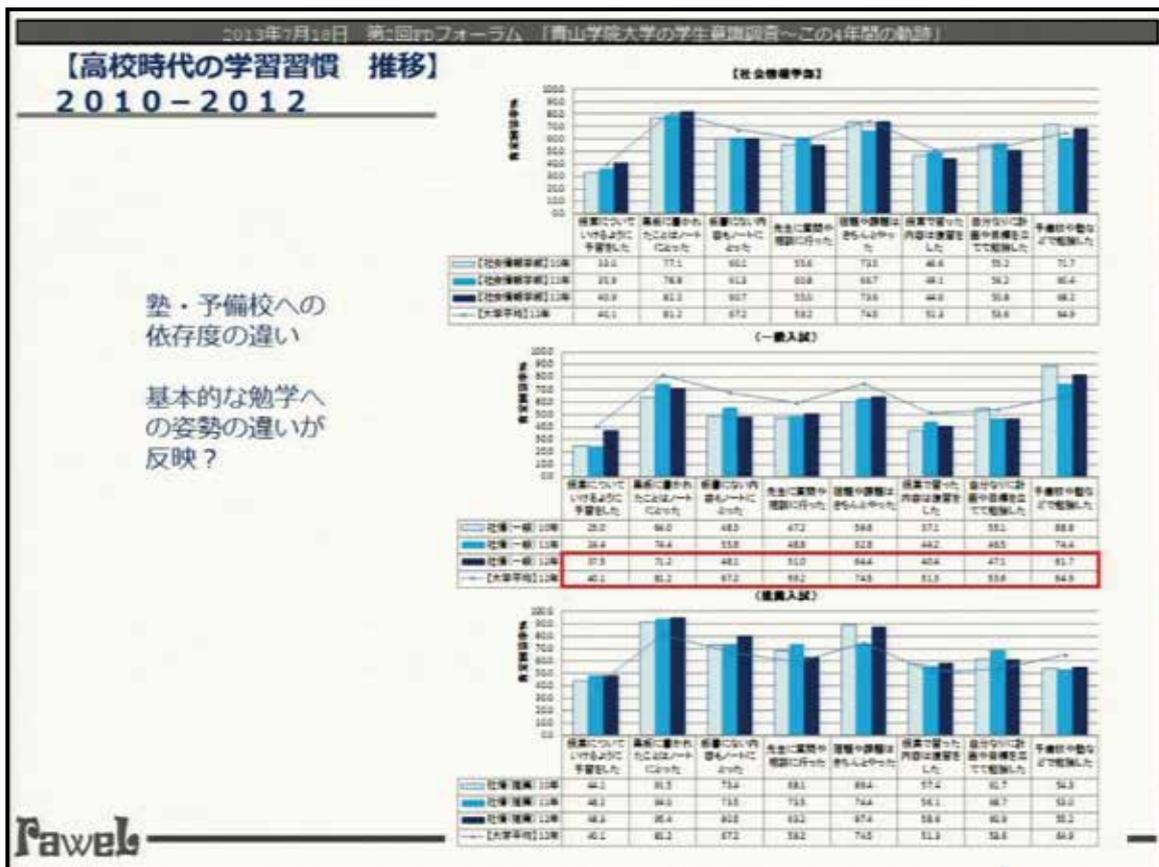
	(大学)第一志望	(学部学科)第一志望	教育理念認知率
社情(推薦)10年	76.6	69.4	80.9
社情(推薦)11年	80.7	72.3	75.9
社情(推薦)12年	77.0	75.9	82.9
【大学平均】12年	38.6	74.3	60.6

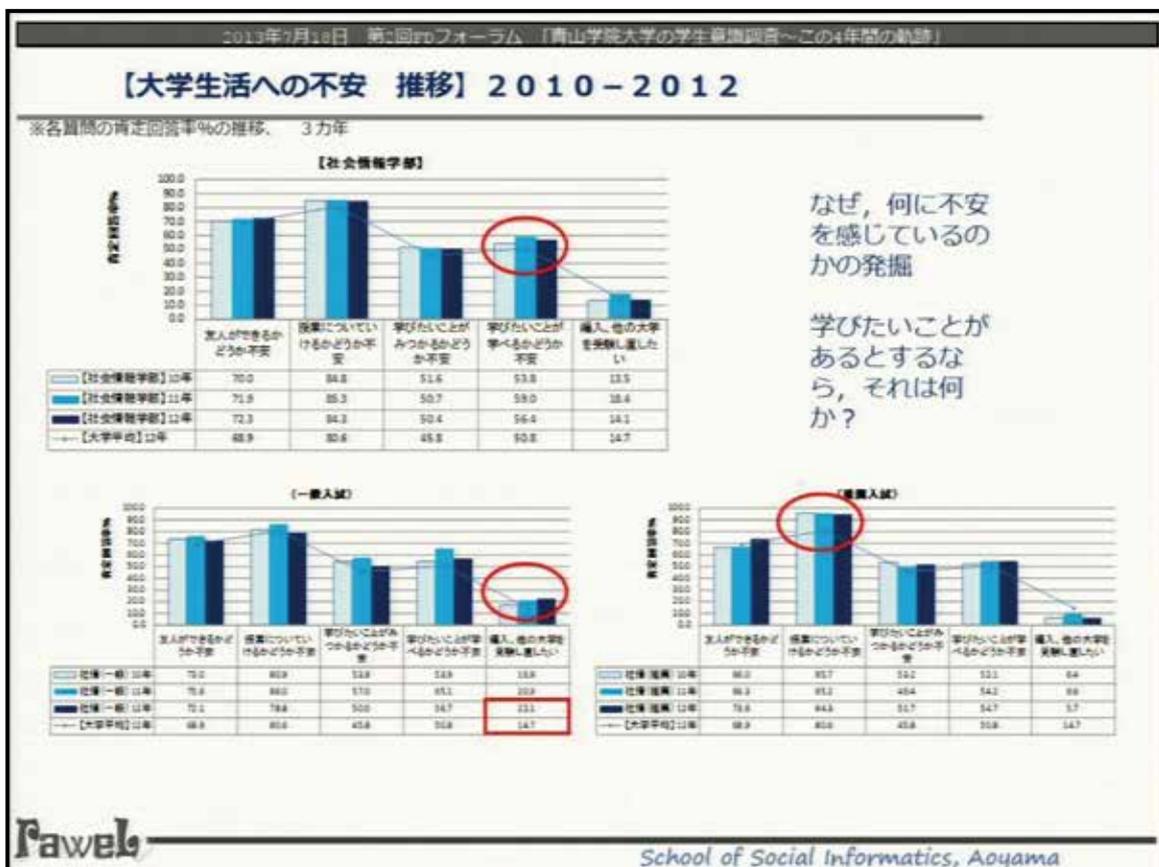
●例年低めの学部学科志望度だが（一般が特に低い）、推薦は3力年連続、上昇した。
また、一般入試も今年度の数値は高めに出た

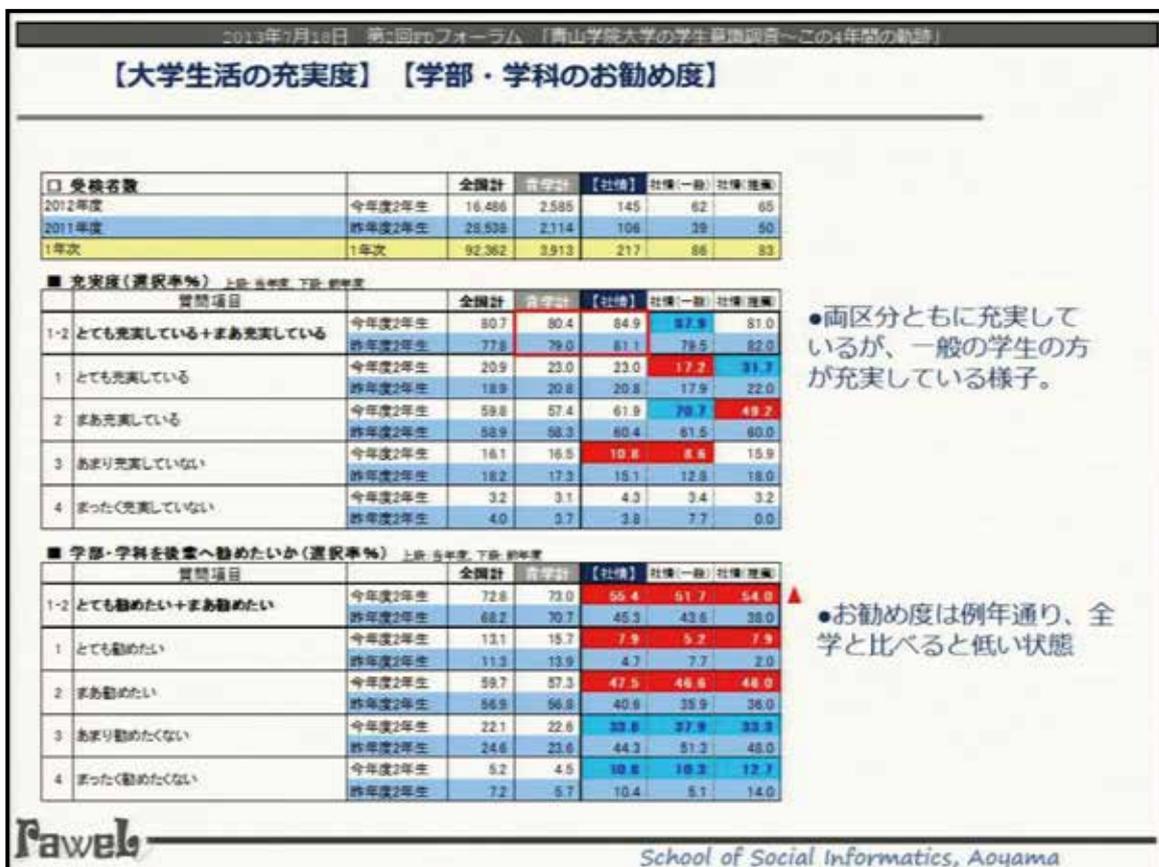
Fawel School of Social Informatics, Aoyama

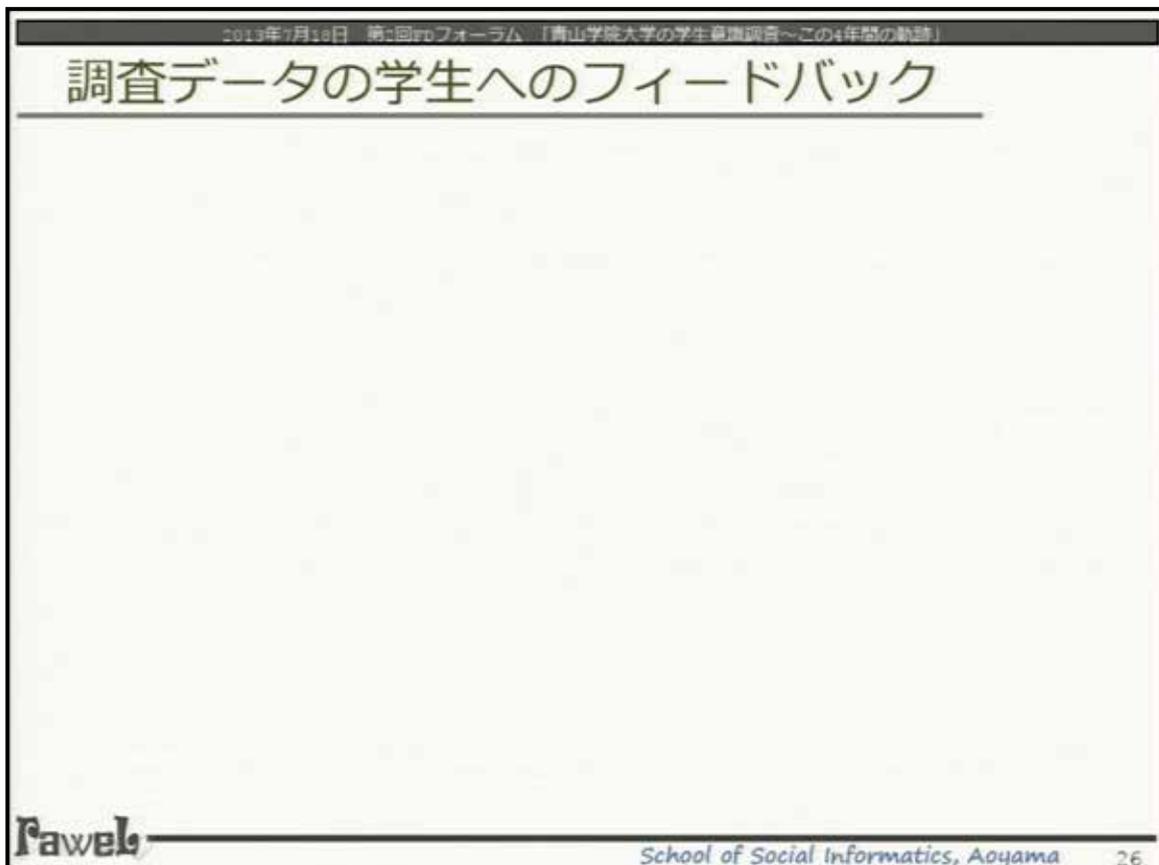
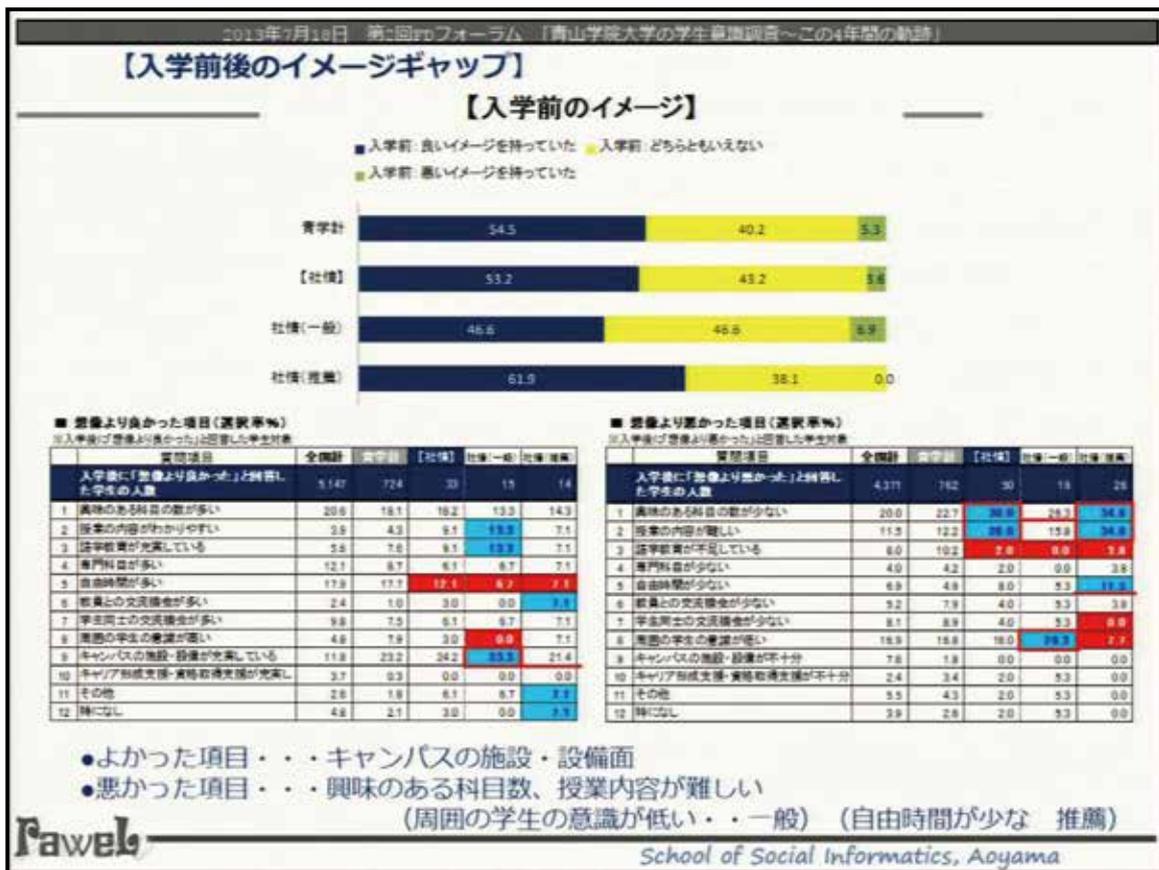


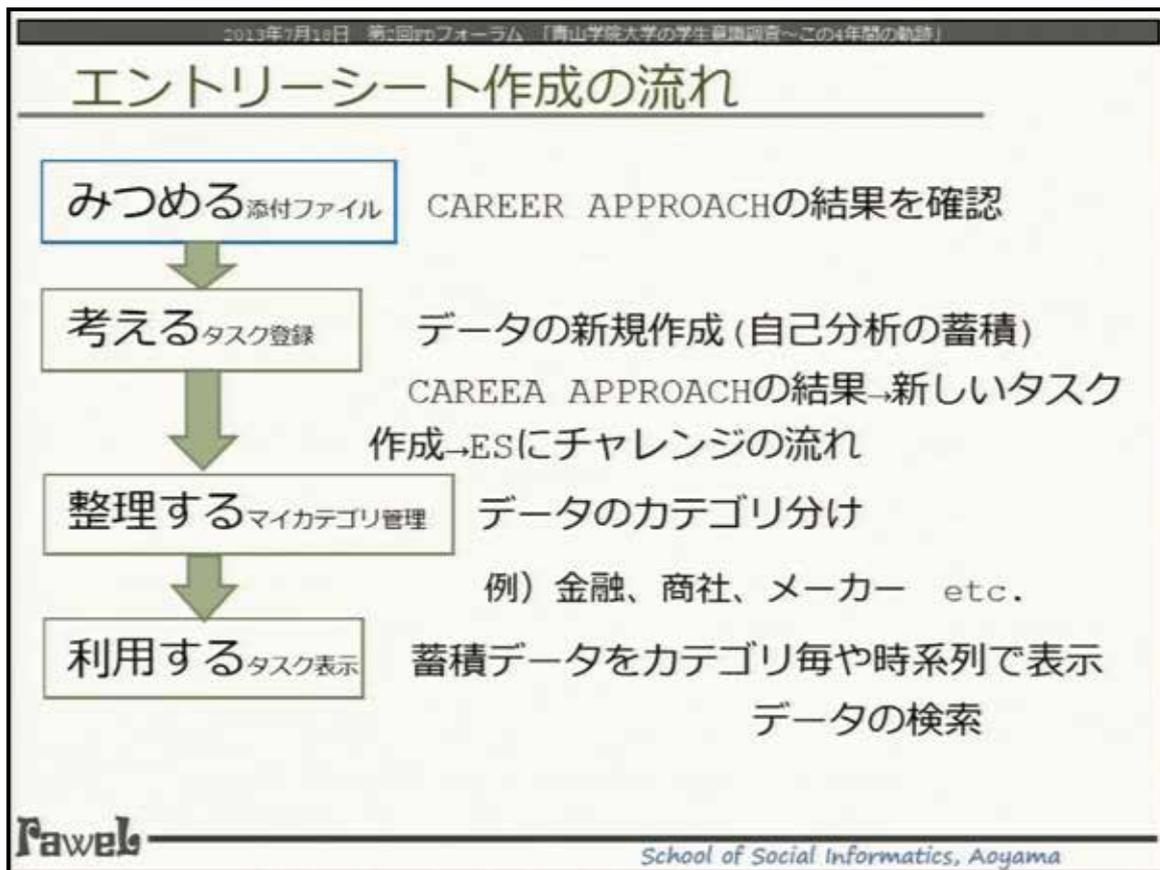




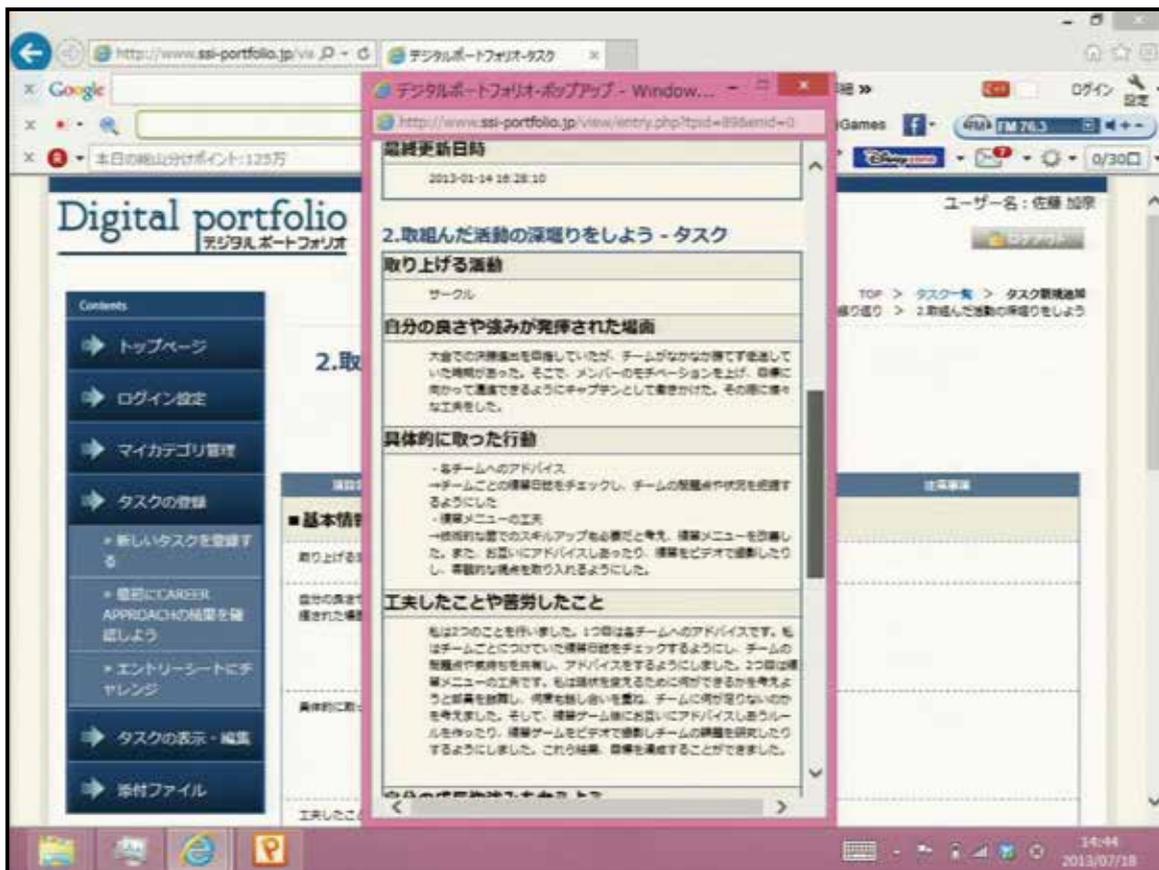












青山学院大学FDフォーラム報告書

青山学院大学の学生意識調査 ―この4年間の軌跡―

発行日 2013年12月1日

発行 青山学院大学全学FD委員会

学務部教育支援課

〒150-8366 渋谷区渋谷4-4-25 17号館2階 スチューデントセンター

TEL 03-3409-4165 FAX 03-3409-9423

